る通り此間、わが身が世話近付きに成つたあの勘藏、そなたは剛染の事なれば、町所も知つてゐやろ、引きずつて來て此譯を」「エ、申しわしぢやてゝ剛染といふでもなし、お前が直々つばめの相對、マアそれをわしがどうして知るものぞい。根が大枚の金を、粗末に取遣なさるゝから」と、取りあへもせぬ顏付に、傳兵衛は口惜しさ、駈出さんとする所、「コリヤ待て傳兵衛動くな」と、聲をかけて官左衛門、「コナ似せ金遣ひの大騙め、大切なる道具の代金、此樣な似せ物を授けようとしをつたな、晝强盜の泥坊め」と、たぶさ握んで引倒し、金の包を目鼻の間、打ち付け〳〵投付くる、無法の打擲、覺えなき身も言譯なく、齒を喰ひしばる無念の涙、「ホヽォ無念でも口惜しくも、手向ひならぬ身の邪ま、似せ金をつかまされ、祕藏の鍔を騙られた上からは、旅宿へ引きずりぶちはなす」と、引立つる手をもぎ放し、ぐつと捻ぢ上げ突飛せば、振りかへつて、「ヤア左内殿、御手前にはマア何時から是へ」「ア、イヤ先刻より樣子一々見聞いたした」「フヽムお聞き有つたら申さいでも知れた科人、引立つるをなぜ留めさつしやるぞ、なぜ邪魔しめさるぞ」「イヤ此瀧口が止めましたは貴殿のお爲」「ナヽヽ何と」「サアたとへ傳兵衛、まことの騙り贋金師にも致せ、左樣の吟味せいたうは、當地の御代官所より有るべき事、何ぞや他國仕官の身を持つて、いはれざる吟味仕置、若し代官所より御察度あらば、云ひわけは何と成さるゝぞ」「サア其の儀は」「如何にお急きなされたとて麁忽千萬、百兩の手形の出來るまで、取り置かれた手附證文、それなる男へお戻しなされて、彼めを歸して遣はされい」「そりや成りませぬ、拙者が賣つた鍔代の三百兩、誠の金請取るまでは此質物、返す事存じもよらず」「フヽム、コリヤ成程御尤、傳兵衛いつぞや其方より借用した三百兩、只今急度返濟する、此金を鍔代に、官左衛門殿へ進ぜれば、贋金遣ひの名を免れるではないかと、サヽヽ敎へはせぬがともかくも」と、取り出し渡す三百兩。「イヤ申しあなた樣へ三百兩、御用立つた覺えは」「ハテさて物覺えの惡い男」と、目顏で知らせ敎へられ、はつと戴く有りがた涙、「是官左衛門樣、中賣めにのめ〳〵と、騙り取られた八つ橋の鍔、にせ金を取つたは此傳兵衛が誤り、左内樣の御蔭にて、三百兩をまどひます。夫れ請取つて最前の、手附けの證文お返しなされませ」「オヽ眞の金請取るからは、戻してくれる」と證文投出し、「どう見ても中賣めと、肯き合うた手錬事、其儘では濟まされぬ、吟味する所で吟味させう」と、底意地わるき詞の針、六左衛門は手附の一札、取りあげて引裂きすて、「ア、氣の毒な樣子なれど、我れら風情の何と判斷、どなたも是に」と立上る。左内は聲かけ、「コリヤ〳〵揚屋、ちと尋ねたい事が有る。おしゆんを身請せんといふ客の名が聞きたい」「ハイ其お客は」と、云はんとするを、「コ

リヤ〳〵六左衛門、何をうた〳〵〳〵と、喋らずと早く歸れ」「是はしたり官左衛門殿、入らざるお世話、コリヤ其客は何國の誰、名は何と」「サア其お方は、どうも此處では申されませぬ」「オ、其はず〳〵、サアもう何にも用はない、ちやつと往ね〳〵」「ハテ其元にはいらぬお構ひ」「イヤ何官左衛門殿、我々國元を出立の砌、遊所へ足ぶみ堅く停止と、御家老中より嚴しく仰渡されたは、貴殿にも覺えてござらうがの」「いかにも」「夫にまた彼の者が名を、六左衛門とはどうして御存じ」「サアそれは、アノ物でござる」「ハテとぼけた顏めさつても、遊所通ひは明白々々」「ハレ滅相な左内殿、身はついにあの者が所へ入りこんだ覺えもなし、逢ふたもたつた今が初め」「イヤサ言はるゝな、初對面のあの者を、たつた今六左衛門と、彼が名を知つて呼ばるゝ筈がない。此趣を本國へ申し遣はせば其元の御身の上、サアそこを朋輩の好みに今日の所を聞きのがしに仕り、其代り傳兵衛が今日のしだら、此場限りに風聽御無用、ナンと御得心か、若し不得心なら、おしゆんが身請の客の名までも詮議しぬいで」「ア、、、いや是れ左内殿、何のまあ不得心、傳兵衛はもとより、親喜左衛門は出入の町人、懇意の中、何事も此座切りにさらり〳〵、とかくかやうな所に長居はおそれお先へ參る」と、云ひ捨てに立かへれば、跡に揚屋も立場なく、「こちも長居はおそれ有り、早ういなう」とこそ〳〵と、我家を指して急ぎ行く。苦り切つたる瀧口左内、「ヤア萬八め、儕よう傳兵衛をそゝり上げたな、此一卷詮議の仕樣もあれど、科人も出來、且は諸方の掛り合、何にも云はずに濟してくれる。イヤ何傳兵衛、身も喜左衛門に逢ひながら、同道して立歸らん、いざお行きやれ」と瀧口が、伴ひかへる傳兵衛に、底氣味惡く萬八も、跡に付添ひ立ちかへる。道引ちがへうそ〳〵と、來かゝる横淵官左衛門、こなたよりも勘藏が、ちらと見付けて立寄れば、萬八も走り著き、「今日は互に上首尾〳〵。シタガ左内めがほくあげかけ、さて冷い目」「オ、サ此官左衛門も氣を冷した、其代りにはまんまと三百兩、一冷いな目に逢はぬは勘藏われひとり」「イヤもう出替、お前を待合して、さつきにから其處らあたりをぶら〳〵〳〵、サア八橋の鍔戻します」「オ、此方からも分け口」と、百兩づつを二人に渡し、「さて身が當り前の百兩を、おしゆんが手附に渡し、其内に金の工面、是といふも皆萬八、その方の蔭」「イヤ私も勘藏も、お前の手先を働くは、分口の金が欲しさ。シタガ左内めに穴を見られたから、尻尾の出ぬうち、爰から直に駈落」「オ、サ此勘藏も當分は、影をかくさにや成るまいかい。何に付けても此百兩、ホ、オうまい〳〵」と三人が、立別れてこそ行くすゑは　三重。

揚屋の段

「其元は、主人鹽谷の讐を報ずる所存はないか」「氣も無い事〳〵、家國を渡す折から、城を枕に討死というたのは御臺樣への追蹤、時に貴樣が、上へ對して朝敵同然と、其場をついと立つた。我等は跡に鯱張つて居たはいかいたわけの、所で仕廻は附かず、御墓へ參つて切腹と、裏門からこそ〳〵〳〵、今此安樂な樂しみも貴殿のお蔭、昔の好み忘れぬ〳〵、堅みを止めて碎けをれ」「いか樣此九太夫も、昔思へば信太の狐、化露していつこん汲まうか、サア由良殿、久しぶりだ御盃」「また頂戴と會所めくのか、さしをれ呑むは」「呑みをれさすは」「狂言のお邪魔ながら、官左衞門樣へ申し上げます、御國元より御狀が參りました」「何々國元よりの書狀とや、どれ〳〵亭主是へ〳〵。フ、ム、イヤもうこりや何でもない見廻の狀、何事かと思うたに、家來共も氣の附かぬ、爰まで持たせておこすに及ばぬ。はずみ切つた狂言の、大事な所で腰が折れた、殘念至極」と拳を握れば、仲居藝子も氣の毒さ、「ホンニもう御家來衆の不粹なから、いらぬ狀おこして、大事な所で間が拔けた。なうおさよ殿、おそめどん」「サイナ、官左衞門樣の由良之介はえらいもの、尾上梅幸そこ退けぢや」「ソレ〳〵大抵うまいこつちやない」と、笑

ひを嚙みて機嫌取り、「イヤもうお相手になつた此久八、叶ひませぬ。今歌舞妓で刃金を鳴らす三五郎や十藏に、お前の藝がやりたい、いらぬ所に藝者が有る」「フ、ムえらいもので有つたろがの、今宵は身が思ひ付きで、仲居交りのしのぎ狂言、此あとが二蝶々で、娘のお縫が濡髮の長五郎、其間の狂言に、我等が踊りに仕らう。サア〳〵何ぞ唄つてくれろ」「マアお一つ上つてさ」「チツトこぼれる、おたつ殿替銚子、それ高調子で、ナント立田川では紅葉を流す、我は君ゆゑ浮名を流す」「イヨ〳〵、やんや〳〵」「どうだ〳〵、きついものか〳〵、まだ有らうが〳〵」「ホンニもう眞とも〳〵、ホンマニ猿でござります」と、云ひすて遁ぐれば、「につくい仲居め、了簡ならぬ」と荒れ出す。亭主は陰より手すりたいはう、久八も押止め、「女子共の仇口に腹を立つとは、旦那不粹々々〳〵、マア〳〵下に御出でなさりませ。そしてもうおしゆんさまが見える時分」「ホ、オ兎角きやつが事ぢや、揚詰にしてくどけども、帶解かぬ情張者、この横淵も精が盡たれど、そこが意氣張、是非とも傳兵衞と手を切らせ、女房にせにや顏が立たぬ。コリヤ六左、かねて相談して置いた、身請の手附百兩は、すなはち今宵渡さんと持參致いてをる。肝心の狂言は、國の飛脚で間拔がする、踊は女子共にはんでふを打込まるゝ、何とやら氣が減入つて面白ない、座敷をかへて酒にせう」「ホンニそれ〳〵、いかう座敷がめいつて

來た、サア〳〵是から奥座敷、娘どもはどつちへいた、おぬひお國」と呼び立てゝ、亭主は伴ひ奥座敷、勝手の方には氣のはらぬ、酒も茶碗でお縫がほろ醉ひ機嫌、「おたよどん一つ呑まんかい」「またおぬひさん醉はんすなえ、島田髷へ蓑かけて、髪も衣裳も出來てあるに、狂言の腰が折れ、お前の濡髪の長五郎を見いで殘念ぢやはいな。ホンニ大たぶさの前髪で、肩振つての身鹽梅、艶退けて仕手は無いぞえ」「又おたよどんのいらいぢやよ」「ナアニお前をいらひては何處ぞに有ろぞいな」「誓文わしや誰もない、おしゆんさんにあやかつて、傳兵衛樣のやうな面白い間でも有りや好けれど」「何云はんすおぬひさん、此おたよが取つてゐるはいな。ホンニもう此おしゆん樣もなぜ遲いこつちやぞえ、いつそおぬひさん何ぞ彈かんか」「アイ〳〵何にせうな、道行にせうかいな」「それよかろ」「そんなら愛護の若ぢや聞かんせ」と、音〳〵やさしく彈きなして、唄逢ふことは、なほかた糸のよるとなく、晝とも分かぬ閨のうち、枕ひとつの床の海。おしゆんは戀に面痩せて、餘所の文句もわが身には、いとゞ思のまさりぐさ、「おぬひさん今參じた」「ホヽオおしゆんさん、二日酢といふ色ぢやぞえ」「アイ二日醉やら三日やら、日さへろくに得覺えぬ」「ホヽオ道理いな、あの官左衛門づらが、おまへのお出が遲いとて、喧しう吐しくさつて成らぬはえ。そして奥座敷のお客が、お前と盃がしたい、どうぞちよつとなりと、逢はしてくれと斷つての頼み、おぬひさんも一所にこちへ」と、おたよは二人を伴ひて、入る奥座敷、茶屋の繁昌奥口の、取り締もなく忙しき、折ふしおそめがとつかわと、「おみよどん〳〵」「ホヽオ何ぢや」と勝手から、「何ぢや所か、きり〳〵ごんせいなう。大抵や大方ひよんな事ぢやはいなう、奥の客がおしゆんさんを、今宵中に身請するといふはいなう」「ヤア、サア〳〵事ぢや〳〵、どうぞ傳兵衛樣へ知らせたいものぢやが」「イヤ〳〵それ知らしたら、どんな事が出來ようも知れぬ、どうぞまあ太鼓持の久八どんに逢ひたいものぢや。あの久八どんは、傳兵衛さんの大分恩に成つた人ぢやといふ事ぢや、それゆゑ傳兵衛樣の贔屓方、呼んでこうか」と二人して、思案かひなき女子同士、折から此方へ出る久八、二人は見るより、「何して居さんすぞい、サア〳〵ちよつと思案出して下さんせいなう」「イヤもう、さつきにから思案してゐれど、えい狂言の趣向はない」「オヽしんきそんなき、そんな事ぢや無いはいな、ドレ〳〵耳おこさんせ、斯うぢや〳〵はいな」「ヤアそいつは事ぢや〳〵、アノ官左めが身請の手附け〳〵と吐かしくさるに厭果てたに、今宵中に身請するとは、ソリヤ事ぢや〳〵。太鼓持つが役なれば、客の呼ぶ時は何のやうな座敷でも務めねばならぬゆゑ、官左衛門めとも附合うては居れど、此久八は何處までも傳兵衛の味方、こちはもと新町の幇間、傳兵衛の大坂へ出て

ござる時、天満祭で喧嘩仕出し、朸手をあやめて、直に牢舎する所を、わしを傳兵衛様の引かしやつて金出して扱うてくださつて、それから京まで連れてござつて、きつい世話、大恩のある旦那なれば、どこまでも世話せにやならぬ。イヤ〳〵もうそりや事ぢや〳〵」「サア、ぢやによつて思案了簡をちやつと〳〵〳〵」「ア、其様に忙しういふと、出かゞる思案も引込んでしまふはい、サアかうぢや」「どうぢやいな」「有るぞ〳〵、こいつはどうであらう」「どうぢや〳〵」「たかゞあの客は此の丹波屋の内の客、爰の亭主が呑込んで、相談の出來ぬ様にちやちや入れたらじやみさうな事」「その亭主を抱込みやうは」「ヲヽ、娘のおぬひ、むすめのうちでの立者、きやつ呑込んだら出來る事、ずつと氣の捌けた通り者、頼んだら否とはいふまい」「イエイエ〳〵そりや悪い、その思案悪い〳〵」「おそめ、そりや何んとして」「サイナア、おみよどんは知らずか、あのおぬひは傳兵衛さんと諍が有るはいな」「ヒヤア」「それぢやによつて、おしゆんさんの身請と聞いたら、ありや喜ぶで有ろぞいな。言ひ出して結句悪かろ」「ホイしまうた」サアどうがなと三人が、小首傾け智慧袋、一度に絞る折も折、奥にはおぬひが聲として、「久八さん用がある、何處にぞい」「アノ聲は娘のおぬひ、爰へ來ては話の邪魔、二人ともに此方へおぢや」と、連れて一間へ入るあとへ、おしゆんは、しを〳〵立出でて、心も浮かず氣も澄まず、案じに胸を痛めしが、「互ひに變るな變らじと、言ひ交した言葉を反古にして、奥の客に受出され、傳兵衛さんへ濟むべきか。どうぞ逢ひたい知らせたい」と、おしゆんは涙の獨言、逢瀬もしばし途絶えして、君ゆゑ心痛むなる、傳兵衛が内さし覗きつッと入る。「ナウ傳兵衛さんか、逢ひたかつた」と、抱き付けば取つて突退け、「イヤコレ古めかしいその身ぶり、此頃は官左衛門が揚詰で、おれが事は忘れ果てくさつたろ。あたぶが悪い穢はしい」と、仕掛ける口舌、おしゆんは顔を振り上げて、「恨めしのお言葉、なんの私につゆほども、外へ引かるゝ心は無い。お前に別れたその日より、揚げづめに官左衛門、振つて〳〵振りつけて、内へ戻ればそのあとへ、茶屋からの附け屆け、親方様には叱られる、それも誰ゆゑお前ゆゑ、ありたよりが無いゆゑに、どうぞお顔を見るやうにと、神さままでをせびらかし、無理な願もおまへに逢ひたさ、粋な臺詞も打越して、愚癡に成つたも誰が業ぞ。義理も恥辱も外聞も、忘れ果てゝも忘れぬお前、それを外氣も有るやうに、疑はしくばお前の手にかけて、殺してやいの」と膝の上、身を任せたるおぼこさは、里に馴れてもかはゆらし。傳兵衛も心解け、「ホヽオ疑ひはれたもう泣きやんな、堪忍しや。日ごろから悪いと思うてゐる官左衛門めが揚詰で、一倍に氣が揉めて、常から外心の無いとは知りながら腹立まぎれ、口へ出るまゝ云うたのぢや。

ホンニあの官左衛門めが、祇園での三百兩も、てつきり言ひ合せた騙り事、手代の萬八めを吟味して、事のしだらを質さうかと思へども、その場より彼めも駈落、あの官左衛門めが外の者なら仕様も有れど、何をいうても出入屋敷のお役人、それ故手出しもならず、殘念無念を胸を擦つてこらへてゐる」「ホヽオ道理いな、尤ぢや。それ程ぬしの憎んでござんす官左衛門、何しに從はう、帶解くものでござんす。急に話さにやならぬ事がある、マア〳〵こちへ」と手を引いて、しんき辛苦をわくせきと、伴ひてこそ入りにけり。奥から亭主が、「おそめ〳〵、おそめは居ぬか」「アイ〳〵〳〵」と勝手から、「旦那さん、奥にござるがおしゆん様を身請なさるゝお客かえ」「オイ〳〵座敷が淋しい、ちやつと行きや」「イヤ御亭主、それへ參つて御意得ませう」と立出づる、年も六十ぢの親父客、「おしゆん〳〵と名を聞いて、焦れて來たこのおやぢ、身請して連れて往ぬる氣、今宵中に頼みます。あと金を宿もとへ、いうて遣る間の手つけ金」とさし出せば、「ホヽオこちらにも先約が有れど、こよひ中とあるからは、あなたの方へ首尾なるやうに、相對して參じましよ」と、立上れば此方より、「その身請まあ待つてもらひましよ」「ソリヤマア誰ぢや」「イヤわしでごんす」と聲をかけ、娘のおぬひが狂言仕立の大前髪、肩から歩く大嶋の、襖小短き草履下駄、强さうな顔かはゆらし。「おぬひ、こりや何ぢや」「イヽエわしやぬひぢや無い、濡髪の長五郎ぢや。おしゆんが身請は此ぬれがみがさゝぬ、アイぐつと長五郎が邪魔するのでごんす」「イヤこれ、此方が身請して連れていぬるといふおしゆんに、何ゆゑ邪魔しめさるぞ」「サイナ身うけを待つてもらひませうといふ譯は、あのおしゆんには傳兵衛というて、深い間夫がござんす。それを又何してわしが世話やくと思はんしよが、其傳兵衛様にはわしもちつとした譯がござんす。それぢやによつて、おしゆんさんと傳兵衛さんの中を裂たがると思はれては、わしが女が立ちやんせぬ。金輪際世話やいて、おしゆんさんと添す氣、それ故男伊達のぬれがみの長五郎になつて頼みます。こゝを聞分けて、おやぢさん、マアその身うけ止めて下さんせ、頼みました」と立役の、せりふも所の德ぞかし。おそめは手を打ち、「あつぱれ女子ぢや、富十郎が女伊達其處退けぢや」と、いそいそすれば、此方は仔細聞き屆け、「此親父がよい年をしての色狂ひと、一通りはをかしく思はしやろが、わしが身うけせうといふも、外の手へ渡すまいため。こなさんの其頼もしい心底を聞くからは、私が所存も打明けて話します。聞いて下され、わしは其傳兵衛が親でござるはいの」「エヽ」「ホヽ恥を云はねば理が聞えぬが、わしが出生は遠州濱松、だん〳〵と身上し縺れ、とう〳〵果は紙子の身の上、子供の時覺えた東北の曲舞を、謠うて立つた井筒屋の門口、先の

喜左衛門様は慈悲深い生れ付、エヽ悪うも育たぬ風體、不便な事と呼込んで、こちが成長の話を聞き、讀み書き算用の出來るを取柄に引上げて手代格、エヽありがたい忝い、どうぞして此恩をと、商賣に憂き身を窶し、一つ呑んだ酒も止め、煙草は固より鼻紙は、紙屑籠から取り遣ひ、足袋はかず頭巾きず、十八年が間惣嫁一つ買はどこそ、花の都に住みながら、芝居は何をするものやら、親方大事家業大事と精出したが、御一家衆の目に留り、先喜左衛門殿死去の後、此跡式を立てかねぬ其方と、家の娘にめあはされ、我名も直に喜左衛門と改めて、大名高家のかけやとは、成上つたるわしが果報、其後悴傳兵衛を產み落したは、女房といへど昔の主なり家筋と、心一杯介抱したれど、十年以前につい往生、わが子ながらも傳兵衛は、此家の眞の血筋と、大事々々が餘つて甘く育てしが、親の眼を眩まして、多くの金を傾城買に遣ひ棄てる身持放埒、どうぞしたら直らうかと、心を痛め暮せしが、つくづく思案した上で、それ／＼あれが好いた者なら、おしゆんを請出し、女房に持たせてやろ、添はしてやろ、マアどれほど染み付いた中かと、やうす見るため親ながら、よい年しての揚屋這入、もし傾城は持たされぬなどと選り嫌ひして、心中事の世話物になど作られるやうな、無分別などした時は、井筒屋の血筋はとんと絶えはつる、それが悲しいと、また不便が餘つてよりの急の身請、おぬひ女郎の道を立てゝ、男俠の濡髮に成つての頼もしい今の入譯、忝なうござる、嬉しうござる。そんなら斯うしませう、此身請の一卷は、おぬひどのに預けるから、御世話ながら突込で、世話やいて貰ひませう、是では道も立ちましよがの」「スリヤわたしが言葉を立て、身うけの世話させて下さんすか、エヽ忝ないと禮云ふ場なれど、濡髮の長五郎が預りました、請負うたぞえ、必ず今宵中に其身請を」「ホヽオ違はぬ證據、おしゆん女郎をこゝへ呼んで下され」「アイ／＼／＼」あひから樣子を立聞くおしゆん、傳兵衛は親のお慈悲とありがた涙、おしゆんを連れて出る久八、「思ひがけない親旦那、ざつと捌けた御取捌」「ホンニまう拜んで居やんすおぬひさん」「オヽわしや厭いの、おしゆんさん、世話するは濡髮が役、これでわしも立ちやんした」「ざつと臺詞が治つた、サア／＼是から奥へ行て酒にせう」「ほんに／＼旦那さん、さうぢやいな」唄兎角浮世はいろぢやえ、騷ぎにつれて打連れて、入るや其夜も後夜近く、奥からそつと横淵官左衛門、樣子立聞きこなたへ出で、「あの喜左衛門めが今夜中に、おしゆんを請出しをるとは思ひがけない事、兎角爰の亭主めも、幇間の久八めも、傳兵衛が贔屓して、身どもが詞は取合はぬ。いつそ親方を直に呼んで逢ひたいとは思へども、三百兩の身請の所へ、此百兩ばかりでは所詮埒の明かぬ事、國許へ云うてやる間もない急な事ゆゑ、金の才覺難儀至極、いつそおしゆんを

人知れず、引つさらつて退くより外の思案はない、さうぢや〳〵」とつぶやく所へ、奥より此方へ出て來るおしゆん、物をも言はず官左衛門、じつと小脇にひん抱かへ、駈出す後へ久八が、「どつこい遣らぬ」と引戻せば、「邪魔ひろぐな」と踏飛す、足首執つて久八が、縁より下へ眞逆樣、踏み付け〳〵踏みのめされ、命からぐ〳〵官左衛門、這ふ〳〵逃げて立歸る。皆々此方へ走り出で、「テモ好いざま好い氣味」と、笑ふ折から走つて來る手代十助、「唯今瀧口左内樣より急の御使」「トハ氣遣はし」と喜左衛門、狀箱取上げ、封押切つて讀み終り、「お國許より急ぎの御用筋申し來る、急に談じたき筋あるによつて、只今旅宿まで來いとの此文體、何御亭主、身請の事を今夜中に埒明けてと思ひしに、今聞かるゝ通の譯なれば、私は是から直に御出入屋敷の御役人の許へいぬる程に、御用筋の濟み次第こゝへ戻つて、明日は早々後金おこして埒明けましよ。傳兵衛は跡に殘り、何か相談極めて戻りやいの、皆の衆賴みます」「そんならお歸りなされますか」おさらばさらばと聲々に、仲居が見送る前垂の、あかりを照し出でて行く。

中之巻

河原の段

名に高き、四條河原も冬ざれて、川風寒く吹きすさび、往來もなみの石ばしる、水音までも夜は猶、最としん〳〵と物凄く、曇る空より我胸も、戀路に暗む官左衛門、萬八勘藏引き連れて立止り、「何でもおしゆんを引さらつてと出かけた所、たいこ持の久八めに邪魔されてさんざんの仕合、すご〳〵と戻る所、汝等二人に行き逢うたこそ幸ひ、今夜中に請出して、喜左衛門めが連れて戻ると吐かしたおしゆん、此河原に待ち合はして、面を隱して引つ擔げ、何處へなりとも退く了簡」「ホ、チそれよごんす、何か無しにお前のだんびら、ずばと引き拔いて閃つかせたら、他の奴等駕籠を投つて逃げるは定、そこで件を擔げて退くのぢや、萬八ぬかるな」「オツト合點ぢや呑み込んだ、もし邪魔する奴はしらども賴んで片付けさす。我等にお任せ、ひと走り往て賴んで連れてこう」「コリヤ出來た、そんならちつとも早いがよい、走れ〳〵」に萬八は、逸足出して驅り行く。かゝる工の有りぞとは、知らぬ井筒屋傳兵衛は、わが家へ戻る辻駕籠に、道を急がせさしかゝれば、「そりやこそ來たは」とぬつと出で、提灯ばつさり切り落せば、駕籠舁ども、わつと驚き逃散つたり。「コハ狼藉」と駕籠よりも、飛んで出でたる傳兵衛が、顏見てびつくり、「ヤアわりや傳兵衛か」「お前は横淵官左衛門樣。ヤアおのれは中賣勘藏め、よくも〳〵何時ぞやは贋金を摑ましたな。おのれに逢うて此詮議がしたかつたはい〳〵」「ヤ

アそこな蚊蜻蛉、假令人目無けりやこそよけれ、大きな聲で吐かすなやい。贋金の吟味がしたうても、所詮わが手に合ふ此勘藏では無いはいやい。あた忌ま〳〵しい」と踏飛す、足首取つて拂ひのけ、「心得がたき官左衛門樣、かゝる惡者を手に附けて、何ゆゑ此傳兵衛に狼藉をさせ給ふぞ」「ホ、オその子細云うて聞かさん、汝が親喜左衛門が身請して連歸るおしゆんを、待伏して引つさらへ、擔げて退かんと最前から、待つて居た此官左衛門、駕籠に乘つたはおしゆんぞと、思ひの外に傳兵衛、サ、、、おしゆんは何處へ片付けた、サ、それ吐かせ、ぬかせ〳〵」と嵩高なり。こなたは故と逆はず、「イカニモおしゆんは親共が身請を今夜中に致して連歸るべき筈なりしが、御國より急の御用金申し來り、おしゆんが身請は明日と約諾致し置き、親共儀は瀧口樣の御旅宿へ先刻參上、これによつて某事も、跡より唯今參りがけ、瀧口樣もあなた樣と、御判談も成されたかろ、早々御歸宅然るべし、身も親共が待ちかぬべし。心急かれ候へば、御先へ參り候ふ」と、言捨て立つを引き止め、「何處へ〳〵、一寸も遣ることならぬ。スリヤ身請は明日へ延びたとな、いま〳〵しい、手筈違つた今夜のしだら、己れに知られたからは、此儘では戻されぬ」「オ、さうぢや〳〵、そ奴を還していけ口叩かれては、此方とらが身は破滅、いつそ旦那一思ひに」「オ、サ〳〵、この官左衛門も其の了簡。イヤ何傳兵衛、此横淵官左衛門は、汝が出入屋敷の重役人、身が惚れたと聞かば、おしゆんと手を切り離れべき筈なるに、親喜左衛門までが一つになり、身請して内へ引きずり込み、官左衛門に鼻明かせんとは、言語道斷憎き仕方、おのれといふ色男が有るゆゑに、おしゆんめに振附けられた腹いせに、思ふ存分さいなんだ其あとで、息の根止めてこますのぢや。たとへじたばた騒いだとて、所詮埒の明かぬ事、我手に合ふおれぢやない、諦めて泥水喰へ」と、雨の溜りへどうど投げ、「あた忌ま忌ましい」と、蹴平足に踏み附け蹴飛しさいなむにぞ、傳兵衛も齒ぎしみ齒ぎり、無念の胸を撫でさすり、「イヤ何官左衛門樣、此傳兵衛は卑しい町人、蹴られても踏まれても苦しからねど、此脇指の小柄は、殿樣より拜領したる祐乘が作の三疋獅子、この小柄を、御家來の身として、土足に掛けても勿體なくもござりませぬか」「ヤア置け〳〵いふな、たとへ以前は殿の物なりとも、おのれが手に渡つたからは、素町人の家の道具、踏んだとて蹴たとつて、何の勿體ない物か、小柄ぐるみに踏みにじつてさいなまん」「オ、此勘藏は元より小柄に掛合ない、おのれがやうな愚鈍な奴は、饂飩ぶみにしてこまさん」と二人して、踏むやら蹴るやら、河原へ投げ付け踏付けられ、「エ、餘りといへば非義非道な官左衛門樣、出入屋敷の重役人と、無念を堪へて手向ひせねば、附け上つたる非道の打擲、さほどおしゆんに執心ならば、夙くにも身請はな

されいで、腹立つまゝのぶち打擲、武士に似合はぬ爲されかた」「ホヽオその金が出來るくらるなら、贋金のぐら事騙はせぬはいやい」「スリャあの八橋の鍔の折」「オヽ是なる中賣勘藏、手代の萬八と肌を合せ、三百兩物したのぢやはいやい」さてこそさうと傳兵衛が、無念に無念重る思ひ、睨みつけたるはら〳〵涙。官左衛門はせゝら笑ひ、「ハヽヽヽヽ、ホヽヽヽ、口惜しいか、大聲あげて常吠えろ。腹一ぱいさいなんだ、あとで息の根止めてやる。これが此世の泣納め、泣け〳〵ほえろ、大べらぼうめ」と立ちかゝり、又踏みかゝれば、もう是迄と官左衛門が、肩先すつぱり切下ぐれば、勘藏は氣も狂亂、「ヤレ切つたは」と呼りながら、一散にこそ遁げて行く。深手ながらも官左衛門、拔合せて切付くれば、ちやうど受けとめ、鎧鋭にちやうちやう〳〵、危かりける有樣なり。痛手に堪へかね官左衛門、河原へどつさり倒るゝを、疊みかけて切りつくれば、殘念無念のうめき聲、のた打ち廻るをなぶり斬、數ケ所の疵に官左衛門、狂死こそ心地よき。をりから來る人影に、既に自害と傳兵衛が、覺悟の刀取直すを、「ヤレ早まるまい傳兵衛樣」「マヤ〳〵待つて下さんせ」と、聲かけられ、「ヤヤさういふは久八おしゆん、そなたの事を根に持つて、最前より官左衛門が非道の打擲、堪へるだけはとこらへしが、どうもかうも成らぬ時宜になり、胸に餘つて手にかけたれば、人殺しの此傳兵衛、すぐに此座で死ぬ覺悟、親人さまの御歎も、さぞかしと思ひはすれど、此期になつては詮なき繰言、不孝の段段、よきやうに詫してたも」と、又取り直すを久八は押止め、「河原に喧嘩があると聞いた故、お前の事が心もとなく、おしゆん樣諸共走つて來た。人を殺せば死ぬるとは、尤の事ながら、喜左衛門樣や、これなるおしゆん樣の、歎かしやる心をも思ひやつて、邊に人の居ぬこそ幸ひ、早う此場を立退いて下され、サヤ落ちて下され」「久八さんの云はんす通り、喧嘩と聞いて胸騷ぎ、かういふ時宜も有らうかと、脫けて來たこのおしゆん、わたしが事から起つての、人殺しの科何とせう。さういふ事なら死ぬる覺悟は道理ながら、親御さまの歎きや、わたしが悲しさを推量して、どこの山奥いづくの浦にも、遁れるだけは逃げ隱れても、どうぞ死なずにくださんせ。死ぬる事ならおまへ一人死なしはせぬ、わたしも共に死ぬ覺悟、おまへを先立てわしが身が、一日生きてゐられうか。親孝行と氣を入れかへ、未練卑怯な心をも、ちつとは持つて下さんせ」と、身を投伏して泣きゐたる。「サヤ親への不孝やそなたの歎き、思はぬにはあらざれど、人を殺して此傳兵衛、存へる所存はない、止めずと放して殺した〳〵」「はてさて聞譯のない、おまへの恩に成つた此久八、惡い事云ひはせぬ。たつた一人子のお前を、家の血筋と喜左衛門樣の大切がり、後先見ずの不了簡も出ようかと、おしゆんさまの身請なさるも、悲しい事

のないためのお計ひ、そこをよう聞分けて、止まつて下さりませ」「それ聞きわけぬにもなけれども」「そんなら落ちて下さりますか」「夫ぢやてゝ此死骸」「ハテ跡は我等にお任せあれ。おしゆんさまも此所に長居して、人目にかゝつては、傳兵衛さまの爲にならぬ、早う内へ戻らんせ。序に傳兵衛さま、こつそりと送つてやらんせ」と、言ふにおしゆんも心急き、「サア〳〵サア傳兵衛さん、早う退いて下さんせ。もし死ないで叶はぬ其時は、わたしも一所に死出の旅」「ハテサテおしゆんさま、お前までがそんな事、千の萬のと言葉數云うてゐるうち隙がいる、何をうじ〳〵、早う〳〵」と、せき立てられて傳兵衛は、心ならずも遁れ行く。星の光に後影、見える間は延び上り、やれうれしやと始めて吐息つく、折から向ふへ萬八が、しらども引き連れ走り寄り、かくと見るより恟し、無二無三に締めかゝるを、ひらりとかはして身繕ひ、「方人つれたる泥坊めら、久八が手並を見よ」と、左右前後を相手どり、手を盡したる手練の働き、コリヤ叶はぬと萬八はじめ、這ふ〳〵逃れにげて行く。勘藏が訴へにて、所の代官捕手引具しかけ來り、「勢州龜山の御家來、横淵官左衛門を切り殺せしと、注進あつて召捕りに向つたり、尋常に縄かゝれ」と、呼はる聲に久八が、科をわが身に引きうけて、捕手の前にどつかと坐し、「人を殺せば覺悟の前、御苦勞ながら」と手を廻せば、早くも掛けたる縛り縄。「囚人引け」「ハア」

堀川の段

おなじ都も世につれて、田舍がましの薄烟、堀川邊に住居して、後家の操も立つ月日、琴三味線の指南屋も、合の手縺れ氣縺れを、保養がてらの藥風呂、煽ぐも我を澁團扇、目さへ不自由な暮しなり。「おつる樣、待遠に有らうなア、そして何やらのさらへで有つた、オヽそれ烏部山、アリヤじたい心中事、會にでも彈くのなら、お前は女子の方、おしげ樣は男の方、掛合ひに唄ふがよいぞえ。ドレ〳〵おしげ樣の代りに、わたしと掛合に唄ひませう」と、おいてひく手もしをらしき。「唄女肌には白無垢、上に紫藤の紋、中著緋紗綾に黒繻子の帶、年は十七初花の、雨に萎るゝ立姿、男も肌は白小袖にて、黒綸子に色あさ黄裏、二十一期の色盛をば、戀といふ字に身を捨小舟、どこへ取りつく島とてもなし、烏部の山は其方ぞと、死にに行く身の後髪、ひく三味線は祇園町、茶屋の山衆が色酒に、亂れて遊ぶ騷合、あの面白さを見る時は」「イエ〳〵しをれがない。あの面白さを見る時は」「あのおもしろさを見る時は」「よし〳〵、染どのそなたと某が、去年の初秋七夕の、座敷踊をかこ付けて、忍び逢うた事思ひ出す」「けふ

はマアそこまで、精が出るほど有つて、きつう手も廻り出した。もう〳〵何處で彈きなさつても、恥かしい事はない」と、聞いて笑顔のかたをなみ、又明日といふしほに、おつるは立つて歸りける。母を大事と油斷なき、身すぎも輕き小風呂敷、肩に載せたる猿廻し、戻りはいつも日暮前、與次郎は息急き門口から、「母者人今戻つたぞや」「オヽ、兄戻りやつたか、さぞひもじかろ。茶も沸いて有る、膳もそこにして置いた。オヽ、とくよ戻つたか。今朝から子猿めが親を尋ねて喧しい、ちやつと傍へ遣つてやりや」「アイ〳〵さうでござんしよとも。ソリヤちやつと乳を呑ましてやれ」「イヤナウ與次郎、そなたが孝行にしてたもるにつけ、わしが此の長々の病氣も、いつ本復する事で有らうと思へば、疲れの上に猶つかれる。僅な弟子衆の餘情やわがみの働きで、この養生がなる物かと、思へば藥も毒となり、母ではなうて子供の爲には、呵嘖の鬼と思はるゝ。鬼は冥途に有るものを、つれなの老の命や」と、身を悔みたる咽泣、哀れにもまたいぢらしゝ。「アヽコレ母ぢや人、ソリヤ何を云はんすぞいなう。其樣にひそやかな身代ぢやと思はしやるか、此間弟子入りした米屋の息子殿から、永々おふくろの煩ひで、嘸かし勝手も惡からうと云うて、雪か花かと申すやうな白米の仕送り、店々の旦那衆からは、何なと用が有るならば云うておこせ、もし出養生さしますなら、幸ひな隱居所も有るほどにと云うてくるお方もあり、羊羹、饅頭、生魚、近所隣へさう〳〵裾分も仕られねば、鯛赤貝の類は横町の鮓屋へ卸賣、モ案じる事は微塵もないぞや。それにまだ〳〵〳〵氣の毒なは、此家主が此家を居なりに買うてくれぬかと賴まれる。ヤレ厭やの〳〵、アヽあた世話な家持よりは金持が、遙ましでも有らうか」と、母に案じを掛けさせぬ、虚八百さへ一貫に、足らぬ節季の言譯を、いふ下稽古やこれなるべし。うそとは知れど老の身は、子に從ふが習ひぞと、機嫌よげに頷き、「オヽ、それ聞いて落付きました、ガ落付かぬは娘が事、此間も親方が、おしゆんを預けに來て云はしやるには、コレ傳兵衛殿といふ客の事で、ちと内に置かれぬ事が有る、たとへ傳兵衛が尋ねてござろとも、おしゆんが歸つて居る事は、包み隱さねばならぬぞやと、くれ〴〵も云はしやつた」「サアわしも其入りわけを聞いた故、おしゆんが心根を思ひやり、思はず涙が、ドレマア火を點そ」と棚の隅、こて〳〵取り出す行燈の、火影も漏るゝ暖簾ごし、「おしゆん〳〵」「アイ」と返事もしを〳〵と、思ひ惱し顔容、「マア〳〵こゝへ」と小聲になり、「門の戸はかけて有る、見る人も聞く人も無い。方々で噂を聞くに、此間の川原の喧嘩は、殺人はわがみの客の傳兵衛殿なれど、大恩受けた久八と云ふ者が、代に捕られて往たげなが、其場に落ちて有つた小柄が、カノ傳兵衛殿がお屋敷から、拜領した小柄ぢやゆゑ、天命遁れず御詮議最中、なれども、

其夜から傳兵衛の行衛もしれず、其相方の女郎はおしゆんといふ事、お上にもよう御存じで、親方の方へも色々と御詮議が有れど、是も行衛が知れぬと云ひ切つて、今揉めて有る最中ぢやと、とりぐ〳〵の噂評判、おりやもう聞くたびにびく〳〵する」と、聞くほど迫るおしゆんが胸、其夜の起りも皆わしゆゑ、何處にどうしてござるやら、心もとなさ逢ひたさも、言ふに云はれぬ此場の品、いかゞと胸も塞りし。母は一途に娘の可愛さ、「コレおしゆん、何にも案じる事はない、併し突詰めた男氣で、ひよつと此方の内へ來て、刃物三昧でも仕やせまいかと、四五日は夜の目もろくに寢られぬまゝの物案じ、世間にたんと有る格な、心中やなど仕てくれたら、此母は目界は見えず、兄はアレあのやうな臆病者、若しもの事が有つたらば、跡で母はどうせうぞ。袖乞物もらひに歩いても、そりやもうひツとつも厭やせぬけれど、そなたの體に凶事でも有つたら、おりやモウ直に死んで仕舞ふぞや。若い氣に前後思はず、義理ぢや、イヤ人の落目を見捨ててはと、つまらぬ義理を立てぬいで、年寄の此婆に、つらい目見せてたゝんなや」と、可愛さ餘る親心、「ア、なむあみだぶつ」も涙聲。兄もとも〴〵、「コレおしゆん、今母の言はるゝ通り、何の義理もへちまも入らぬ、退いて仕舞へば赤の他人、またおれも氣にかゝつて、好の飯さへ喉へ通らぬ。母ぢや人の氣休め、儕が腹助けぢやと思うて退いてたも。や、や、賴む賴む」と正直一遍、母の心と兄の言葉、勿體ないと思へども、切るに切られぬ胸のうち、所詮死なねばならぬ身の、此場を脱けて其上でと、心一つに思案を極め、「嘆さん、兄様、お二人のお言葉よう合點致しました。殊に又傳兵衛様、つい一通りで逢うた客、深い譯でもないはいな。しかし勤の習ひにて、人の落目を見捨てるを、廓の恥辱とするはいな。とても末のつまらぬ事、わしや得心をさせまして、品よう譯の立つやうに」「イヤ〳〵其やうに譯立てると言やつても、あつちに得心せぬ時は、それ〳〵、往にがけの駄賃馬で踏殺し、ア、イヤ〳〵、無理殺しに仕ようもしれぬ。コリヤ滅多に嚙合はされぬ」「オ、兄の云やるとほりぢや、そなたに怪我でも有つては、傳兵衛殿とやらも難儀、思ひ切るのがあつちの爲、わがみに心引かされては、つい捕へられるは知れた事、退狀を遣つたら、そなたの事も思ひ切つて」「切れるとも〳〵、遠い國へでも影を匿したら、身を遁れまいものでもない」「ソレ〳〵むつかしかろともひと筆。兄、硯箱取つて遣りや、サ、早う〳〵」と母と兄、言葉にいなもなき顔を、隱す硯の海山と、重なる思ひのべ紙に、筆の立所の後や前、涙に墨のにじみがちなる胸のうち、書き遣すとはつゆ知らぬ、與次郎が傍から、「コレ其やうに長たらしう書かずとも、つい退きますと書いても濟みさうな事ぢや」「イヤナウ書いたものはあと〳〵まで殘る物、男の去狀と同じ事、とつくりと譯

の分るやうに、書いてやるがよいぞや」「アイ〳〵此狀にとつくりと、御合點の行くやうに、あに様、此文お前からお渡しなされて」「よし〳〵、此狀さへあれば千人力ぢや、マア〳〵母ぢや人も落著かしやれ」「とやかう云ふ内九つまへ、お前も奥でまう寢やしやんせ」「ソレ〳〵今夜こそゆつくりと、心よう寢るであろ。兄もそなたも其處に寢や」と、奥底もなき隔てをば、押明けてこそ入りにける。「サアおしゆん、こちらもこゝに往生いたそ」「アイ」とおしゆんが共々に、暫し此世を假蒲團、薄き親子の契やと、枕に傳ふ露涙、夢の浮世と諦めて、更けゆく鐘も哀添ふ、頃しも師走十五夜の、月は冴ゆれど胸の闇、過ぎし別れの云ひかはし、死なば一所と傳兵衛が、忍ぶ姿のしよんぼりと、彳む軒は目覺えの、慥にこゝと門の戸へ、障る合圖の咳拂ひ、聞くにおしゆんは飛立つ思ひ、上る枕もうちはづす。與次郎は側に高鼾、心も共に行燈の、ともしび吹き消しさし足に、心急くほど明きかぬる、戸口のかけがね表にも、「おしゆんぢやないか」「傳兵衛様、よう逢ひに來て下さんした」と、云ふ聲寢耳に與次郎が恟り、起きると明ける門の口、妹が姿も暗紛れ、捉へる袖の振合せ、おしゆんと心得傳兵衛を、無理に引きこむ取り違へ、戸口を内からぴつしやり引立て、「コリヤこそ突きに來をつたぞ、おしゆん必ず外へ出まいぞや。戸口はおれが押へてゐる、門にゐるは傳兵衛ぢや、おのれを入れてよいものか」

と、言ふもがた〳〵胴震ひ、「コレナア兄様、わしや表にゐるはいな、ヤア其こわ色おいてくれ、そんな事喰ふおれぢやないはい。母ぢや人〳〵、傳兵衛がおしゆんを殺しに來たゆゑ、今表へ立て出した。おれ一人では手が廻らぬ、こなたも加勢して下され。加勢〳〵〳〵」と、うろ〳〵〳〵〳〵うろたへ騒ぎ、母親も、「何ぢや傳兵衛の加勢、ム、まだ外に同類でも有るのか」と、探り寄つたる傳兵衛がそば、「コレ〳〵おしゆん、顫ふ事はない、兄や母が付いてゐる、マア氣を鎭めや」と撫でさする、背中の手障り合點ゆかず、「コレ〳〵與次郎、どうやらコリヤ娘ではない樣な」「ヤア闇がり紛れに材木が紛りやせぬか、此方つかまへて居て下されや」と、探る手先に火打箱、がち〳〵震ふ付木の光り、「コリヤ妹ぢやない傳兵衛ぢや」「おふくろ、兄御、エ、面目もない此姿」と、猶も小隅に屈みゐる。「コリヤヤイ、其やうにしを〳〵して見せて、おいらを欺して、おしゆんを突かうとするのか、其手は喰はぬ」と、懷より一通取出し、怖々ながら傍に寄り、「コリヤ傳兵衛、おしゆんと我と手が切れぬと、科人のわれぢやによつて、妹まで難儀する。それでさつきに妹に得心さして、退狀が書かして有る。コレ是を見い、これぢやによつてモウ〳〵〳〵、おしゆんが方に殘心氣は離れて有るはい」「ム〳〵、スリヤお俊が其のき狀を」「コリヤどき狀ぢや〳〵」「エ、其心とは知らず、云

ひかはした詞を誠と思うて、迷うて來たが無念なわい口惜しい」と、齒を喰ひしばる男泣、恨を聞くも隔る戸口、心はさうぢやないじやくり、「オ、さぞ腹が立と、道理ぢや〳〵、マアとつくりと氣を鎭めて、退狀を見て下さんせ」「オ、それでよい、長う物言やんな屑が出るぞ、傳兵衞、おれが讀んで聞かしたうても、皆目おれは祐筆ぢや、サア〳〵早う」と封じめ切り、突付けられて目にたまる、涙を拂ひ、「ナニ書置の事」「ヤアなんぢや書置」「コレ〳〵兄正直な、吃驚する事はない、そなたは無筆私は盲者、書置ぢやと讀違へ、狼狽さして門へ出で、娘を存分にせうとの工。そんな虛言は喰ひませぬ、サア〳〵ほんまに讀まつしやれ。コレ〳〵與次郎、表の娘に氣を付けて、門の戸を明きやんなや」「オ、呑込んでゐる、こゝにはおれが蔕ばり付いてゐる、サア早う讀め。物こそはよう書かね、聞く事は無筆ぢやないはい。サア〳〵讀んだ〳〵」「是までの御養育、海山にも譬へがたき親の恩、ことさら不自由なる御身のうへ、何とぞ首尾よう勤を脫れ、世を樂に過させましゐはど、せめて少しの御恩報じ、孝行の片端にも成りゐはんと、それのみ朝夕祈り〳〵處、二世までと云ひかはし〳〵傳兵衞樣、思はず此度の御身の難も、皆我ゆゑにゐへば、今さら見てゐゐては、女の道立ち申さずゐ。不孝とは思ひながら、共に覺悟を極め〳〵」「母ぢや人、どうやら風が變つてきた樣な」「サイナアわしも胸がどきどきと、サア〳〵あとを讀んで下され」「さきほど傳兵衞樣退狀と申して認めしは、此事申し上げたきまゝ、退狀と僞り書遺し〳〵。何事も〳〵、先世よりの定まり事と御諦め下されゐ。中上げたき數々は筆にも盡しがたくゐへども、心せくまゝ申し入れ〳〵。扨はさうした心か」と、驚く傳兵衞、親子はうろ〳〵、「エ、氣遣な、コレ兄や、娘を內へ、早う〳〵」と、母があせれば與次郎も、戸口を開くれば走り行く、妹を無理に四人が、顏見合して溜息つき、涙は更に別ちなく、なんと言葉もでん兵衞が、泣く目を拭ひ、「一旦言ひかはした言葉を立て、共に死なうと覺悟して、義理を立てぬくそなたの貞節、忘れはせぬ嬉しいぞや。思ひまはせば廻す程、われこそ死なで叶はぬ身、そなたは科のない身の上、共に死んではお二人の歎、命ながらへ亡き跡の、とひ弔ひを賴むぞ」と、言葉には、はつと泣出し、「そりや聞えませぬ傳兵衞樣、お言葉無理とは思はねど、そも逢ひかゝる始めより、末のすゑまで云ひかはし、互に胸を明かし合ひ、何の遠慮もないしようの、世話しられても恩に被ぬ、ほんの女夫と思ふ物、大事の〳〵夫の難儀、命の際に振捨てゝ、女の道が立つものか。不孝とも惡人とも、思ひ諦めコレ申し、一所に死なして下さんせ」と、隱せし剃刀取り直す、「マ、、マア待て、待ちをれやい、是で死ぬると命が無いぞよ。コリヤ何の事ぢや、とんと分からぬやうに成つて來たはい。殺しに來たと思う

た傳兵衛殿より、今ではわれが方が手強うなつたぞよ。コリヤマアどうしたらよからうぞ」と、いふもおろ〳〵母親も、「オヽさうぢや、我子が可愛い〳〵と、子ゆゑの闇の傍ひら見ず、是までおしゆんがお世話に成つた、恩も義理も辨へず、一途に中を引き別けうと、思うた母は義理知らず。賤しい勤する身でも、女の道を立て通す、娘の手前面目ない、そなたの心に恥入つて、何事も云ひませぬ、傳兵衛樣と一所にの、コレ死出の道連しやいなう。したがコレ申し傳兵衛樣、定めて親御樣たちもござりませうが、親の心といふ物は、人間はおろか、たとへ鳥類畜類でも、子の可愛さに變は無いもの、おゆん傳兵衛と言はす氣か。若しやお前が死なしやつたと、親御たちが聞かしやつたら、悲しうて〳〵、此世に殘つてゐる氣は有るまい。何國いかなる國の果、山の奥にも身を忍び、どうぞ遁れて下さりませ。娘が心に恥入つて、天にも地にも賭替ない、可愛我子を心中に合點して遣る親心、こゝの道理を聞き分けて、コレ拜みます頼みます」と、手を合したる母親の、子ゆゑに迷ふ闇の闇、二人は何と言葉さへ、涙に涙むすぼるゝ、血筋の別れ與次郎も、涙の雨の古布子、袖くひしばりしやくり泣き、「ア、傳兵衛樣の歎かしやるも道理ぢや、又おしゆんの泣きやるも道理ぢや、母ぢや人の泣かしやるのも猶道理ぢや、道理ぢや〳〵、道理〳〵というては、根から葉から何時までも分からぬ道理ぢや。ガコレ二人ながら、母ぢや人の今の言葉、御合點が參りましたか。エヽコリヤわれも得心してくれたか、合點がいたか。サヽヽヽ合點したらば、どうぞ此場を立退く分別、しかし其形では人目に立つ、京の町を離れるまで、此編笠に顔隱し、幸の猿まはし、まめで二人が末永う、めでたう女夫に成り遂げる、門出の祝ひに此與次郎が、おはつ德兵衛が祝言の壽、こなた衆も別れの盃、イヤ〳〵祝言の盃」と、祝ふ唄ふも聲低に、「お猿はめでたやな、婿入姿ものつしりと、〳〵、コレさりとは〳〵ナウ有るかいな、さんな又有るかいな。オヽ德兵衛樣こざんせ、餘りこな樣が來やうが遲いによつて、おはつ樣は顔眞赤にして腹立てて居やんすはいなう。コレお初樣、聟樣が盃をしたいといなう、機嫌直して盃を戴かんせ、コレ〳〵〳〵戴くなう盃を、さんな又有るかいな。ヤヽコレむこ樣、足で盃をさすはあまりつれない、夫では嫁ごが戴かんせぬはいなう。乾反らずとほんまに指してやらんせ、さうぢや〳〵、そこでお初がいたゞいた物ぢや、コレいただくなう盃を、さんな又有るかいな。コレ嫁後の晝寢もころりとせい、〳〵、ナコレエ有るかいな、さんな又有るかいな。コレむこ樣、あまりつれなうさんすによつて、おしゆんよめご樣が起きさんせぬはいなう、其處らでちよつと起したり、〳〵。エ、コリヤ、コリヤ、ヤイ、コリヤ、さりとは〳〵ナウあるかいな、さんな又あるかいな。起きたら互ひに抱き附きやれ、オヽそれ

で機嫌が直つたぞ、エ、、、有るかいな、さんな又有るかいな、くるりと返つて立つたりな、立つてくれ。コレ〳〵〳〵立たしやませ、次手に日和を見てたもれ、よい女房ぢやに、〳〵、ナウあるかいな、さんなまた有るかいな。日よりを見たらば落ちてたも、〳〵、コレさうぢや〳〵、おさるはめでたやめでたやな」「サア〳〵、きり〳〵此家をさるまはし、まさるめでたう何時迄も、命全うしてたも」と、目は見えねども見送る母、言葉も此世で聞きをさめ、心の中の暇乞、あすの噂となりふりも、窶す姿の女夫連、名を繪草紙にしやうごるん、森を當所に三重廻り行く。

下之卷

道行涙のあみ笠

なまなかに、染めて眞紅の縺れ糸、結ぼれしより白糸の、昔を忍ぶ世の憂さや、今は浮名もたちばなの、花の姿もいつしかは、萎れがちなる目にもろき、露の命と消えに行く、深き契りの傳兵衛は、おしゆんを連れてをちこちの、たつきも知らぬ夜の道、あとやさきなる縺れ髪、むすぼれそめし緣のはし、人目を包む編笠に、姿は窶し變れども、心の誓紙いつまでも、變らじものと手を取りて、心細くもたど二人、すぎし廓のきぬ〴〵に、送られしとは引替へて、「我ゆゑかよる身となりて、智慧も器量も身代も、みな淡雪と消失せて、かはせし言のかず〳〵に、切るにきられぬ中々に、しがらむ緣のいとしや」と、云へば傳兵衛身を悔み、「人々の氣やすめと、猿廻しと姿を變へ、堀川を落ちては來たれども、人を殺した我身の上、存へる心は無い。そなたはあとに生殘り、母御へ孝行盡してたも、往んでたも」「コレ傳兵衛さん、そりや胴慾な氣の惡い、かゝさんや兄さんにも、替へぬお前を先立てゝ、生きて居さうなわたしぢやと、思うてかいな愚癡なぞえ。死なば一所と云ひながら、世にも尊き靈場の、森の中にて死ぬるなら、回向のかずに後の世の、闇も照さんこなたへ」と、手を引き立てゝ行く空の、星も逢ふ瀬の天の川、それにはあらで織女の、錦の小路綾もなく、過ぎる向ひにちら〳〵と、見ゆる火影は誓願寺、嵐にさゆる鐘の聲、「なまいだなむあみだ、世は定めなや去年の秋、閨の隙間の小夜あらし、ア、よい月と眺めてし、今宵は二人月影も、面恥かし此姿、わたしももとは突出の、ふと逢ひ初めし戀の種、エ、儘ならぬ浮世ぞや。おいとしい此姿、わしと云ふもの無いならば、お内儀さんを呼迎へ、中よう添うてござんしよと、思ひ廻せば勿體ない、誓文わたしや未來でも、あなたを退けて浮氣はない、二世も三世も其先までも、どうした因果の緣ぢややら、堪忍して」とばかりにてわつとひれ伏し泣沈む、露の横顔吹きかはし、帶のしやら解け引きしめて、よ

しや歎かじ色ゆゑの、憂さもつらさも猿廻、おさるはめでたやな、婚入りすがたものつしりと〳〵、コレさりとは〳〵ナウあるかいな、さんなまたあるかいな、復とあるまい二人が中、涙耕す畑道、にげ來る二人おひくる二人、挑みあらそふ人影の、夜の目にそれと小さうも、さだかに見えぬ霧の中、見えつ隱れつかくれなき、二人が中は櫻木に、鏤められて唄はれて、色の譯しり戀しりと、仇名殘すが亡きあとまで、ほんにせめての思ひ出と、慰められつなぐさめつ、行くも涙の道もせや、二人が命はかなくも、森のこなたに三重著きにける。

聖護院の段

こなたの畑道いつさんに、逃げ來る勘藏其あとより、同じく走つて萬八も、吐息つき、「ヤレヤレ危い、ひよんな所で出くはしたる瀧口左内め、アノ又井筒屋の手代十助めも力强、なか〳〵手に合ふ奴等ではない」「オ、サ〳〵、何でもおしゆん傳兵衛二人の奴ら、引捕へてくれんと思ひの外の今宵の時宜、さて〳〵ひどい目に逢うた」「イヤまう此萬八が體は大方粉になつた、よもや此處まで追つかけても來はせまい。捉まへられてはむづかしい、マア息休め」と芝の上、へたばる後の樋の陰より、ずつと出でたる手代十助、隱せし挑灯差揚ぐれば、吃驚しながら顏打ち眺め、「ヤアおのれは手代の十助ぢやな」「オ、二人とも動くまい、最前惜しい所を取り逃して是まで跡追はへて來た。此處で逢うたが百年目、傳兵衛樣の難儀も質金も、おのれらが皆仕業、片つぱし引つ縛つて、ぐつと詮議を仕拔くのぢや」「ホ、オ斯うなるからは此方も死にもの狂ひ、それ萬八」「オ、心得た、まうやけむちやに締殺せ」「してこい」と、右と左に萬八勘藏、武者ぶりつくを、心得二人を小手がへし、又組付くをすくひ投、挑灯消えて眞闇がり、どれがどれやら當所なく、聲をしるべに摑みつき、投げつ投げられ根競べ、逃ぐれば追つかけ追ひ戻し、堤をすべつてころ〳〵、落ちては上りあがれば落ち、命限りと摑み合ふ。斯くともしたより弓張挑灯、火かげにすかして、「ヤア十藏、左内が來た氣遣ない」と、いふ聲聞いて驚く萬八、落ち散る雪駄かい握み、挑灯へばつたり當てれば火は消えて、俄に闇の心地する、畑を傳うて逃げ出す一人、何國迄もと追駈くる。こなたの森はしん〳〵と、傳兵衛は傍へに座をしめ、「サアこれが我々の露の命の捨てどころ、書きおく事も云ふ事も、もう此の段には皆繰言、二人手に手を取りかはし、死出三途を伴はん、心强く死んでたも」と、涙ながらに勸むれば、お俊も涙に聲曇り、「嬉しうござんす傳兵衛さん、夫があの世の樂ぞ、もう今生の言ひをさめ、女房おしゆんと唯一言、いうて殺して下さんせ。わたしもこちの旦那どの、傳兵衛さんと

いふはいな」と、膝に凭れて泣きくどく。「ア、愚な事ばかり、逢初めた其晩から、互にほんの女夫ぢやと、約束したに違ひはない。斯く成り果つると知らずして、我命を助けんと、久八が身に覺えおき人殺しと成つての獄舍の住まひ憂き苦しみ、親人にお歎かけ、現世の罪に罪重ね、來世の苦患も恐ろしい。親の御恩を忘れぬため、家の定紋の小袖は血汐に汚さじ」と、とある傍へに直し置き、「サァ夜が明けては恥の上塗り、此傳兵衛を御不憐が餘つてより、そなたを請出し添はせんとの親人の御情、思ひがけなく其晩に、事を仕出せし河原の喧嘩、詮方なさに官左衛門を切り殺したる身の災難、不孝に不孝重ねたる我が身の上、是まで不孝の詫言や、暇乞には拜むばかり、そなたも堀川の親兄へ、暇乞して禮云や」と、心を付けられ身を震はし、「エ、忘れて居たものを、ひよんな事言ひ出して、また泣して下さんすか。宵に別れて出るまでも、いかなる國のはて、山の奥にも身を忍び、どうぞ遁れて夫婦となり、無事で暮せとかゝ樣ののたまひしに、明日は死んだと沙汰あらば、さぞや母樣兄さんの、歎き給はんお命も、續くまいと案じられ、それが悲しい〳〵」と、わつとばかりに取亂し、前後正體なかりしが、やう〳〵涙おしづめ、「アレ〳〵〳〵、向ふのあかいは夜の明けるのぢやないかいな」「イヤイヤあれは在の墓所、亡者を葬る火の光、同じ人と生れても、疊の上で死んだ身は、あとのあとまであの樣に、葬らるゝもあるものを、都の中でも指折の、町人の子があさましい、見苦しう死んだ體を苍に曝され、あと〳〵までも、恥をさらしのながら川、水の流といひながら、人間の身は船に似て、心の船長柁取の、惡いばかりで末の世まで、因果の業を果さぬか」と、悔み歎けば諸共に、抱き合うたるもろ涙、森の落葉や浸すらん。はや明がたの鷄のこゑ、こゝは無常の使かと、心せかれて死用意、とりぐ急ぐ其所へ、一文字に驅け來る與次郎、南無三寶と辿出すを、兩手に取り付き、「殺さぬ〳〵もう殺さぬぞ。斯うあらうと思うたゆゑ、方方と尋ね歩行いた、樣子が有る」といふ聲も、息切れしたる後より、瀧口左内喜左衛門を同道し、勘藏萬八に繩をかけ、十助に引立てさせ、「ヤア早まるまい〳〵、横淵官左衛門は役柄にて自由を働き、是まで殿の御用金を掠め遣ひ、多くの御金を引負ひしたる條、明白に死後に露見に及び、不屈たる旨お咎め強く、きやつは死にぞん殺しどく、これなる萬八勘藏も、彼が手さきを働き、贋金まで遣ひし子細、惡事の段々一々白狀、彼等を直に代官所へ引き渡し、久八が出牢を願ふばかり、安堵せよ傳兵衛」と、言葉の中より喜左衛門、「おしゆんは直に身請して、波風もなく事すんで、治まる家の花嫁と呼迎へん、喜べ」と、聞いてみな〳〵勇みたち、親のお慈悲とありがた涙、嬉し涙に喜びを、かさね重ぬる千代八千代、羽を伸す鶴や龜山に、音は絶

えせぬ瀧口が、仁あり義有り道を立て、運も開くる傳兵衞おしゆん、昔に還る其噂、目出たき末の代々までも、筆に任せて三重書き殘す。

おしゆん傳兵衞近頃河原達引　終

壇浦兜軍記

第一

宵に起き旰けて食し、夜に念ひ朝に行ふ。故に虞舜の居は三年にして都をなし、仲尼の政は朞月自ら治るとは、今此時よ武將の中興、源の朝臣賴朝卿、順はざるを禁め賞罰を糺し、絶えたるを繼ぎ廢れるを起し、民を安んじ衆を和す。七德八教谷七鄕、賑ふ民の鎌倉御所、大藏の鄕に營居有る。さしもさばかり手强かりし、木曾の冠者義仲は、江州粟津の泡と消ゆ。平家は亡き名を文字が關に殘し、治國泰平天下の功古今に秀で、未だ家に先蹤なき大納言の大將、六十餘州の惣追捕使、日本弓馬の棟梁と成り給ふこと、併し佛神の擁護なりと、神祇を禮し百靈を懷け給ふ餘り、秩父の庄司重忠を以て、さいつ比より南都東大寺大佛殿を再興あり。既に伽藍成就せりと、本多の次郎近經を以て訴ふれば、根井の大夫稀義、岩永左衞門尉致連、其外當日の諸役人、膝を屈し相詰めらる。陪臣なれども本多の近經、召しによつて百分一に寫せし伽藍の繪圖、御座近くしつらひ掛け、佛閣の高廣莊嚴の次第、外に記し捧ぐれば、逐一に上覽

有り。「重忠は佛智にも叶ひしか、我が思ふ如く造進せし條、嬉しや解脫の善根を植ゑたり」と、御嬉しげに見え給へば、近經はつと恐入り、「こは冥加に餘る御詞、主人重忠造營の功を得たること、偏に君の洪福によつてなり。太政入道淸盛は、伽藍を燒いて衆類を族滅す、君は伽藍を再興有る、天地懸隔の違、恐れながら御子孫の繁榮極あるべからず。鎭護國家の御基、此上や候ふべき」と、祝し申せば一同に、皆萬歲と壽きける。大奥の間の廊下口、鈴の綱音なひて、重忠の奥方玉房御前、御座の間近く手をつかへ、「誰ぞお取次」と伺へば、賴朝御覽じ、「珍らしや秩父の妻女、くるしからず直に申せ、何事ざふ」と御詞有る。「いやお願は私ならず、御臺樣の御使、只今奥にて承れば、此度の大佛供養、かねて君御上洛との御事、御臺樣も御參詣有るべき御立願、くるしからずば御一所に、御上洛遊ばしたく思召し候へば、伺ひ奉れとの御事なり」と述べにける。賴朝打頷かせ給ひ、「今四海一統すといへども、木曾が餘類平家の殘黨、義經錦木戸が打洩され、隙を窺ふ此時節、迂濶に鎌倉は明けがたし。我は皆成就の後上洛すべし、此度は政子ばかり上洛し、供養を遂げ給へと申せ、さあらば玉房付添ひ用意せよ」と、御返答有りければ、玉房悅び、「是は〳〵お嬉しや、御臺樣も嘸ぞ御機嫌、お悅び申す爲」と、勇みて奥へ入りにける。賴朝重ねて、「如何に根井大夫、岩永左衞門、兩人共に政子が供し上洛し、萬麁忽なき樣に、心を合せ計らふべし」と宣へば、根井ははつと當惑顏、岩永左衞門進み出で、頭を下げ、「聊御諚を背くには候はねども、かゝる目出たき御上洛に、臆病の飛汁掛つたる老人と相役仰付けられ、心を合せ供奉仕らんこと、身に取りて不祥の至り、此儀は餘人に仰付けられ下されかし」と、根井の大夫を尻目に懸け、憚なく言上す。根井の大夫氣色を損じ、「ヤア口荒涼なり岩永殿、あつと申さうや否と申さうや、未だお請もせざる內、臆病のとばしり掛つたる老人と相役、不祥なりとの言上、オ、推したり、我娘白梅を婦妻に所望ありしかども、愛甲の前司太郎が子を養子聟の契約せし故、承引せざるを憤つてのわんざん卑怯至極」と、はつたと睨めば、「ヤア左樣の私の宿意を以て、御用を妨ぐる岩永にはあらず、何と成りとも言はゞ言へ、臆病者の相役には、得ならぬ〳〵」「オ、それも推したり、彼悴相州箕尾谷村の谷陰深く生立ち、熊猪は猫の鼠ともてあつかひ、かたの如くかけ鳥などはすれども、未兵法の奥義を知らず、弓矢鍛錬の後家を知るべしと、武者修行に出で、過ぎつる源平の戰、義經公の御手に屬し、實父愛甲の名字は勿論、我方へも未だ來らねば、根井とも得名乘らず育ちし箕尾谷村の在名を取つて、箕尾谷四郎國時と名乘り、「平家の侍上總の七兵衞景淸に出會ひ、少し汀へ引退きしを、引く矢不鍛錬の者共が、臆病なりと取沙汰を聞き誤

つての思ひ違ひ、をかしゃ〳〵」といはせも立てず、「オ其戰ひは壇の浦、船と陸との詞戰、俗にいふ川向の喧嘩にひとしく、箕尾谷四郎廣言放つて居たりしが、兵船一艘漕ぎ寄せ、上總の七兵衞景淸とをめいて駈く、始の詞には似ざりけり、かい振つて逃げて行く。景淸長刀押取りのべて討つならば、眞二つに成るべきを、能く〳〵の臆病者、刀物汚し、なぶり物にせんとや思ひけん、長刀小脇にかい込んで、箕尾谷が著たりける、兜の錣を取りはづし、てんがうまじくら無手と抓んでうんと引く、身を遁れんと前へ引く。互にえいやと引く力に、鉢付の板より引きちぎつて、輾けつ轉びつ口減らず、去にても汝恐ろしや、腕の强さと云ひければ、景淸は又箕尾谷が、首の骨こそ强けれと、敵も味方も物笑ひ、なんと臆病者で有るまいか」と、嘲笑へば膝立直し、「其時の軍奉行は土肥の眞平、箕尾谷は大太刀、景淸は長刀、手を碎いて戰ひしが、何とかしたりけん、箕尾谷太刀打折つて力なく、少し水際へ引き退く、臆したるには、あらざる故、御帳面にも其通り、記したりとの物語、御帳面が證據よ。但し貴殿は左樣の時、太刀打折つた軍は是まで、サア首きれとて切らするか、蒐るも引くも軍の習、畢竟の勝を克と云ふ、殊に景淸世に存へ、君を狙ひ奉る風聞有り。吾倅又景淸を附狙ひ、恥辱を雪ぐまじき物ならねども、それは後の沙汰、必々今の詞忘るゝな岩永」と、包む無念の目に洩れて、こぼるゝ涙を袖に隱し、御前に向ひ、「先年系圖に書きのせ、上覽に入れたる悴行方知れず、不奉公者の親として歷々に立交り、座並を穢す恥かしきに、況て御臺所の御供恐少なからず、御諚違背仕るには候はねども、此儀は餘人に仰付けられ、某は本國に浪人の願、所領を差上ぐると申すは冥加なし。悴が安否を承はり屆くるまで、暫く預け奉り度く存候」と、恐入つてぞのべにける。賴朝始終を聞召し、「子によつて親々の名をも上ぐるに、老人のこゝろづかひ不便なり。上洛の供を赦し、望みの如く、所領を預り置く上は、返すことも亦望みによるべし。浪人の住所は心の儘、勝手次第逗塞すべし。本多は後備へ、岩永は上洛の先手に進み、直に都にとどまり、重忠に加はり、萬事沙汰せしむとも、指圖に背き、我意の仕方有るべからず。就中上總の景淸は、平家無二の忠臣、國士無雙と聞く、あへなく討たんも殘多し。兎も斯うも重忠と計ひ、穩便の沙汰あらまほしけれ。心得たるか岩永本多、罷り立て」と、簾中深く入御成り給ふ。佛法王法此君より、再び榮ゆる秋津國、盡きぬ惠みぞ　三重。月日立つ、春も漸くをはりの國、夏になるみや熱田の宮、聞えは人の國までも、隱れな高き御神にて、萬の願　取分けて、惡氣厄難災難を、祈れば奇特をみやつこの、散敷く花を搔寄せて、神の御庭の朝淸め、散殘りたる木末より、土に春有る風情なり。春の旅、暖ならず寒からで、思ひ有る身も折々は、心

を開く白梅は、父に誘はれ古郷を出で、先は近江の長濱へ、長道中を是ぞ此の、尾張の熱田と聞くからに、態とも參らまほしかりし、いざと付々お供にて、乘物つらせ參詣有る。「やい皆の者、此お社こそ、楊貴妃の所在を尋ね、唐土の方士が渡りし常世の島、蓬萊山とは此處ぞかし。奇瑞尊き御神樣、皆信取つて能う拜みや。それに付き、此お社の禰宜の娘は、景清が妻なれば、此處に隱れ忍び居まい物でなし。我夫の箕尾谷殿行方知れず、親子夫婦の名は有りながら、得逢はぬも又父樣の、知行差上げ住みなれし、鎌倉を立退いて此の如く、旅他國なさるゝも彼が所爲、景清と見るならば、搔きむしつても恨いふ心、其時は誰々も、力を付けて賴むぞやいの」と宣へば、乳人の澤田が、「御尤々々、此人衆が一口宛喰ひ付いても、景清の一人や二人お氣遣ひ遊ばすな」と、力を添ゆれば、「オヽ、嬉しいく、大宮司と問へば隱れないとや、住家は何處、誰に尋ねうぞ。あれく、彼處に人こそあれ、大儀ながら乳母問うて見や」「何の大儀」と立寄つて、「是れ物問ひましよ、禰宜殿なれば知つてゞ有らう、大宮司殿は何處ぞ、教へて下され」「ムウ扨は旅のお人か、大宮司と申すは我々がお頭殿、今では一人有る御子息は、夏茂樣とて今の代取、社の後な大門作りがそでござる。親御は通夏樣、近年隱居なされ、海山を見晴して濱面に館を建て、衣笠樣と云ふ娘御と一所に、あれく、あそこへ白髪

まじりの惣髪、大小差いて、女中が一人付いて見える、あれが通夏樣衣笠樣、社々拜なされて、頓て此處へ」と教ゆれば、「お姫樣聞いてか」「聞いたく、願うてもない首尾、待請けて詰開かう、ヤイ下々も乘物も、鳥居の外に待つて居よ。父樣お見えなされたら、此處にと申せ。未だ見えるには間も有らうが、其間に自もいざ神前へ」と引きつれて、一禮言はせ詣でらる。春色花漠々たり、鶯の百囀、擯俗の地無何の鄕、心自得すれば壽疆なしと口吟んじ、娘を侶ひ、花に誘はれ浮れ來る、前の大宮司、「掃除は誰ぢや、福太夫か、此頃逢はぬ、變ることもおりないか」「アいや別にかはることも、それよ、たつた今旅の女中が、二人樣を尋ねて參られ、追付け此所へお出でなさるゝと申したれば、其間にお宮へ參つて來うと云うて往たが」「ハテ誰ぢやな、見えたらば逢ふまでよ、休めく。身は折ふしの他國あるき、近付も有る、尋ね來まい物ならず、娘を尋ねて來る女中は、ハテ誰ぢやな」「いや私でござんす」と、立出づる白梅、「イヤこなたなれば猶見知がない」と、親子いぶかる許なり。「そなたに御存じなされいでも、此方は景清殿と譯有る中、お前の方に忍び有ると、折々の文玉章に、お二人の事能う知つてゐる。久々顏も見ぬ故に、はるゞく尋ね參りたり、早う逢はせて下さんせ」と、心せかせてうら問へば、父は驚く衣笠は、惡う呑込み早合點、「其景清殿連れてござんせ逢はせ

う」と、愛想なけれど云懸り、「衣笠様そりや卑怯な、慥に此處に居る人を、連れて來いとは、こりや悋氣でござんすの」「ォ、好い合點、さつきにから此胸の内、くら〳〵とにえかへる、本の妻ぢやも悋氣せいでは、とても悋氣と見らるゝからは、逢はせますことふッつりならぬ。詮ないことに隙入れずと、往なしやんせ〳〵」「ムウそんなれば景清殿は、實正構うて置かしたの」「ハテ入らぬ念を入れる人、夫が女房と一所に居るが珍らしいか」「いや珍らしうはない、其一言を聞かう爲、サァ女子共合點か」「心得ました」と一樣に、隱し差したる一腰の、鍔を鳴して聲々に、遁しはやらじと詰めかくる。大宮司娘を押圍ひ、「ヤァ誰なれば女のざいに此の體は興がつたり、遁げ走りする我々ならず、仔細を語れ、名を名乘れ」「ヤァ小癪なこと云はずとも、景清を此處へ出しや、其上では言やらいでも名を名乘る」「それは無體、景清は三年以來所在を知らず」「いや知らぬとは云はせぬ」と、爭ふ半へ根井太夫走り著き、娘を制し、附々を押沈め、「大宮司通夏と云ふは御邊よな、我等は根井の太夫稀義と云ふ者、是は我が娘、此度鎌倉をお暇申し江州に蟄居する、其儀は云ふに及ばず、過ぎつる源平八島の戰、和主が聟上總の景清、箕尾谷四郎と合戰の勝負、それも聞き及ばん、其箕尾谷と申すは某が養子聟、是が夫、其場の恥辱面恥かしくや思ひけん、今以て行方知れず。夫を思ふ女心、景清に遺恨を含み、今日此所通行せしを幸ひ、景清は和主が聟なれば、隱し置かんと我にも知らせず此仕儀に及ぶ、殊更景清、我君頼朝公を狙ひ奉る御敵、かたく見遁しては通られず、隱して館を搜されば、大宮司の浮沈たるべし、サァ景清を出されよ」と、退引させず詰めかけたり。「ムゝ扨は聞き及ぶ根井の太夫殿よな、最前御息女、景清の妾なりと僞りも、問ひ落さん爲とは知らず、娘は悋氣に取込み、拙者は却て御息女に、景清が所在を尋ねんと存ずる所、いやはやこちらあちらの仕合、長々返答申すも旅行の妨、手短に申さう、平家の一門滅亡の後、景清はかた切つて參りもせず便もせず、此方の娘も懷しがり、若し在り所聞出されば、お知らせに預りたし」と返答す。「ォ、一旦の陳じは尤、能く分別して見られよ。一樹の蔭の雨やどり、一河の流を汲んでさへ、人の情は捨てられず、況んや多年の聟舅、女房を預くる程の景清、便もせず參らずといふとも、誰か左あらんと思ふべき。鎌倉殿御不審のかゝらん時も、其分疏で濟むべきか、よい仕合で歴代の神職沒收せられ、子供の流浪笑止々々、此理を辨へず隱し通すか、根井の太夫惡い癖あり。斯樣のこと詮議しかゝり、云はずば可しとて搔い遣りには捨て置かず、館を搜さうか、但は隱し置かず、存ぜぬと言ふ證據、當社明神は云ふに及ばず、天神地祇を驚かし、誓言立つるか、二つ一つの返答あれ、大宮司」と些つとも心赦さぬ面色、大宮司横手をはたと打ち、

「ハァ御疑御尤誤り入つたり、根井殿、聟の不便も娘の可愛さ、子供等が流浪に換へ、所領に換へ、何しに包み申すべき。ァ、淺ましや、神に仕へても凡夫心、今日のことを知らざりし。平家の一門都落の時、此娘景淸と一所に落行かんと云ひしを、船に浮き波に伏し、憂き目にあはん不便さに、預けんと云ふを悅びて預りし其時、夫婦の緣切らせて、預かるか取戻さば、今の疑は受けまじきに、好い年をして智慧なしと、根井殿は笑ひ給はん、恥かしや面目なや」と、はらはらと翻るゝ涙を押ゆれば、「なう私も西國へお供せば一思ひ、なま中に預けられ、夫は生きて有りながら、二年三年便りもなく、捨てられし我が命、惜しいではなけれども、若しやと卑怯な心から、段々御苦勞させまする、赦して下され父樣」と、がつぱと伏して泣き居たる。「娘泣くな分別有り。なう根井殿、我先祖は尾張の國の造、明神を戴き祭りて千百年、假にも曲らず僞らぬ、誠を以て仕へし身の、大凡俗と等しく誓言立てんは、口惜しとは思へども、恥も人目も子供等には換られず、只今誓言立て申す、疑惑の念をはらひ給へ淸め給へ」とつい立上れば、「ァ、誓く」と根井の太夫、走り寄つて抱き留め、「よしなき所望誤つたり、もう誓言に及ばず〳〵、今の悔の御一言、我心魂を貫いて、貴殿を疑ふは神を疑ふ勿體なし。とかく長居も神慮の恐れ、早速ながらお暇申す」「疑晴れてござらうか」「參る〳〵大宮司殿、再會必ず期あらん」と、娘々も笑顏を作り、「隨分御無事で」「御達者で」「おさらば」「さらば」と立隔つ。唐土人も仲麿の、歌をしるべにふりさけて、今や見るらん春日なる、御笠の山にいづる月、空も五つになる鐘の、世上に響く東大寺、大佛供養も今日明日と、諸國の人の參詣を、待つや町筋狹しとて、山門の片邊、取茸屋根に置く露に、月の光も澄める茶の、暖簾の紋は釜敷に、土竈の煙絕間なく、買うて行く人賣る人は、女主の顏貌、むつくりとして味さうな、蒸し立饅頭買はしやんせ、世間に類は多けれど、歌には靑丹よしと詠み、奈良饅頭の餡もよし、殊更神の御誓ひ、慈悲饅頭の蒸し〳〵は、御笠の山に咽が鳴り、五重甑に立つ湯氣に、春日の里は賑へり。こゝに平家譜代の忠臣、上總七兵衞景淸、薩摩五郎信忠と云ふ者有り。一門御落命の折から、ともかうも成るべき身の、生は難く死は易し、長生して主君の仇を報ぜんものと、山林に身を委ね、時節を窺ひ居たりしが、今度大佛供養の爲、賴朝上洛と仄に聞いて、心を合せ隱れ家を、ゐでの玉水日は暮れて、急げど初夜になら坂や、饅頭賣る家の床几の端、暫し御免とたゝずめば、「是は何處より御參詣なされしぞ、夜に入りて御苦勞や、緩りとお休み遊ばせ」と、挨拶片手に煙草盆、「お二人ながら酒のなりそな御風俗、お嫌かは知らねども、所の名物、お慰に」と差し出す、饅頭より先づ女房の、笑顏ぞ一口喰はまほし。景淸は只一心に、術を工

夫し返答せず、五郎店借る追從に、「尊い寺は門からと申すが、そもじの風俗で饅頭の味も思ひやられた。見れば暖簾にも行燈にも書いて有る、家名は十一屋か、此心推量致した。饅頭を十買へば、一つ添ゆるといふ心で、十一屋と付けたのか、さうか〳〵」「眞に是も好い御推量、成程左樣と申したいが、此方の心は左樣でない、朝七つから店出して、夜の四つに店仕廻ひ、七つと四つの時を合せて、十一屋と申します」「是も尤、賴朝上洛召されしと聞く、付々も嘸ぞあらん。其外の參詣諸國の入り込、左程精出さいでは賣り屆くまい。なんと斯程結構に諸堂廻廊以下再興し、肝心の此山門ばかり殘したは、心有つてか但しは始末か、音に聞いた程にもない、賴朝は吝い奴だ」と打笑へば、「いや〳〵、此山門は其昔、聖武皇帝樣と云ふ王樣の御建立なされたを、平家の惡坊主淸盛入道が、此大佛を燒いた時、殘つたは此山門ばかり、能登守敎經と云ふ大惡人が、大佛樣へ射懸けた矢が反れて、此山門の垂木に當つた、矢の根矢殼が今に在る、晝能う見さしやんせ。如何に怖い者が無い、惡事が仕たいとて、日本第一の佛樣を燒きくづすと云ふやうな惡人が、ま一人と有らうか。佛ばかりか彼の堂では、五百人八百人、此堂では千人二千人、人ばかりも四千人程燒殺した其報、火付の大將頭、中將重衡、京鎌倉を引渡され、果は衆徒の手にかゝつて、七日暴され首切られた、其跡が山門の脇に在る、これも明日見さしやんせ。左樣に段々と惡行の積りつもつた果は、平家の今の態、主にも家來にも、頭を差出す者一人もない。此山門に手も付けず、其儘殘し置かるゝは、末代平家の惡逆を、人に知らせて嗜ません、世の見せしめぢやとの物語、私が樣な何にも知らぬ者でさへ、尤さうに存じます」と、それと知らねば女の口、齒に衣きせぬ長咄、餘所に聞きなす景淸が、本意なさ悲しさ口惜しさ、胸も碎けるばかりにて、忍び淚にくれければ、なま中のこと問出して、五郎も返答あぐみはて、「得て過ぎた事には、かならず付けつ添へつが有るもの、なんの平家ばかりがさう惡うも有るまい」と言消せば、「いえ〳〵此樣な事ではない、まだ大それた惡事が有る、咄しましよ」「いやもう承るに及ばぬ」と、聞かぬ先から耳驚かす四つの鐘、響き渡れば、「あれ四つが鳴る、店仕廻ひ時、各樣も宿取つてお休みなされ、其處退いて下さんせ」と云ふを幸ひ、「過分過分」と立退けば、土竈に水打ち行灯消し、道具一つも取直さず、側への葭簀さら〳〵と引廻せば、五郎見かねて、「是女中、土藏へ入れた物を盜み取る世の中、それは近頃不用心、まそつと念を入れて置かれよ」と氣を付くれば、「いえ〳〵、盜人の徘徊したは平家の代の時、今の源氏の慈悲深い靜謐な世に、そんな氣遣ひ些つとも無いこと、戸ささぬ御代とは今の時代でござんす」と、口も手元もしやん〳〵と、仕廻ひて別れ立歸れば、よしないことを又言うて、一度の恥に二度

の口、塞ぎかねてぞ見えにける。景清五郎をかたへに招き、「聞かれたるか五郎殿、賤しき女の口すら斯の通りなれば、御一門の身の上を、世上の嘲弄思ひやる、主君の仇を報ぜんと、死すべき命を存ゆれば、死に増る恥を聞く。此山門に鏃矢幹を其儘置いては、末代平家の譏を残す、頼朝を討つは、是を取捨てゝ後の事とは思はずや」と囁けば、「實も〳〵、口づから傳はることは中絶する折もあり、直に見するは情なし、というて夜の手業には取捨ても成るまじ。人間を窺ひ畫のこと」と、云はせも立てず、「ヤァまだるし〳〵、一心の眼力を以て捜さば、眞の闇も畫同然、幸ひ人も靜つたり、御邊の足首をつかんで差上げば、門の冠木に手は屆かん、それを傳うて二階へ上り、垂木を一々探して見られよ」「なう其段は御免あれ、御存じの我等眩暈病み、高い所へ上れば忽發る、地の上の働きは、何なりと指圖には背くまじ。ア、聞いてさへふら〳〵と、目が眩ふやうな」と頭を抱へ、胸押撫づれば、「よし〳〵人は頼まじ」と、草鞋ぬぎ捨て身を固め、柱を傳ひ上らんと立寄る所に、上り大路の松蔭より、人聲足音高提灯、見え來れば、「折あしょ、なう五郎殿、やり過し後又こそ」と打つれ木蔭に忍びける。山門の内より只一人、長刀を杖につき、のつさ〳〵と來る大衆、雙方行逢ひ、それと見るより、「ハァ岩永左衛門殿候ふな、御家來にも仰付けられず、御大身のかろ〴〵しく、御自身の御勤御苦勞なり」と挨拶す。

「オ大日坊か、身は御臺所の旅館へ參上し、只今退出申す、夜中只一人何方へ參らるゝ。元來和僧は平家の譜代、上總の忠清が弟、景清が叔父なれば、我君のさす敵、疾く誅せらるゝ筈の所身が取持ち、兄弟共不通致し、只今は平家の由縁なし。御疑はるゝ程の御奉公申上げさせんと、請合つて繋いだる首、何が打捨て、平家の餘類を尋ね、一手柄無うては、此左衛門まで虚言者に成る、隨分心がけめされ、ヤ其に付け和僧の娚の景清、存へて此世に在り、及ばぬ仇を報ぜんなどと、かやうの時節心懸け、和僧を頼み來まい物でなし、さあらば快く頼まれ、潛に知らされよ。討つてなりとも搦めてなりとも、岩永が高名にせねば、武士道立ちがたし。其遺趣は、景清に遺恨はなけれども、箕尾谷の四郎と云ふ者、景清を付け狙ふと聞く、其箕尾谷に討たせては、根井の太夫が娘を我手に入ること叶はず。景清を我手で仕廻ひ、箕尾谷にも鼻明かせ、根井が娘を我手に入れたさ、事を分けて頼み申す、合點か」「是は何より安い御用、些つともお心苦しめ給ふな。かやうな御用有らうとは存ぜず、我等が高名に仕らんと、工面致し置いたれども、其許元へ奉る、安堵なされ」と、懐中の一通取出し手に渡せば、「提灯もて」と火影に照し、見ては悦び讀んでは頷き、戴いて懐中し、「出來た〳〵御坊過分、委細は其時、さらば〳〵。提灯參れ」とゆふ露の、草踏散らし通りける。後に立ちて景清は、始終とつくと

聞きすまし、立出で、「貴僧は大日坊にて渡らせ給ふな、我こそ只今岩永に頼まれ給ひし、上總の七兵衛景清」と、聞いて俄に仰天顔。「イヤ驚き給ふな、悉く承はる、岩永に御返答は間に合せの僞か、眞實の御所存なれば手は見せぬ。御出家と申し、叔父甥のよしみを存じ、下手くろしう念に念を入れ申す」と、云はせも立てず、「扨々面目ない、佛祖冥理、いまの返答が眞實でたまる物か、否といへば即座に命をとらるゝ、それ悲しいではなけれども、存へて善果を積まん爲、間に合はせとも〳〵、御一門の滅亡聞くとひとしく、案ぜしは和殿が事、健固の對面滿足せり。今宵此處へ來りしは、深い願ひ有つてのこと、打明けて語られよ、何れの道にも疎略なし」と、無二の詞に心解け、手をつかへ、「貴僧の爲にも平家は主君、たとへ出家の御身なりとも、敢なく頼朝に亡され給ひし鬱憤は殘る筈、あはれ景清に力を添へ、頼朝が假屋へ忍び入る、手引をなされ下され」と、思ひこんでぞ頼みける。「オ、易いこと〳〵、手引せん」と抜打に、はつしと打つをひらりとかはし、其手を取つて引つかつぎ、大地へ撞と打付け乘懸り、「ムウ叔父ながら實の入つた惡人ぢやの、懸替もなき弟の儕を勘當なされ、追拂はれし我親の忠清殿は目水晶、ヤイ親程こそあらずとも、景清が底の根性見ぬくまいか。最前かくと知つたるゆゑ、眞二つにとは思ひしが、叔父は親の孝も有り、禮義も有る、とかく云ふ中心を飜せば、互に主君の御爲と、堪忍せしももう是まで、觀念せよ」と挫ぎ付く。「ヤア待て景清、些つと緩めて言ふ事いはせい。儕叔父を殺したらば、じうらいが好う有るまいぞ。近い證據は左馬頭義朝が子の源太義平、叔父帶刀先生義賢を殺した故、惡源太と異名を付けられ、六條河原で首斬られしを知らぬか。儕も我を殺したら、惡七兵衛と笑はれん、能う分別せよ」と減らず口。「オオ惡七兵衛は愚の事、鬼七兵衛、蛇七兵衛とも言はゞ言へ、何ともない」と腮に手を懸け、首捻切らんとする所を、薩摩五郎飛んで出で、利腕取つて引きのくれば、隙をあらせず大日坊、弓手の腕しつかと取り、うんと聲かけ景清が、兩手を二人が土に捻伏せ、「やい景清、いかに二相を悟るとも、薩摩五郎が此體は、合點が行くまい。大日坊と某、終に對面はせぬとも、書狀を以て牒し合せ、此度の大佛供養を幸ひ、頼朝を討たう、いざ往かう〳〵と某が進めたは、頼朝を討つではない、儕を先づ斯うせん言合せ、深い工思ひ知つたか。なう大日坊、我が出るを待ち兼ねたで有らうの」「待ちかねた段ではない、景清が名を聞き、貴殿も御出とは知つたれども、顔見ぬ内は幾瀬の案じ、書狀も岩永の御目にかけ、見え次第同道申す筈、幸ひの土産、サア繩打つて連れ行かん」「尤」と、腕捻廻すにちつとも動かず、景清くつ〳〵と吹出し、「もう吐かすことそれまでか、死人に成つて物は言はれぬ、言うて置け〳〵」「ヤア死人とは誰

が事、言ふこともう無い」と、汗水に成つて身を悶く。「言ふことなくば是れ見よ」と、左右を一度に腕がへし、ころ〳〵轉び打ちながら、「生擒には叶ふまじ、首にして連れ行かん」と、拔合せ、挾み立てゝ切りかくる。得たりや應と渡り合ひ、互に磨きし刃の光、月に嘯く春日野の、飛火を散して切りむすぶ。大日坊が頰、頤、かけて切付くる、其太刀風に薩摩五郎、一人立では叶はじと、跡をも見ずして逃失せける。「ヱ、大腰脫け奴、討ちもらせし腹立」と、大日坊に乘りかゝり、吭のくさりをぐつ〳〵と、突きならす鐘の聲、「一ィ二ウ三ィ四ウ五ッ、早七ッか、八ッ九ッも我耳へは入らざりし」頓て店出す饅頭屋が、葭簀の蔭に忍び居て、疾くより窺ひ見るとも知らず、衣引剝ぎ袈裟もぎ取り、ずんぼろ坊主に剝ぎむくり、一色殘さず搔抱き、死骸を蹴散らし忍び行く。叔父の首切る其のかはり、名字の上總も言切つて、惡七兵衞景清とは、此時よりぞ申しける。女房葭簀を跳り出で、「扨こそ〳〵、景清と見た目は違はぬ、君を狙ふに疑ひない。斯う云ふ内も御臺樣の御前が氣遣、假屋へ往かうか、但し夫に知らせうか。いや景清が落先を、見屆けて置くが肝心關門、饅頭屋が蒸立見よ」と慕ひ行く、餡もよし又思案よし、健氣成りける三重。春日山、鹿立つ峰の朝風に、敵の榮華や散りぬらん、上總の七兵衞景清は、今度の供養に賴朝を、討つて濛霧を散ぜんと、扮裝つ衆徒の似姿、素肌にきたる伏繩目、しけ金物の大鎧、草摺長にざつくと著、上に衣の玉襷、袈裟を結んで鉢卷し、敵を冥途へ送りやる、十王頭の脚當に、我身を守護の毘沙門小手、重大の痣丸、脚緒長に結び提げ、跡に續きし女房の、心しめたる高褰げ、油斷せぬ氣は一腰の、鯉口早く拔きかけて、附き從ふともしら柄の長刀、小脇に搔込み見渡せば、廻廊諸堂ことぐ〳〵く、家々の幕兵具を飾り、警固嚴しく見えたりける。音せで通らば惡しからんと、所々に大音上げ、「警固怠り給ふな」と、呼はつて馳通る。此處ぞ賴朝の假居と思しく、襞白の大幕、風に靡いて優々たり。「サァ仕おふせし嬉しや」と、のッさのッさと歩みしが、「いや〳〵内も用心さぞあらん、千里の馬も躓き、侮つて不覺をとらば一期の瑕瑾、不敵達は無益ぞ」と、汀のさきの小鮎を覗ふ忍び足、「待て」と一聲かけければ、さしもの景清恟りし振返る。「なう肝の太い景清、我君を討たうとは、溫か饅頭屋の女房と思やつたら、餡の外の食ひ違、誠は本多の近經が妻の唐綾、夕べ逢うた覺えてか、一寸も奥へは遣らぬ、返せ〳〵」「ヤァ小癪なり、女相手にする景清ならず、すつ込んで居よ」と取合はず。「いや〳〵、其方にせいでも此方に成る」と、ずはと拔いて打懸る。詮方なぎなた取直し、鐔にて受けながし、結んづほどいつあしらへども、女に奇特の太刀さばき。「ヤァ隙入る、面倒なり」と鐔取りのべ、ぐつとあてみに本多が妻、眩暈いてたぢ〳〵、打ち

すて歩み行く先の、幕をひらりと押上げて、袿襠漏るゝ押取刀、秩父の奥方玉房御前すつくと立つ。思ひ懸けなく景清は、又びつくりして立ちとゞまる。「ヤァ〳〵唐綾、誰を見て景清呼はり、其景清どれ何處に」「ハァそれこそ」と教ゆれば、「いや〳〵是は所の衆徒、あの扮裝が唐綾目にかゝらぬか。景清ならば平家に取つても、仁義を兼ねし勇者と聞く、我君を狙ふとも、尋常に名乘りかけ、神妙の働こそ有るべけれ。卑怯なさもしい姿を變へ、女計の此假屋へ、大人氣無う何んと來られう、必粗忽言やんな。是れ坊樣、今度の供養に賴朝樣は上洛なされず、此處は御臺所政子樣の御假屋、坊主の來る所でない、歸らしやれ〳〵、但し方角に迷うてか。ヤァ〳〵大衆の馳走人、本多次郎近經道しるべせよ」と有りければ、はつと答へする〳〵と立出で、「箇樣の御用も有るべきかと、疾くより木陰に待受けたり。我等本多次郎近經、賴朝公の御諚を請け、大佛供養の内、大衆方の御馳走、又猥なる仕方あれば、禁めも我等の役、方角に迷うての推參ならば道の案内せん、狼藉ならば計らふ旨有り、サァ返答を承らん」と、空知らずしてにぢりかゝれば、「ヤァ忌ま〳〵しい何の坊主、姿を變ゆるは一旦の計略、賴朝を討つに二つはない、上總の七兵衞景清見て置け」と、頭を包みし袈裟かなぐつて捨てければ、扨はと二人の女も詰めかけ詰めかけ、眼に氣を付け油斷なし。近經しばしと奥を諫め、女房を制し、

「ヤァ景清、我君を平家の仇、主人の敵と狙ひ奉るは、以ての外のひがごとなり。太政入道朝恩を忘れ、やゝもすれば天子を惱まし、民を苦しめし其積惡、後白河の法皇院宣を賜はり、平家を亡ぼせよとの勅諚なれば、平家の敵は身の奢り、我身を我身の敵とは知らざるか。良禽は木を見て栖み、忠臣は君を選んで仕ふ、心を悛め只今より、賴朝公に奉公せよ」と呼はれば、「ヤァ賴朝に奉公せよとは何んの囈言、二言と吐かば捻り殺してくれんず」と瞋齶をなし、「エエ口惜しや今度の供養、賴朝上洛したれども、斯く云ふ景清を初め平家の餘類を恐れ、御臺と世上へ思はせん爲、態と女輩を召連れたりと、薩摩五郎が注進を、彼が我を誘出す計略とは心付かず、嬉しや大意を達せんと、忠を一途に姿を扮し忍び入り、由なき骨を折つたよな。景清が心ざす敵は賴朝一人、臆病風引込んで、鎌倉に隱れ屈めば力なし。女輩本多風情、五萬十萬切つて罪作り、本望のほの字にも屆かず、先此度は返る〳〵、時節を待つて、賴朝が頭は景清が手裡に在り、かねて名殘を惜しんで置けと傳へよ」と、しんづ〳〵と立出づる、所へ手の者引具し、岩永左衞門哄と押寄せ、「ヤァ不甲斐なし近經、景清を何故返す、手に餘らば左衞門が受取つた。薩摩五郎は無きか、あれ討ちとめ」と呼はれば、本多は左衞門に打任せ、皆々制して假屋に入る。身輕に扮裝つ薩摩五郎、飛んで出で、「なんと景清、五郎が計略段々とこた

へるか、我等岩永樣の御蔭にて、行行にも召し付く筈、羨ましくば降參せよ。傍輩のよしみ、取次いで得させん」と罵つたり。景淸眼を赫と見開き、「逢ひたかつたに能ううせた、儕ばかりには殺生も佛も入らぬ、手並は豫て知りつらん」と、大白黑氣の其勢ひ、長刀柄長く押取りの べ、微塵になさんと渡り合ふ。百獸の洞の內、獅子の暴れたるごとくにて、はらり〳〵と薙ぎたつる、其勢ひに岩永左衞門、人一番に逃げ失せたり。主人が逃げれば手の者共、影さへ見せぬ其中に、五郎一人が勝手は知らず度に迷ひ、狼狽へ廻るを引捉へ、「せんずやうもなき人非人」と、大地にぶち付けしつかと踏まへ、一捻ねぢてぐつすりと、首引拔いて突立上り、見れども假舍靜まつて、手ざす敵もなかりけり。よし〳〵今度は遁すとも、我が見込んだる一念力、岩にも入り雲にも乘り、鎌倉山に籠らば籠れ、山を劈き岩を破り、終には本意を達せんものと、長刀小脇に搔込んで、しんづ〳〵と出でて行く。道狹からぬ天が下、敵を助くる仁者の道。古主を忘れぬ義者の道、步むも道の道ながら、誠の道は世々にひく、弓矢の道をしるべにて、行方定めずなりにける。

第二

淸水や、大慈大悲の眞如海、誓ひを結ぶ御緣日、其佛閣の下河原、菊水の邊の辻講釋、漢楚軍談三國志、講師關原甚內と、紙に記し柱にかけ、紙子の長も行き詰りし、浪人らしく一腰ぼつ込み、聽衆を引き受け見臺にかゝり、本引き開き素讀する。「此時漢王自ら丞相府に到つて迎ひ給ふ、大將軍を見れば韓信なり、樊噲色を失うて、御車の前に拜伏して申しけるは、韓信は漂母の食を乞ひ、市に胯をくゞりし者なり、今大將軍に拜し給はゞ、項羽聞いて大きに笑ひ、天下の諸侯も漢中に人なしと嘲らん、必ず止り給へと申しければ、蕭何走り出で、樊噲無用の舌を動すことなかれ、我れ不才なれども、丞相の職にゐて大將軍を薦め、事既に定つたり、樊噲を縛つて獄に下し給はずんば、諸大將皆不禮に傲はんと申しければ、漢王武士に命じて樊噲を縛らせ給ふと、扨昨日の講釋は漢楚軍談五卷目、張良が割符を以て、蕭何曹參兩人が、韓信を大將軍になされと進め申した所でござります。今日は其次、漢王壇を築いて韓信を拜すと云ふ下、扨只今素讀致いた樊噲が人柄は、各々方の思召しは、定て色眞赤いに頰髭荒れ、我儘氣隨の大力、日本で申さば、アノ坂田の公時か、公平抔が樣に有らうと思召しましよ、中々强いばかりでござりませぬ、智慧第一と言ふ張良、陳平にも劣らぬ大分別者と聞えました。時に分別と言へば、此本文のごとく、樊噲が韓信を大將軍に拜なさるゝことは無用なりと止めたる咎、

それ縛れといふやいなや、がらり後手三寸縄、牢屋へついと引いて參つた、其處で供先がもやつき出した、彼處ではちよびくさ、此處ではぶつくさ、なんぞと聞けば、樊噲殿さへ彼の通り、況んや我等韓信を大將軍になさるゝこと、御無用なりと言うたら最期、だまれ〳〵と幾千萬の大將士卒、皆韓信が手下に付いた、何んと我身一人縛られて、大勢の口をとめ、韓信が下知を聞かせた樊噲は、力ばかりでない、大分別者ではござりませぬか」と聽衆も聞取り餘念なく、心空なる空かきくれ、俄に一群降りくれば、やれ大降りとゆふだちの、足もとまらず聞く人の、皆ちり〴〵に逃歸る。殘るは甚内只一人、邪魔な雨やとゆふ立の、跡晴れ渡る講釋小屋、又人寄を待ち居たる。降る雨は、とてもかくても凌ぎなん、涙の雨は晴間なく、凌ぎかねにし衣笠は、父大宮司に誘はれ、親子潛に古鄕を出で、心ざす方そんじよそこと、音に聞きつゝ音羽山、清水を尋ね來りしが、側へを見れば、講釋小屋に人待つ風情、幸と立寄つて、「是れ物問はう、五條坂は何處ぞや、阿古耶と云ふ遊君の、所を知らば教へてたべ」「ハア、是はお連も女中方、遊興なさるゝでも有るまい、ハテめんような人をお尋ねなさるゝな」「されば阿古耶と云ふ女に逢はで叶はぬ我々故、尾張から遙々尋ね參つたり」「はてそれは遠方から御大儀千萬、是れ此道を南へ行當り、左へ上る道が有る、それを一丁半程いて、花扇屋の戸平次と尋ね、阿古耶と

問へば隱れがない」「是れは〳〵忝ない、去ながら、名も家名も覺え憎い、筆があらば貸してたべ」「いや筆は有合せず、其お持ちなされた扇子を鼻へ斯うお當てなさるれば、花扇つい思ひ出さるゝ」と、座興も老の律儀に受け、「此扇を鼻へ當てれば花扇、コリヤ出來た、講釋なさる程有つて、頓智發明覺えた〳〵、御禮は重ねて〳〵」と、娘をいざなひ尋ね行く。かゝる所へ、「捕つた〳〵」と聲高く、檢斷所の捕人の役人、ばら〳〵と駈來り、講釋小屋を追取り卷く。思ひがけねど豫ての覺悟、甚内床几をひらりと飛び、後の高垣小楯に取り、小屋の柱の節間近き、陳竹取つて押撓め、身構へし、「ヤア人違ひか名の誤か、講釋は致せども、召捕らるゝ覺えなし。上を恐れ奉れば、刃物に手は懸ねども、仔細を聞かぬ其内は、縄もかゝらず、サア仔細を言へ聞かん」と、八方睨んで控へたり。「ヤアこざかしき咎め、上意を背くか、仔細は御前で直に聞け。物な言はせそ、打ちするゞて引つ括れ」と一番手、十手振り上げ突つかゝる。さしつたりと飛ひちがへ、歪めし竹の片手を放せば、眞額より片鼻かけ、はつしと彈かれ、眼暗んでたぢ〳〵、蹇ひ迚り引つかへす。二番手は叉鎗を、捕つたと突き出す狙ひを外し、沈んで裾を反ねさすれば、向脛をあいたしこ、眞逆樣にでんぐり返り、隙もあらせず三番手、棍棒取りのべ、卷いて捕らんと突き出す。心得たりと身をかはし、つゝと入つてすてつぺい、微塵に

なれとしつべい彈さ、棍棒からりと投捨てよ、べつたり土につくばうたり。一人がかりは叶はじと、大勢四方を取廻し、亂れ蒐るを事ともせず、脛骨肩骨、當る所を幸ひに、力有りたけ人有りたけの、節を碎き手を碎き、心を碎いて凌ぎける。されども防ぐは只一人、終に大勢折り重なり、押へて繩をぞかけにける。物頭半澤六郎成清駈け著くれば、組の小頭罷出で、雙方の働き具に相述べ、目通り近く引つすゆる。六郎立ち寄り、面體より形格好、とつくと見屆けびつくりし、「扨こそ〳〵、早まつたることしたりな、似は似たれども、御尋ねの者にはあらず人違ひ、それ繩解け」と有りければ、捕手共ぎよつと互に顔見合せ、解きかねて立ちかねれば、繩付も共に驚くばかりなり。「ヤァ關原甚内とやらん、繩懸けし間もなく解けといふ、嘸不審立つべし。我主人の相役岩永左衞門殿、夜前對顔の節和殿が噂、下河原にて辻講釋する甚内と云ふ者こそ、平家の侍惡七兵衞景清に極つたり。月番なれば重忠の手より召捕り給へと有りし故、某を召され、召捕り來れ、去ながら世には似たる人も有る、粗忽の仕方すべからずと仰を受け、實否を聞きつくらふ其内に、組の者共手柄を爭ひ此仕合、彼等が粗相は六郎が誤り、手を摺り申す宥免せられよ。去にても一腰を帶しながら、上を恐れ刃向はざる神妙さ、ホウ働の健氣さ奥床し。甚内と云ふが實名か、名乘られよ、披露して爲惡しくは計らはじ」と、立寄つて繩解きほどけば氣もほどけ、扨はと安堵してけるが、飛びしさつて手をつかへ、「是は却て恐れ入つたる御詫言、日本一の剛の者と聞及ぶ、景清に似たる故、御疑に預りしは、身に取つて恥辱にあらず。重忠の御内に、誰あらん半澤六郎成清殿、繩解いて下さる上、何を不足に一言のお恨み申すべき。殊更身の上御尋ね、申さねば結句憚有るに似たり、關原甚内と申すは今日渡世の假の名にて、誠は伊庭の十藏一幸と申す浪人者、一人の老母養育みの爲、面をさらす辻講釋、物給べなうと請はざるばかり、世に住む甲斐もなき身の上、御尋ねによつて物語、御恥し」と俯伏き、涙ぐみて見えにける。六郎下部に持たせたる烏目、十藏が前に置かせ、「和殿古き文にも見つらん、龍も池中に在る時は、蚯蚓に類を同じうすれども、上天の氣を得る時は、勢ひ宇宙に溢ると見えたり。今浪人の世渡りは、何をしても恥ならず、立身出世は頓てのこと、隨分老母に仕へられよ。輕少ながら此烏目、老母の方へ進上申す、必ず〳〵人違に、渡世の邪魔せし心付などと思はれそと、聞きもあへず、「いや〳〵〳〵、只今一錢でも申受けては、人違の勘忍代となり、詫言の料などと、雜人の口に懸けられては、貴公も我も一分立たず、無用なり」と、戻さんとせしが待てしばし、老母に下さるゝ志、突返しては不禮の至、申受けては快からず、ハテ何とせんかとせんと、あたりを見廻し、「それよ〳〵、此奉る觀世音、老母の二世を加護し給へ」と、側に

立てたる清水の、賽錢箱へ投げこんだり。「なう其義心を見るに付け、彌々粗忽面目なや。此旨主人に言上すべし、又對面せんいざ去らば」と、一禮述べて立歸る。權威に募らず誤りを、誤り入つたる六郎が、淳も秩父の家柄を、却て譽めざる人はなし。十藏跡を見送りて、「エヽ花も實も有る武士や、萬一外の役人ならば、儕が粗忽を包まんと、何の分も聞き入れず、今時分は後手に、オ好かぬこと〳〵、こんな時は早く歸つて、母者人のお顏を見るが身の祈禱」と、一人呟き、「是は扨、小屋を粉灰に打ちめいだ」と、散りちろばひし木や竹を、拾ひ集むる折こそあれ、深編笠に世を忍ぶ、浪人めけども鰭有る男、菊水の邊に立ちやすらひ、「なう講釋殿〳〵」と小手招き、「ヤ誰ならん」と、立寄つて差覗き、「是は御浪人樣、此頃は見えもなされず、今日は觀音の御緣日、定めて御參りなされうと、今朝から心待ち致した。今御參詣かお下向か。お聞きなされて下さりませ、私を惡七兵衞景清ぢやと申して、重忠の家來半澤と申す者、只つた今參つて召捕らるゝ所、人違ひに極り歸りしが、御覽なされ、小屋も打ち碎かれ、お腰懸けられと申す所が無い」と、氣の毒がれば、「それ餘所ながら見申した、なう其惡七兵衞景清とは身共が事さ」「エ是は思ひ懸もない、其景清樣が何故に、去る秋お目にかゝりしより、御不便を加へられ、今頃拂底な金銀を、毎度々々何故下された」と肝潰せば、「いや未だ跡に段

段有る、一時に肝つぶすまい。今日半澤六郎が召捕に來りしも、御身が形格好、此景清に能く似たる故、其似たる故、某かねて思ふやう、天下の武將賴朝を狙ふ我なれば、却て我を詮議も嚴しく、用心も又さぞあらん。賴朝に心ゆるさせ、油斷を窺ひ討たんには、此講釋師をこまづけ、退引させず腹切らせ、景清運拙なく、切腹せしむる者なりと、書置を添へ置かば、すは景清こそ腹切つたんなれと、京鎌倉心ゆるし、油斷は必定、其虛を窺ひ討たん物と分別し、折々與へし金銀は、和殿を殺さん命の價とは知らざるか」と、聞いてぎよつとし、驚き顏の色ちがへば、「いやぎよつとせらるゝな、未だ驚くことが有る、花扇耶の阿古耶が兄の伊庭の十藏殿」と、いへば大きに仰天し、「して〳〵私の本名、阿古耶と兄弟と云ふこと、何として御存じなされた」と、興さませば、「面體格好の似たる貴殿さへ、景清かと詮議有る我なれば、嚴しさを推量せられよ、都に足は留め難し、一先立退かんと思ふに付け、五條坂へ立越え阿古耶に出逢ひ、右の段々を語れば涙を流し、其講釋師甚内と申すは、伊庭の十藏と云ふ我兄弟なりとの物語、我も聞いて興さめしが、假初ながら馴染深く、子まで懷胎せし其中に、今までそれとは何故知らせざりし、其心では我事も、兄には咄すまじと尊ぬれば、大望有る御身の上、兄にも心置かれ、露ばかりも知らせずと、我をかばふ阿古耶が貞心を聞くに付け、我が禍を貴殿に塗らんと、

其時まで思ひ詰めし物語し、我惡念空恥しく、一生赤めぬ此頰を、燃え立つやうに覺えしぞや。知らぬ内はそれも是非なし、知つては片時も捨て置かれず、今宵立退くを明日へ延ばし、我心底を打明け、緣者の因を結ばんと、わざ〳〵是まで參りたり、十藏殿」と、思ひ侘びたる面色に、餘りのことに呆れもせず、「扨は阿古耶を不便に思召す方よりと、老母が方へ度々のお心付も貴公よな、ハア」はつとばかりに差俯伏き、暫し詞もなかりしが、「エ、くやしや、此事を昨夕にも今朝にも存じたら、半澤が來りし時、我こそ上總の景淸に成り濟まして、仕樣模樣も有つた物、おそかりし殘念や」と、拳を握り身を顫はし、目を摺り擦するばかり。「なう其心底聞いたる故、逢はで行かんも本意なさに、是までは來たつたり。構へて〳〵我事は、心の端にも懸けらるゝな。骨柄と云ひ器量と云ひ、奉公すとも易かるべき身なれども、老母の末期を見屆けんと、諸人に面をさらし辻講釋、三錢五錢の志に命を繫ぎ、恥を忍ぶ親孝行、感じても猶餘り有り。阿古耶が緣につらなる我なれば、貴殿の老母は我母なり、七十に餘り給ふと聞く、此世の逗留末近し、起臥心を付けられよ。著古したれども此羽織、是を貴殿へ參らする、今まで贈りし合力は、塵塚に捨つる塵埃泥に投げる石瓦に劣つて、恩にあらず情にあらず、是ばかりこそ景淸が、誠の心を染羽織、朝夕肩に打ちかけ、一所に孝行賴み入る。心せかずば立寄つて、老母のお目にもかゝるべきが、世をも人をも忍ぶ身の、無體御免と傳へてたべ。隨分健固に又對面、お暇申す」と立出づる、袖にすがつて「なう暫く、心は千萬留めたけれども、忍ぶも且は智略の一つ。して〳〵落行く先は何處、言ひ殘されよ」「されば〳〵、今宵は上の醍醐に一宿し、其行先は又其處にての思案次第と思はれよ」「オヽ、尤々、何をいふも、此處は途中恐れ有り。詳しきことは跡より追付き物語、我行くまでは必々逗留あれ。是れ斯う〳〵」に耳に口、外には誰もきく水の、井戸を隔てゝ囁き合ひ、「先それまではさらばさらば」「オヽ、さらば」と、互の目禮思はずも、映る姿の水鏡、「それ十藏殿、其面體が我頰と、似たではないか」「似た段か、思へば半澤六郎が、見違へたるはハヽヽ」笑うて互に別れける、勇者は離別に歎かずとは、かゝる事をや　三重ゆふ間ぐれ、物の黑白も見ぬあたり、小家がちにとすさみぬる、筆の跡には引きかへて、町の模樣も風俗も、得ならず見えし五條坂、黃昏時を戀ひわびる、懸行灯の灯影さへ、白く咲きたる軒のつま、花扇屋と隱れなし。家名ばかりは人めきて、主人を問へば戸平次とて、こゝら名うての橫著者、色と慾とを二道に、稼ぎ歩きて歸り足、表の口より喚き聲、「こりや何奴も店にけつからぬ、只た今日が暮れたに、何處へすつ込み臥つてをるぞ、竹め、林め」と呼立つる。下女も小女郎も所ずれ、「オウオ結構な旦那樣、内はお客で

てん〳〵舞ひ、お料理よ吸物よと、上を下へとかへして居るに、今頃戻つて、内外の者は何んに成れ、アレお手が鳴る、アヽイ。お林、ちやと往てたも」と忙がしがれば、「何んぢや、客がとれた、町人か二本か、喰ひ度い物喰うてずいぢやないかよ」「いえ〳〵歴とした旅のお方、お供の衆に問うたれば、尾張の國に去るお方、今度京へ忍びの御行き、内方の阿古耶様を、聞き及んでのお望み、隨分御馳走申せと現銀の仕拂ひ、昨日の晩の丁字頭が、こんな小判に成りやした」と、一包差出せば、「こりや出來しをつた、天晴忠義」と、金に逢うてはほや〳〵顔、障子の隙より奥差覗き、「さうして阿古耶は座敷に見えぬが、こりや何處に何して居る」「いえいえ、阿古耶様は晝過から、祇園の佐野屋へ送つて、それから直にいつもの清水參り、ほんに奇特なおさんで」と、云ふを打消し、「何が奇特、嬉しがりもしられぬ觀音様へ參らうより、此おれに靡きをつたら、なんぼ利生が有らうぞ。イヤ好い事を思ひ出した、清水へ逆寄せして、戻る所引捕へ、日頃の思ひ晴してくりよ」と、言捨て出づる門口へ、町の歩使が「申し〳〵、何事が起つたやら、お代官のお使が、名主様を會所へ呼付け、目の抜ける程叱つた上、花扇屋の戸平治を連れて來いと、焦立ての口上、サアちやつとござりませ」「ハテきよと〳〵しい彼の頬はいの。高が何ぞの言渡し、ちよぼいち張るな。畏つた、第一の宿成らぬ、心得たと、判さへ捺せば濟むこと、留守ぢやとは吐かさいで、胴因果な猿松め、サア失せをろ」と先に立ち、膨れ頬して出でて行く。白波の、寄する渚にあらねども、こよも流の假枕、跡なき夢はつい覺めて、送り迎ひの袖の露、伊達にふつ〳〵あこやとは、浮世に捩ねし戀の闇、照す廻しが挑灯に、それとしるしの花扇、主が許に立歸る。奥の座敷に只一人、待つも久しき宵の月、あやしの簾かけ造り、障子半蔀押明けて、隔てぬ中の親子づれ、前の大宮司通夏は、娘相手の氣晴し酒、人の氣を汲む小女郎が酌、「お待ちなされた阿古耶様、今お歸り」と知らせるにぞ、國元までも隠れなき、花の都のお女郎、さあ〳〵是へ」と老人の、不束ならぬ挨拶に、様子有り氣の一座とは、見て取る阿古耶が胸の中、上べの伊達の勤振、「ほんに浮世は味な物、こんな侘びた所さへ、色里の數に入り、遠い國まで隠れなく、阿古耶を見ようの呼ばうのと、心づくしに預るは、苦界するの身に取つては、忝いとも本望とも、萬の事はさし置き、飛んでも戻る筈なれど、心に任せぬ憂き節とて、立ち破られぬ先の座敷、斷りたら〳〵漸々今、遲いは赦しなさんせ」と、烟草吸付け差出せば、女中は烟管いたどきて、「花も實も有る仰、先づ盃とも申さうが、父様とても自も、尋ね聞きたい分有つて、心がせけば」と差寄りて、「平家の侍七兵衛景清殿、過ぎつる壽永の秋の頃、御一門の御供し、西國に下り給ひしが、御身の上に恙もなく、

都に歸りましますと、慥な便り聞きながら、終に一度の便宜もなし。そもじのことは豫てより、聞いて知つたる深い中、七兵衞殿のお身の上、御座り所も御存じならめ。姫御前は相互、語つて聞かせて給はれ」と、打付けに問ひ懸けられ、扨はと彌々心にをさめ、「其お尋は何のこと、七兵衞さんやら八兵衞さんやら、一座流れのお客の名、當座は覺えて居もせうが、跡が跡まで、それがまア、寺方か何んぞの樣に、過去帳に付けては置くまいし、わしや知らぬはいな。殊に深いの淺いのと、微塵此方に覺えの無いに、そんな事聞きや遣る瀨がない」と、流行詞で紛らかす。父の老人側より引取り、「いや是は御尤、世間存ぜぬ田舍女、我胸ばかり合點して、藪から棒の尋ねやう、なんの有りやうを答へ召されう。斯く申す拙者は、尾張の國熱田明神に仕へ申す、前の大宮司道夏、これなる娘は衣笠とて、彼の七兵衞が連添ふ女、露程も隔て心ない中、前大宮司道夏とは、豫て沙汰にも御聞き有るべし」「ナァニそんなむづかしい、歌骨牌に有るやうな、永い名は今が聞初め、衣笠樣でも塗笠樣でも、知らぬことは仕樣ことがない」と、けんもほろゝに言ひ放せば、「そんなら如何でも我夫の、景淸樣は知らぬぢやまで。エ、さもしいぞや穢いぞや、流石は浮かれ女一夜妻、我心に引きくらべて、本妻の衣笠が、慳氣嫉妬の氣もあろかと、疑うての事ぢやの、慮外ながら熱田の大宮司、長袖とばかり思うてか、二腰差いて武士の行儀、其娘の衣笠が、何の卑怯な妬みが有らう。夫の噂の樣にもない、見ると聞くとのお女郎」と、心の蔑しみ穂に出づれば、猶も勤の氣質を見せ、「妬が有らうが鼠が有らうが、知らぬから構ひはせねど、素人女子の癖として、流を立つる身とさへ言へば、さもしいとのみ心の嘲り、口へは出ねど顏へ出て、はしたない本妻呼ばはり、本妻ぢや妾ぢやとて、夫を思ふに二つはない」「オ、其思やる夫の行方、否やでも應でも知らさにや置かぬ」「こりや新しい、をかしいはいの、面々の夫の行方を、此阿古郎に無理に知れか」「まだしらぐしい彼の顏はい」「エ、つべこべと彼の口はい」と、互に募る女の意地、煙草の愛想も引換へて、二人が燃すしゆらをの烟管、かつちかち〳〵灰吹の、口もさゝけるばかりなり。折しも伊庭の十藏は、講釋の場の人違へ、不慮の難儀を遁れし上、景淸が情の程、妹阿古耶に語らんと、心ざしたる宵の間の、人目にかざす扇屋の、内に通ればド女小女郎、「是はマア久し振、珍らしい御出」と、言ふに阿古耶が氣の配り、尻目遣ひ簾越し、見馴れし羽織の絞所、兄十藏とは露知らず、顏は反向けし灯火の、景淸と見るよりも、惡い所へうとましと、思ふ心に思はず知らず、「まあ〳〵今宵は往んで〳〵」と頭振る、「いや此兩人罷り歸らぬ、夜が明けうが日が出ようが、尋ぬることを聞かぬ間は、いつかなことにじらぬ、ヤアえいとこな」と床の間の、木枕取つて

寢轉ぶにぞ、「オ、何時までなりと氣根次第、勝手次第、勝手に〳〵、座敷へは差合ぢや」と、心を碎く言廻し、十藏何んの氣も付かねば、次の座敷に人待顔、「アレ未だ往なずぢやエ、辛氣、氣に喰はぬ座敷、べら〳〵とは勤めぬ」と、ずつと立つて間の障子、ぱつたりさすがに衣笠は、おほこ育ちの氣も弱く、何と詞をかけ造り、下の座敷と隔して、心を明かさぬうたてさよ。阿古耶は次へ立つや否、「時も時折も折、ひよんな所へ景淸殿」と、縋り寄つて「ヤア兄樣、十藏樣、さつても似たり、横顔なら形振なら、瓜を二つ。其上に此羽織、如何して召して」と不審顔、胸なで擦るばかりなり。「さればく〳〵、似たに就て今日は既に危い事」と、耳に口よせこまぐ〳〵と、暫く語る其内に、垣間見したる前大宮司、娘引き連れ、「やあ〳〵聟殿、見付け申した、お隱れ有るな」と聲かくれば、衣笠も後に寄り、「是なう聞えぬ景淸樣、如何程忍び給ふとも、手づから仕立てし此羽織、見違へて好い物か」と、身を引廻し顔を見て、「ヤア此方は今日の講釋殿か、ハッ恥し」と差俯伏き、しばし詞もなかりしが、「此羽織召すならば、景淸殿のお行方、此方が知つてに極りし、わしに聞かせて給はれ」と、頼むにも又涙なり。十藏も重ねぐ〳〵、取違へられ氣もとまぐれ、挨拶しどろに呆るれば、「いや〳〵兄樣合點が往くまい、彼方はな、尾張の熱田の大宮司樣、お娘御の衣笠樣、誠有るお方とは、常々噂に知つたれども、今の身柄の景淸樣、お爲如何と心を隔て、時の拍子の言懸り、深うお隱し申せしが、衣笠樣聞いてたべ、景淸樣の御事は、今兄樣の御咄、鎌倉よりの詮議强く、都の住居も折惡しければ、暫し他國に身を隱すと、暇乞さへ言傳わざ、日蔭のお身のおいとしさ」と、語るも聞くも涙なり。父の老人十藏に打向ひ、「景淸ははや京地を立退き、行方もさだかに知れぬとな。べん〳〵と尋ね歩くも、正眞の闇に礫、幸ひかな、其元の形格好、景淸に似たる上、定紋の居わりたる其羽織を著されしは、我神道の一體分身、取りも直さぬ七兵衞景淸、此前大宮司が逢ひたい用事外ならず、娘衣笠に暇をくれ、夫婦の緣を切つてたべ、頼み申す」と差付けに、思ひこんだる一通り、聞いて驚く衣笠姫、「父樣それは何仰しやる、お心の亂るゝ程御酒は上らず、そもやそも俄に狂氣もなされまいが、夫婦の緣を切らさうとは、國元で仰しやつたお詞とは天地の違ひ、わしやつんと合點がいかぬ」「オ、合點はいかぬ筈、都に上り夫を尋ね、連歸らんというたはな、此父が虚ぢやはやい。世になき平家の討漏されに、緣に繫ぐは身の滅亡、切腹か遠島は鏡にかけて、いやゝの〳〵、義理も情も背中に腹」と、云ふに悲しさ遣る方なく、「日頃は義理も惠も有る、父上と思ひ暮せしに、何時の間に其樣な、卑怯なお氣に成り給ふ、淺ましさよ」とかきくどく。「ヤア〳〵くどく〳〵と叶はぬこと、是でも非でも景淸に、緣切らさうと極

めた胸、變ぜぬが神道の第一、サア景清の一體分身、娘衣笠に暇をくれめさ、一家の因がきりたい」と、詞するどにこねかくる。十藏も恟とせしが、憎い心底、恥かゝせて腹癒んと、「オヽ神道の一體分身面白し、我世渡りは軍書の講釋、樊噲を語れば樊噲が魂、張良を說けば張良が意氣、其理を以て七兵衞景清が性根に成つて返答する」と、老人が顧先、顏突き付けてはつたと睨み、「神は非禮を受けずと云ふに、穢れ不淨の魂にて、頰の皮の熱田の糟糠宜、そつちから望まいでも、此方に添はぬ女房、去つた〳〵」と、詞も引かぬに衣笠嫗、「イヤ推參な十藏、澤山さうに人の女房、去つた〳〵としこなし顏、しや本にをかしい。寄るも〳〵氣違の有る條、此衣笠は相手にならぬぞ」「相手にならうが成るまいが、舅が心見下げし上は、男のかうけ離別離別」「オヽ、此父が呑込むからは、如何にもさつぱり緣は切つた」「いゝえ、なんぼ仰しやつても、景清殿は金輪際我夫、斯う言うたらてつきりと勘當、親子の緣を切らうで有らうが、親子の緣を切らうより、此首切つて下さんせ。夫故に死ぬる命、塵とも思はぬ、是程に思ふのに、景清樣の返答は、どうで有らう講釋殿」と、理に責められて十藏も、感ずる心に面を和らめ、「オオ出來したり女房共、其心底を聞いては、如何にも去れぬ、やつぱり元の女夫々々」「いや此な男は、ぐれり〳〵と心のそろはぬ景清、一旦舅がもらうた暇」「いや左樣言つても約束變改」

衣「オヽ、左樣でござんす、いつまでも緣は切らぬ」「いや此親が是非去らす」十「いや去らぬ」と三方論議、更に果しもなき所へ、會所を戻る主の戸平次、何時にかはりてぐんにやり首、途方に暮れし其風情、思案中戸にさしかゝれば、奥には三人せり合ふ聲、大宮司の景清のと、噂ちらりと聞耳立て、鼻息もせず伺ひ居る。内には斯くとも白髮の父、「何時までかくと爭うても詮なき事」と、詞を和げ、「十藏殿、阿古耶殿、我一通りを聞いてたべ、衣笠もよつく聞け。惣じて世界の女の子は、生れし親の家を離れ、夫に任す身の上なれば、子とても親の儘ならず、去によつて、親の科を娘にかくる法もなく、娘の科は勿論親の身にかゝらぬこと、天下一統の式目、景清を聟に持つたるとて、鎌倉殿の御咎有るべき筈はなけれども、此處に一つの誤りは、景清西國に赴く時節、戰場まで女を具せんも如何なり、預け置かんと賴みし故、今の難儀は氣も付かず、うか〳〵と預り置き、疑ひかゝる聟の緣、エヽ、一生の不調法、悔しい事をしたなあと、破つたる茶碗をついで見るにひとしき愚痴に立歸り、そゞろに子供の可愛さ不便さ。鎌倉殿の祟にあはゞ、如何なる憂き目に遭はんも知れず、アヽ、恐ろしやと思ふより、所詮我身の義心を捨て、衣笠に緣を切らさば、三方四方の爲よしと、思ひ詰めたる老の思案、臆病者の義理知らずと、笑はば笑へ共の爲、弓矢取る身にもあらず、長袖の身ぢやものと、得手勝手に分別

極め、生れ付きの頑意地ごかしに、是程までは遣り付けしに、娘が誠の心底に、感じ入つたる今日の景清殿、尤とは思ひながら、父が心も思ひ分けて、衣笠を去つてくだされい、恥を捨てお頼み申す」と、神に仕ゆる身ながらも、子故の道に踏迷ひ、胸の岩戸を引立てて、常闇の夜と知られける。衣笠は猶悲しく、「お年は扨も寄らせまいもの、それ程までにお心の、愚にも成るものか、親を人に笑はせて、子の身として嬉しからうか、思ひやつても下さんせ」「ォヽそれ程のこと辨へぬ某ではなけれどな、儕等が爲め世話煎るに、親にも違ふ胴張者」と、氣を揉み焦つ老泣に、たぐり上げたる持病の痰火、せき上げ〳〵せき入れば、「それ〳〵それがお世話かうと、倍しの頑意地や」と、背撫でおろし、「まァあれへ」と、元の一間へ勞はれば、十藏兄弟明いた口、塞ぎかねてぞ呆れ居る。今まで萎れし戸平次が、樣子を聞いて氣はいそ〳〵、「是は阿古耶の兄公、好い所へ好うわせた、二人ながら近う寄りや、一大事の談合が有る。先高が斯うぢやは、代官所の侍が會所へおれを呼付け、抱への阿古耶を此方へ渡せ、景清が所在を責めさいなんで言はすと云うた、談合とは此所の事、阿古耶能う聞いてたも、兄公の前で言憎けれど、疾うから和女に惚れて居るは、其人をいとしなけに責めうと云ふ、所へおつと云うて如何遣られう。其上にたつた一人の奉公人、花代なしに屋敷へやつては、口を天井へ釣つて置屋の商賣がならねば、呼屋の衆も迷惑、そこで味をやつたの、いえ〳〵此方の阿古耶にそんな客はござりませぬ、其上疾うから私が女房に引上げ、今で勤はさせませぬと、ぬつぺりとやつたが代官も賢い、兎角阿古耶を連れ參れ、直に尋ぬると手詰の詮議、此所が談合の要所、能う聞きや、是を幸におつと云うて、女房に成つてたもれば、景清が詮議、マァそもじにはかゝらぬの、兄公左樣ぢやないか。それでも代官が呑込まぬか、其所に一つの上分別、此處が又談合の要所、あれ今奥へ往た大宮司が娘、阿古耶が代りに此奴を捕へて御穿鑿なされませと訴人したら、褒美は少な〳〵錢十貫、それを資本に女夫づれで、きんごして遊んだら、面白かろでは有るまいか。十藏殿は小姑、妹聟の戸平次が、講釋さして置くまいぞや。サァ此談合否か應か、應なら極樂否なら地獄、如何ぢや〳〵」と氣を焦つ。二人は目まぜに首肯き合ひ、「是は段々尤の御分別、何の是が談合どころ、あつと申せ妹、花扇屋のお内儀樣とは、氏なうて玉の輿」と、きほうて見すれば、「ムヽウ兄公好い合點、いや見かけに似合はぬ埒明ぢやはいの。サヤ阿古耶如何しやる」「さればいな、私ぢやとて、木でも石でも作らぬ身、まんざら憎うは思はねど、兄樣や母樣の、心を今まで氣兼の遠慮」「おつと讀めた、皆まで云ふまい、そんなら女夫に成る氣ぢやの」「はて扨、兄の十藏が水入らずの媒介」「ほんに左樣ぢや、祝うて三人打つて

置け、しやん〳〵。シイ、奥のお客を迯がさぬやうに、御馳走申しや女房共、たつた今會所へ往て、褒美の十貫擔げて戻ろ」と、儕獨か胸算用、はき違ひたる足もとは、草履ト駄やら雪駄やら、心も付かず走り行く。十藏跡を見送つて、「是々妹一寸延びれば尋延びると、僞りは僞つたが、宿の仕迴は思案が有るか」「ア、兄樣には似合はぬ案じ、此間に衣笠樣、何處へなりとも落しまし、代官所へは潔よう、此阿古耶が捕らはれて、責殺されるがせめてもの、景清樣へ心ざし、わしもお前の妹ぢやもの」「オ、でかしたり神妙なり、其心底を聞けば安堵、某は今宵の内、景清に追著き件を語り、一時も早く都を遁さん。落著く所は知邊有つて」と、語ればちやくと兩の耳に、手をおしあてて、「ア、是々、景清樣の落著く所、わしに聞かせて下さんすな。聞くまいと云ふ其心は、如何なる火水の責に遭ふとも、性根亂れぬ其内は、隱し拔かうと思へども、心の底に覺えあらば、身のくるしさに氣も弱り、口走るまいものでもなし、わしやそれが悲しさに、乞求めても聞きたい知りたり夫の行衛うはの空、世界の女房の風上にも、置かれぬ私は因果人、お腹に宿した此嬰兒も、能々の業人、哀れと思うて下さんせ」と、忍び涙ぞはてしなき。十藏も心根を、不便としをるゝ氣を取直し、「ヤア最前の詞に似ぬ、未練の歎に隙どりて、衣笠樣にあやまちあらば、心の操皆むだごと。ぬかるな妹、十藏はや往くぞ」と、跡にも心殘れども、先も恩有る義理の道、立別れてぞ出でて行く。阿古耶は思ひの胸押下げ、「アア我ながら愚痴涙、なんとして泣いたぞ」と、心に心恥ぢしめて、奥の一間を窺へば、はや表には挑灯の、光も權威のはい〳〵はい、戸平次は先に立ち、鬼の首を取つたる心地、「女房共〳〵、阿古耶は何處にぞ、代官樣がお出ぢや、奥のお客はなんとした」と、問へど返事もうろつく内、庭に入込み代官が、さも横柄にいかつ聲、「熱田の神職前大宮司通夏は何處に在る、かく云ふは岩永左衛門が家隷荒木源五と云ふ者、御邊の娘衣笠、惡七兵衛景清に緣を組めば、お尋ね者の一類、尋ね問ふ仔細有り、急ぎ此方へ渡さるべし。違背あらば理不盡に踏込み、縄打つて連れ歸る、返答如何に」と呼はつたり。前大宮司通夏少しも驚く氣色なく、刀提げ娘を圍ひ、しづしづと立出で、「岩永左衛門殿の下知として、わが娘衣笠を召しつれて歸らんとは、景清が所在尋ねん爲な、それならば無用になされ。西國落に別れてより、景清が行衛ずんど存ぜぬ、隙費えを言はんより、立歸つて此通り、岩永殿に聞かされい。はれ御大儀で有つたな」と、嘲詞に荒木もむつとし、「イヤ知らぬとて知らせずに置かうか、それ戸平次引立てい」と、云ふに阿古耶が、「いや〳〵〳〵、彼方が御存じないと云ふ證據には妾が立つ、かんまへて聊爾せまいぞ。親方の戸平次殿」と、云ふに惋り氣疎貌、「こりや如何ぢや女房ども、親方とは何の事、

狼狽へたか女房共〳〵」「エイ嫌らしい、女房とは誰が事、五條坂の阿古耶は景清が妾と、世間に隠れない中を、人聞きの悪い、女房呼はり置いてもらほ」「イヤ其筈ぢやあるまいがな、花扇屋のお内儀様、打つて置くしやん〳〵を忘れたか。媒人の兄は何所へ往た、兄公々々〳〵」とうろたへ眼、源五にばつたり行當るを、はつたと睨め付け、「阿古耶を女房とは大きな偽、傍とても遁さぬ奴、此上は二人の女、連れ歸つて拷問する。サア〳〵大宮司娘を渡され、忝くも鎌倉殿の御代官、岩永左衛門が下知を受け向うたる某、身不肖の侍と侮つて、頤くひ違へ、後悔ばしせらるゝな」と、權威に任す理屈詰、返答もせず默然と、しばし思案にくれ居たる。「ヤア人にばかり物いはせ、うんともすんとも答へぬは、諚意を嘲る科人、其方とても遁しはせじ」と、詞あらゝに責めかゝる。老人ほつと息を吐き、膝を打つて、「ホヽウ左樣ぢや、愚痴に歸つた老耄、今眼が覺めた」と持つたる刀、娘の前に投出し、「傍も前大宮司通夏が娘ぞよ、父が今まで立てぬいた固意地、むだごとにせぬ樣に、合點したか狼狽へな」と、以前の未練に引きかへて、詞も涼しき目の色に、衣笠刀押戴き、「親の讓りの固意地、受繼ぐは娘の役、其固意地を見て置け」と、すらりと拔いて戸平次が、肩先ずつぱと切下ぐれば、うんと反氣に伏しながら、擦まぬ剛氣に武者振り付く。源五もさすが武士の役、刀に手をかけ支へん風情、父は

隙かさず押隔たり、「ヤア騒がれなお侍、其元の相手には此皺腕」と鍔元寛げ、拔かば切らんず勢に、氣を呑まれてぞ控へ居る。戸平次は深手ながら、しがみ付かんと身を悶く。起しも立てず乘つかゝり、ぐつと刺いたる留めの刀、女所爲には甲斐々々し。大宮司聲を掛け、「父が讓りの固意地、是までは見屆けたり、して其跡はなんと〳〵」「アイ此跡は斯樣に」と、持つたる刀の鋩を、咽にがばと突立つる。「オヽ、左なくては叶はぬ筈、死損ふな立派にせよ」と、瞬もせず目もり居る。衣笠顏を振上げて、「ア、有りがたや父上の、未練のお心飜り、健氣のお顏見て死ぬれば、親子の緣も切らぬと云ふ、大宮司か娘こそ、景清が妻なりと、末世末代いはるは、我身の上の諸願成就、神の教の高天が原、佛の道の極樂淨土に、今ぞ赴く嬉しさ」と、苦しみ包む笑ひ顏。阿古耶は詮方うろ〳〵涙、手負は次第に息弱り、今こそ娑婆の黃昏時、終には萎む夕顏や、五條あたりの白露と、消え行く身こそはかなけれ。父は歎きの色目もなく、「口論によつて戸平次を討つて捨てたる娘の衣笠、自害したれば算用濟んだり。此上にも言分あらば」と、苦り切つたる面色に、「ハテ相手同士死ぬる上は、此方に構はぬこと」、と歎に沈む阿古耶を捕へ、物をも言はせず引立て行く。大宮司は本意なげに見送つて、死骸に寄り、「ヤハ娘出かしてくれた、去りとては能う死んだ。エヽうぬ〳〵戸平次め、能う訴人しをつたな、好い氣味な目に逢ひをつ

た、去とては能うは切つたぞ殺したぞ。此親が老に耄れ子に迷ひ、埒もない分別違ひ、恥の有りたけ吐出したに、おことが死んでくれたので魂がさつぱり、景清殿のお聞きやつたら、嘸嬉しかろ褒美であろ。今の立派な最彼の體を、見せぬが殘り多いはい。健氣な娘を持つたと思へば、心がいそ〳〵するはやい」と、死骸をしばし押動かし、「ほんに和女は死んだもの、生きて居る者のやうに、くよ〳〵と囈語、また愚痴未練が直らぬと、叱つてくれな笑つてくれな。最う如何もこたへられぬ、一生の未練納を、心のたけを泣かせてくれ」と、湛へ〳〵し涙の溜り、わつと叫びて撞と坐し、前後不覺に見えけるが、「ハッァ左樣ぢや、誠に左樣ぢや、娘が最後の一言に、我身の納を知らせしを、浮世の塵に交はりて、神に仕ゆる齡もなし。神道より佛道に、赴く手本は聖德太子、今より法の修行に出で、四天王寺に參詣し。諸人に勸化をすむるこそ、娘が菩提我身の爲、有り難し〳〵」と、差添拔いて髻打切り、末打立てて立出づる。箇程涼しき佛の道、何とて熱田の神垣と、隔てはあらじ此世の迷ひ、祓ひ給へ淨め給ふも、利益は同じ南無阿彌陀ぶの、六字は六根清淨と、悟り行く身ぞ　三重賴もしき。

第三

兜の脛短しといへども、是を續がば憂ひなん、鶴の脛長しといへども、是を斷たば悲みなん、民を制すること此理にひとし。されば治る九重に、猶も非常をいましめの、水上清き堀河御所、當時鎌倉の嚴命にしたがひ、秩父庄司次郎重忠、禁裏守護の代官として、兼ねては民の公事裁判、私のはからひなく、道に曇らぬ十寸鏡、智仁の勇士とかどやけり。同席に相並ぶ岩永左衛門致連、南都東大寺の建立より、直樣都に押留り、重忠の助役と號し、惡七兵衛景清が、所在をさがす邪智佞奸、表は忠義に見せかけて、己が遺恨をさしはさむ、心の底の二股竹、虎の威を藉る狐とは、きよろつく面にあらはれたり。當日の取次役、兩人の御前に出で、「清水の轟御坊、御出なり」と披露につれ、大廣間より入り給へば、「はや〳〵是へ」と請ぜらる。法印重忠に向ひ給ひ、「平家の侍惡七兵衛景清轟坊に入り來らば、搦捕つて出せよと、先達ての御使者、尤平家盛の時節は、彼の景清觀音を信じ、七十五里の境を隔てし、尾張の國より日參せしは、世の人の知る所、然るに壽永の戰に西國へ赴き、それよりは音信不通、よしんば忍びて觀音へ、參詣を致すにもせよ、出家法師の手に及ぶ彼にもあらず。搦め捕らるゝ仔細あらば、それこそは武家の役、出家には不相應、此儀を辭退申さん爲の參上」と、憚る色なく宣ふにぞ、重忠不審の氣色ばみ、岩永左衛門詞をすゝめ、「いや是は秩父殿の御存じなきこと、某が存じ

付き、もとより御坊は景清が檀那寺、心を許し參詣せまい物でなし、所を瞞すに手なしとやら、搦め捕つて出されなば、褒美は一廉、お寺の爲と存ずるから」と、言はせも果てず、「こは怪しからぬ致連の御仰、我眞言の密法は、五輪種子、周遍法界、鬼畜人天、皆是大日と說かれて、廣大無邊の大慈大悲、景清來つて我を賴まば、一命にかけて圍ひは申すとも、搦め取つて出すなどとは、耳にふるゝも穢らはし。假しそれが曲事とて、沒收せられば傘一本、沙門の身に厭はぬこと」と、詞を放つて申さるれば、岩永も云ひがかり、「ヤアねぢくさい老僧、大日やら大熱やら、それは存ぜず、景清が肩持達、後日に屹度沙汰に及ばん。既に以て近い手本は五條坂の遊君阿古耶と云ふ女を、六波羅の松蔭に引出し、景清が所在を訊ぬる毎日の拷問、昨日は拙者が承はり、今日は是なる重忠の當番、家來共に吩咐けて、憂き目を見すると云ふこと京中に隱れなく、則ち其松を阿古耶の松と、異名まで付くる程の大詮議、知られぬと云ふこと有るまい。事によらば法師の身とて、拷問せまいものでなし、蠹坊を引きかへ驚坊にしてくれん。ヤアよしないお坊にかゝつて、御用どもを怠る」と、指したる事もなけれども、仕廻付かねば座を立つて、次の一間に入りにける。重忠法印を近く招き、景清が詮議の事、重忠が胸中口外に出さぬ事ながら、貴僧は格別、明かし申さん。平家の方にも誰彼と名有る弓取は多き中に、彼景清は一人當千、可惜しき武士、假へ搦め捕ればとて、無下に一命を斷つべきや。何とぞ彼が心を和らめ、源氏の幕下に付け置かば、勇者の胤を日本に、永く殘さん國の寶、臥龍先生が孟獲を七度まで助けかへし、終には蜀の味方となしつる、例をまねぶ寸志の忠義、景清稀に入り來らば、此道理を演說有つて、源氏に仕へ存命せよと、諫めの敎はお僧の役、必ず賴み存ずる」と、敬ひ深く宣ふにぞ、蠹御坊はつと感じ、「今に初めぬ秩父殿の仁愛、一見阿字の佛敎も外ならず覺えさふらふ」と、歡喜の領掌なし給ひ、「はや御暇」ともぎどうに、出家氣質の濁なき、淸水さして歸らるゝ。秩父の郎等榛澤六郎成淸、遊君阿古耶を拷問の、時刻もかぎる未の刻、六波羅より立歸り、御門におろす囚人駕籠、簾を上げて引出す。姿は伊達の襠や、縛の繩引きかへて、縫の模樣の糸結、小褄取る手も儘なれど、胸はほどけぬ思ひの色、形は派手に氣は萎れ、筒に活けたる牡丹花の、水上げかぬる風情なり。榛澤六郎御前に出で、「仰せに任せ繩をゆるし、樣々宥め不便を加へ、尋ね問ひ候へども、何分景清が行衞存ぜぬとばかり、外に出す口も是なき故、召しつれて候」と、披露半ばに岩永左衞門、つか〳〵と立出で、「ヤア不念なり榛澤、科人に繩も懸けず、其上見れば拷問に勞れたる氣色も見えぬが、エ、聞えた、扨は御邊が今日の拷問、生緩くやられしな。よい〳〵、明日は拙者が受取、さう〳〵家來任せにも成るまじ、自身

の手並見せつけ、景清が所在ほざかして見せう。侍共やい、彼の女め、岩永が屋敷へ引け」と、例の粗忽を重忠押しとめ、「いや先待たれよ岩永、縄をゆるし拷問をゆるめしも、榛澤が私ならず、某が了簡、其上に今日の暮までは此方の計ひ、其元のお構ひない筈、入らぬ世話御無用御無用。こりややい阿古耶、今日もまだ白状せぬ由、はて扨しぶとい、なぜ言はぬ。去ながら、それもなア無理とは思はぬ、義理と情を表に立つるが遊君の慣ひ、いかに責めらるゝが辛いとて、馴染を重ねた夫の行衛、つい應とも明されまいサ。さなきだに流を立つる女は、誠なき者と一むきに心得し輩もあれば、それらが譏もうたてく思ひ、又は同じ憂き節を勤める友朋輩の顔汚し、などと思うての事ならんが、此處をとくと合點せよ。景清が行衛存ずべき者なればこそ、搦め取つて詮議もする。有りやうに白状すれば、忝くも鎌倉殿の御意を安んじ奉り、天晴の御奉公、萬人の譏を受けても、君一人の心に叶はど、其身の冥加悪しかるまじ。こゝを能く辨へて、サアさつぱりと景清が所在、此重忠に聞かせい」と、物和かに理をせめて、然もこたゆる詮議の詞、阿古耶は聞いて、「さつてもきびしい殿様、四相を悟る御方とは、常々噂に聞いたれど、何の仔細らしい、四相の五相の、小袖に留める伽羅ぢやまでと、仇口に云ひながせしが、今日の仰に我が折れた、勤の身の心を酌んで、忝いおつしやりやう、何んくの誓文で、景清殿の行衛知つてさへ居るなら、お心にほだされ、ついぽんと云うてのけうが、何を云うても知らぬが眞實、それとても疑ひはれずば、ハテ何時までも責められうはいな。責めらるゝが勤のかはり、お前方も精出して、お責めなさるが身のお勤、勤と云ふ字に二つはない、ア、浮世では有るぞいな」と、云ふに側から悚へぬ岩永、「ヤアべりくとはつしやいだ頤骨、是非白状をせぬに於ては、此間の拷問に品をかへて憂き目を見する。聞けばうぬは懐胎とな、よいよい、急度思ひ付いた、腹に子の有るかざみの格、鹽煎責にしてくれう」と、威しかくれば、「ハ、、、、、そんな事怖がつて、苦界が片時ならうかいな。同じ様に座に並んで、殿様顔してござれとも、行きかたは雪と墨、重忠様の計ひとて、榛澤様の今日の詮議、縄も懸けず責もなく、六波羅の松蔭にて、物ひそやかに義理ずくめ、さまくと勞はりて、サア景清が行衛はと、問はれし時の其苦しさ、水責火責は堪へうが、情と義理とに拉がれては、此骨々も碎くる思ひ、それ程せつないことながら、知らぬ事は是非もなし。此上のお情には、いつそ殺して下さんせ」と、とんと投出す身の覺悟、持て餘してぞ見えにける。重忠榛澤を近く召され、「箇程心を盡せども、誠を明さぬ上からは、目通りで拷問せん、それくと」と仰せ有る。詞の尾に付く岩永左衛門、「やあくと者共、阿古耶めに水くらはす、用意々々」と呼はるにぞ、あつと答へ

て白洲の内、直す梯子を見るにさへ、心は上る枕の横槌、底のかだへの井戸屋形、深くも輾る絞車の、胸に響きて氣を冷やす、阿古耶が心の濁水、今しも呑むやと覺悟の體。重忠庭に下り立つて、「ア、仰々し靜まれ〳〵、阿古耶を拷問の責道具は、某かねて拵へ置きたり。誰か有る持參せよ」と、仰に隨ひ持出づるは、最も優しき玉琴に、三絃胡弓取添へて、音〴〵も嘸と白洲なる、阿古耶が前に並べ置く。岩永も恟とせしが、樣子如何と打まもれば、「是さ女、其琴彈け、重忠が是にて聞く」と、刀の杖に頤持たせ、「岩永殿もお聞きあれ」と、打解けて見えければ、「こりや何ぢや興がるは、責道具々々〳〵と、何ぞ嚴しい事かと思へば、エ、聞えた、拷問に托せ、自分の慰み氣晴しをやらるゝな。天下の政道を取捌く決斷所での琴三絃、神武以來無い圖なほたへ、實に誠世界の有樣、天に口なし人を以て言はしむとは今思ひ當つた。阿古耶めが懷胎、もしもや此子が女の子なら、琴でやぐわん〳〵、三絃でなんとやらと、京中が諷ひしは此前表、此上の破れ次手、ちよ〳〵げなんどもよござんしよかの、ハ、、、、」と嘲哢す。重忠耳にも入れ給はず、「ヤレ阿古耶、なぜ初めぬ、琴を彈かねば景清が所在を言ひ明かす所存か」と、詞もしげき重忠の、底の心は知らねども、是非なく對ふつま琴の、行衛を何といはこすに、絲も心も亂るゝばかり、聲も枯野の船ならで、かひなき調べかき鳴らし、「影と云ふも月の緣、清しと云ふも月の緣、かげきよき名のみにて、映せど袖に宿らず」重忠耳をそばだて給ひ、「今彈ぜしは蕗組の唱歌を我身の上に取り、景清か行衛知らぬとな。まア知らずんば知らぬにせよ、して景清と其方が、馴初めしは何時の頃、如何なる事の緣により、深い契りの中とは成りしぞ」「是は久思ひ寄らぬ變つたことのお尋ね、何ごとも昔となる恥しい物語、平家の御代と時めく春、馴れにし人は山鳥の、尾張の國より永々しき、野山を越えて清水へ、日毎日毎の徒詣で、下向にも參りにも、道はかはらぬ五條坂、互に面を見知り合ひ、何時近付に成るともなく、羽織の袖の綻び、ちよつと時雨の傘、お易い御用、雪の晨の煙草の火、寒いにせめてお茶一服、それが高じて酒一つ、此方に思へば彼方からも、功德は深い觀音經、普門品第二十五日の夜さ必と、戯れの詞を結ぶ名古屋帶、終なければ初もない、味な戀路と樂しみしに、壽永の秋の風立つて、須磨や明石の浦舟に、漕ぎ放れ行く緣の切れめ、思ひ出すも痞の毒、ア、疎まし」と語りける。「オ、さも有りなん情の道、聞屆けしが詮議は濟まぬ、この上は三絃彈けい」「エ、イ」「いやさ、此方の尋ぬる仔細を聞かぬ内は、何時までも」と、猶望まるゝ三絃の、どう成ることか知らねども、思ひ込んだる操の糸、今更何とたがやさん、心の天柱引きしめて、「翠帳紅閨に、枕並ぶる床の内、馴れし衾の夜すがらも、四門の

跡夢もなし。去にても我つまの、秋より先にかならずと、あだし詞の人心、其力の空よと眺むれど、それぞと問ひし人もなし」「オウもう好いは、三絃やめい、班女が閨のかこちぐさ、絶えし契りの一節、時に取つての一興ながら、分疏は暗い〳〵。西海の合戰に命を遁れ、都に折々紛れ入る景清、其方は度々逢はうがな」「平家御盛の時だにも、人に知られた景清が、五條坂の浮女に、心を寄すると言はれては、弓箭の恥と遠慮がち、殊更今は日陰の身、妾はもとより河竹の、有るが中にも無情い親方、目顔を忍ぶ格子の先、編笠越しに健に有つたか、アイお前も無事にと只つた一口、言ふが互の比翼連理、さらばと云ふ間もない程に、忙しない別路は、昔のきぬ〳〵引きかへて、もめん〳〵と零落れし、身の果哀れな物語、アヽおはもじ」と差俯伏く。「いかさま是は斯くもあらん、景清程の勇士なれども、實に色は思案の外、思案の外、如何思案仕直しても、此通りでは濟まされぬ。それ胡弓すれ〳〵」「あい」と答へて氣は張弓、歌は哀を催せる、時の調子も相の山、「吉野龍田の花紅葉、更科越路の月雪も、夢と覺めては跡もなし。あだし野の露烏邊野の、烟はたゆる時しなき、是が浮世の誠なる」誠をあらはす一曲に、重忠ほとんど感に堪へ、「阿古耶が拷問只今限り、景清が行衛知らぬと云ふに、偽なきこと見屆けたり、此上には構ひなし」と、仰に阿古耶は忝け涙、盡きぬお禮を伏拜めば、「ヤア〳〵重忠、白いとも黑いとも片付かぬ詮議を、阿古耶めに偽なしとは、何を以て申さるゝ、此岩永は呑込まぬ、不埒々々〳〵」と云ひほぐす。「オヽ、其仔細いうて聞けん、鼓は五聲に通ぜずといへども、糸竹の調は五音四聲に能く通じ、直きを以て調子とす。曲り偽る心を以て此曲をなせる時は、其音色亂れ狂ふ。就中此琴、音有る物の司として、人の心を正しうし、邪を禁しむると、白虎通にも賞じ置きたり。こゝをもて重忠が、女の心を引見る拷問、十三の絃筋に、縛り絡めて琴柱にくどめ、科の品々一より十迄、とゐぎんずるを曲事とは申されまじ。琴の形を竪に見れば、漲り落つる瀧の水、其水をくれる心の水責、三絃の二上りに、氣を釣上げる天秤責、胡弓の弓の矢殼責と、品を換へ責むれども、いつかな亂るゝ音〆もなく、調子も時も相の手の、祕曲をつくす一節に、彼が誠はあらはれて、知らぬことは知らぬに立つ、調べを糺して聞取つたる詮議の落著、此上にも不審有るや」と、道理に叶ひし詞のしらべ、ぴんともしやんとも岩永は、撥鬢頭かくばかり、眞面目に成るぞ心地よき。重忠重ねて、「阿古耶が詮議落著といへども、猶此上に某が尋ね問ふ仔細有り、隨分勞り屋敷へ引け」と、仰を蒙る榛澤六郎、「いざ阿古耶立ちませい」と、伴ふ情數々の、惠を思ふ女心、「有りがたう存じます」と、詞につきぬ悅び涙。岩永は拍子もなく、調子に乘らぬ勃と頬、秩父は宮商角徵羽の、五つに叶ふ琴

三絃、かしこき例引いたりちよつかい、ばち利生有る糸さばき、直なる道の三重言の葉や。侘びぬれば、親慕ふ子の片蹇、身を立てかぬる音をぞ泣く、憂き身を此處に岡崎の片邊、伊庭十藏一幸が、老母を養育む藁屋の軒、母は何をか思ひ寐の、彼唐土の顔回に、樂みは似ぬ臂枕、世に附合ぬ氣散じは、引立つる戸の隙間より、風のみ通ふばかりにて、稀に言問ふ人もなし。憂節を身に添持ちし釣竿の、いとま有りげに見ゆれども、母の一人居氣遣と、心は急ぐ伊庭十藏、腰には籤の重たきを、足元かろく立歸り、「ハァ是は母人、何時にない晝寐なされしな、定めて妹が身の上を案じ寢の、夢程もお心休めは珍重々々、此間に釣た此鯉を調味して、御膳上げん」と取出す、片足たらぬ俎板も、元浪人の錆庖丁、棚からぐわつたり落ちたは何んぞ、其響きに目覺めて母は起上り、「ヤァ十藏戻つてか、何として遲かりしぞ。阿古耶が彼の身に成りしより、講釋も打ちやめ、一寸内を出ぬ人の、適〻の留守なれど、心細う待ちかねる、今日は先何處へぞ」「さればふと存じ付き釣に參り、御覽なされ、此鯉を二こんまで、終に覺えぬ獵の利きやう、是も母人御息災延命の徵と思へば、大分嬉しう存じます」と、聞いて不興し、「何、釣に往て其鯉取つたか、それが母が息災延命の徵だ。是は又十藏とも覺えぬ、常さへ母が嫌ひの殺生、殊に阿古耶が今の苦しみ、人並に世を經る我ならば、其處の祈彼處の祈禱、生有る物の命を助け、慈悲善根の果でなりとも、助けたい此時節、面白さうに釣どころぢやおぢやるまい。かはいや其鯉が和御前に釣られ、俎板に乘る苦しみも、阿古耶が六波羅で責めらるゝ苦しみも、人と魚との名は違へど、苦しむ所に二つない。鯉のお蔭で息災延命、おりや否でおぢやる。年頃日頃の孝行も、愛想もこそも盡き果てし」と、身を捻ぢ背けて恨み顔、「左樣に思召さば、御叱御尤千萬、全く慰の釣殺生に候はず。阿古耶が事に頓著有り、御忘れなされしか、今月今日は御誕生日、浪人の後も形のごとく貧しき中に、頭尾の有る鹽物なりとも調へ、目出たうお盃頂戴致さぬ年もなし。殊に今年ははや七十二、祝ひは申し納め、來年の今日は不定の世の中、相かはらず祝ひ奉らんと、此間心懸くれども、遠慮で講釋は仕らず、雜魚一疋調へん價に盡き果て、殺生とは存じながら、小鮒でも釣つて御肴にと存じたれば、御覽の如く三年物の鯉二こん、鯉の鱗は三十六枚有ると申す、二こん合せて七十二枚の鱗、母の御年も七十二、都合目出度う、是で母の誕生日を祝せよと、八大龍王の賜と、嬉しく持つて歸りし。十藏も木石てずら、詞には出さねども、たつた一人の妹が苦しみ、母の歎き悲みが悲しかるまいか、思ひやつべたな母人」と、歎かば母の歎きぞと、泣かでこまぐ〻語りける。「なう恥しやサア十藏、早う其鯉料理して、母が誕生祝うてたべ。悔しや叱つた侘言に、悲しい中で莞爾と、笑うて膳がいたど

きたい。雪の中の笋氷の魚、唐土人の孝行にも、劣りはせぬぞやれ十藏、とは云ふ物のいぢらしけに、鱗の數と我年と同い年、如何にしても殺されまい。御身が出世も此鯉の、龍門の瀧を上るごとく、あやかつて命助けてやりや。コレ此盆を斯うすゆれば、幸ひ蒔繪の鶴の料理、心で祝ふ千代八千代、親子目出度う盃せん、ァ、酒がな」と有りければ、「ハァ詫言とは勿體ない、お心とくれば此上の大慶なし。酒も則ち用意せり」と、簞の内より取出す、德利に餘る悅び貌、「とにもかくにも御心に、背かぬを今日の御馳走、ヤ亭主方ま一人有る」と、下屋に駈け入り、羽織片手にあたふた計の食籠も、土盞に事のかけ盃、わびしき中に假初も、禮儀亂さぬ親と子の、昔の育ち奥床し。「ハァ是は懷しや、景淸の御身にもらはせし羽織ならずや」「されば其時申せしは、是を打懸け、景淸が孝行も一所と賴み置きたれば、此座に置けば是は景淸、今日の壽、亭主二人と思召し、先盃お取上げ、いざお酌仕らん。日頃は聞こし召されねど、今日は半盞、ハァ忝い忝い、酒は愁の箒と申せば、暫しもお氣晴し、其お盃サァ景淸戴いて、直に返進申さし召せ」と、言ふも酌ぐも形ばかり、「さらば盃お取次、肴はなくとも聟殿の盃、まあ錢の廻り程、是は〳〵、つぐまいと存じながら又半盞、したり、靜にはあがらいで、誠に下戸の無意氣呑、すぐに私御頂戴、手酌は恥の物、是御覽ぜ」と、さらりと酌んでついと乾し、「憚ながら又返進、御酒は御氣根、毎年謠ふお肴、今年缺かんも心がかり、世上の聞えも候へば、隨分と聲低に、謠母は千代ませ〳〵、と繰言を、祝ひ謠の、謠面白の時代や」母「嘉例の肴めでたい〳〵、取るぢやに母も一つ受け、呑むことはならず、是れつけざし」「ハァ是は有りがたい」と、感き〳〵ずつとほし、「然らば御意に任せ盃は是まで、餘り御機嫌好いに付き、近比不孝な願ひなれども、申上げて見ませうが、御聞分け下され」と、飛退去つて手をつかへ、「阿古耶が今度の苦しみは、景淸に緣を結んだる故、というて重々の大恩有る景淸が行方、知つても云ふまじ、況て存ぜねは、責殺さるゝは案の内。私つく〴〵存ずるに、阿古耶が腹はナ、是々と承る、いかな〳〵殺させては、母も我も景淸に、何と面を合すべき。然れども力わざには動しも助けもならぬ、所を何の苦もなく助ける、極上々の分別を極めしは、某阿古耶が責められし彼阿古耶の松と京童の異名を付けし六波羅の松の下にて、腹十文字にかつさばき、上總の七兵衞景淸運命拙く、とても賴朝を討つこと叶はぬ故、腹切つて相果つる者也如件などと、似つこらしく書置を殘し相果てば、ヤレ景淸切腹する上は、阿古耶に用なしと命助くるのみならず、京都鎌倉心をゆるせば、油斷を窺ひ景淸殿、易々と本懷を達せられんは、掌を見るが如し。一日切腹を急げば一日妹が苦患を助ける、疾つく申上げんと存ぜしかども、親子一世の此世の別れ、せめて快う御

誕生日を祝ひ納めて後の事と、今日まで色にも出さず、思ひ初めし其日より、一日を千日萬日と、のッつ反ッつ待ちかねし、今日只今より、誰か我に代つて勞はり養育み奉らん。尤妹は有りながら女の事、片々の手の落ちた樣に思召し、歎きが積つて御身のくづをれ、それが高じて又妹が悲しい目を見ようかと、案じ繼くれば身も世もあられず、悲しけれども、初から無い十藏ぢやと思召し諦め、不孝の罪をゆるされ、命のお暇下されば、有りがたからん」と跡云ひさし、胸までぐッぐと突懸くる、涙知らせじ泣き顏見せじと差俯伏き、疊に喰付き願ひける。母は萎るゝ氣色もなく、「ヤレ其詞遲かつた、十藏、今日は云ふか、晩には云ふかと、毎日々々待ちかねて思ふには、心が付かぬか、いや抜かる者でもないと、心の内でとつおいつ、親子の中も侍に、死ねと教ゆるは恥も有り、遠慮も有る。何時云うてくれることぞやと、今まで和御前が立身出世を待つたやうに待ちかねし、母は誰が無うても、飢ゑもせず凍えもせぬ。況て妹が居るからは、跡案じること微塵もない。未練な心を殘さずとも、潔う腹切つて、景清の恩も報じ、妹が命も助けてくれ、というとて妹が助けたさに、死ぬと云ふでは更々なし。端折かどみの眞實の我子兄弟、月日と力に暮せしもの、夜ばかりがよからうか、晝ばかりでよからうか、夜晝があればこそ立つ世の中に老の身の、可愛さに隔てはなけれども、妹が腹には男孫か女孫か、御身が爲には甥か姪か、胤は景清の預り物、それ殺すまいばつかりに、死ねと云ふ合點か。幸ひと其盃、又歸る旅なれば、母が呑んでさすべきが、再び戻らぬ死出の盃、一つ呑んで母にさせ、進ぜん」と立上り、胸と一所に踊る鯉を鉢に入れ、十藏が前に据ゑ、「今死ぬる身に入らぬ咄なれども、物は聞いて置かうこと、わごぜが祖父樣、妾を緣に付け給ふ時、切腹人の今際には、鯉の濱燒をする、飯櫃の蓋で給仕すること故實なり、聞いて置けと物語、人の上でも有ることか、我子の役に今立つた、此鯉の今日釣にかゝりしも、思へば天の與へぞや、祝うて居わつて早う往て、奇麗に死ね、さらば〳〵」と目を閉ぢて、重ねて詞もなかりけり。「ハア有りがたや、望み叶ひし我大慶、死後の見苦しからぬやう、とてもの事にさつぱりと、自剃に月額仕らん。剃刀砥石は何所に」と尋ぬれば、「オそれよからう、今生未來の晴れの月額、母が剃つておませうぞ、髮揉みやれ」「こは冥加なや、生々世々の御形見、辭退は仕らぬ」と、盥取る間も有りやなし、走の水にさしかゝれば、母は末世の手本となれ、武士の龜鑑と鏡立、砥石剃刀携へ出で、磨ぐも磋くも弓取を、子に持つ親は皆これと、思ひ流しの合水、今日別れては逢ふことの、鐵よりかたき合砥や、力なみだを押包む、袖よ袂よ手合せし、「サア十藏」と有りければ、思ひ亂るゝ黑髮を、揉んで鏡に打向ふ。母は後に立廻り、「なんと十藏、親が子供

の髪剃は、ほんの月額、逆剃にせうかいの」「アいや、若いが先立つも老いたるが殘るも、此方こそ逆さまと存ずれども、皆前生から定つた、直剃になされ下されかし」「オ、心得し」と老の手の、顫ふを見せじ顫はじと、二剃三剃顔と顔、互に移る鏡の内、「いやなう十藏、幾歳に成つても面影の、殘るは昔の幼顔、あてにならぬは額の黑子、見通しの法印が、六十八まで請合ひし其命、まだ半分も立たず、こんな事が有らうとは、神佛のなされた八卦にも、間に虚が有るかいの。ハヽヽヽ、をかしいことでは有るはいの」「いや私は八卦の合はぬを、いかう嬉しう存じます。先年國元で御大病お煩ひなされた時、百人の醫者は百人、陰陽師山伏、名僧智識の占にも、御本復と申す者は一人も無かりしが、御快氣に間もなく七十二まで御息災、此樣な目出度い事はござりませぬ」「オ、言やればそれもさう、其時參つたら、今日廣い國へ主づいて行きやる嬉しい月額は剃るまい物、長生してこんな目にあふめでたいぞや。ヤ何か云ふ間に時うつる、月額剃つて仕舞はう。ホヽ、こりや何時の間に揉直しやつた」「いや揉直しは致しませぬ」「でもひつたりと濡れて有る」「それはお前の」「あの虚はいの、おれが何んの、微塵も泣きやせぬ〳〵」と、言ふ聲曇る鏡の内、互に顔を見合せて、笑ひを作る氣は立つる、老の手業のかよわきも、剃刀早に剃りなせり。「是からは聟の景清殿、大國の所知入れ、まさかの用と嗜みし、晴小袖召させん」と取り出す、心の闇の眞黑々、縞隱れ行く伊達羽織、行長合ひてのつしりと、大小さすが浪人の、昔輝く金作、十藏忽景清と、見かはす計り見えにける。物數言はど老人の、もしや心も亂れんと、門に出で、「是まで養育の御恩、海に比ぶれば蒼海淺く、山に譬ふれば須彌山低しと申せども、命は又義によつて輕しといへり。妹がことは申すに及ばず、申上げたき數々は來世の事、日の内は清水に暮し、切腹は暮六つの鐘を限つて、逆さまなことながら、御回向賴み奉る」と、云捨てつゝと走り行く。母はつゞいて走り出で、「ヤレしばし待て物言はう、おういく」呼べど答へず俤も、涙と年の疎き目に、其行方は見えざりけり。あつと大地に伏轉び、「鬼にもせよ蛇にもせよ、死にに行く子を往て死ねと、歎かぬ親の有るべきか。女なれども侍の、親に生れた身の因果、泣きたいを得泣かず、理窟言うたり笑うたを、誠の心と思ひしか、狂氣半分半分は、死んで居たはやい。扮裝つた姿いつ忘れう、千騎二千騎の大將と仰いでも、不足ない子を可愛やな、一生貧苦に埋もらせ、鎧甲著せなんだが悲しい。いつそ不孝に有つたらば、是程に思ふまい、孝行にしてくれたが、今では結句恨めしい」と、涙の限り聲限り、泣いてはくどき立つては轉び、やる方なみだに伏沈む。かゝる所へ榛澤六郎成淸、阿古耶を駕籠に勞はり來り、「ヤア〳〵老母、阿古耶

の身の上詮議落著致すによつて送り歸さるゝ、併し胎内に子を宿せば、平産までは他國叶はず。男子出生ならば決斷所へ訴ふべし、女子においては構なしとの諚意なるぞ」と、阿古耶を引いて渡さるれば、「なう懐しや母様」と、縋り付いたる嬉し泣き、母は仰天氣を狼狽へ、「ヤア健で戻つたか、嬉しやの悲しやの、こんなこと知つたら遣るまい物、六波羅は何方ぞ、まだ十藏が日は暮れまいか。よう戻つてくれたな、入相が死んだら何とせう、兄が鐘は鳴るまいか」と、何を云ふやら氣もそゞろに、餘所には鳴らぬ暮六つを、胸にごん〳〵つくばかり。「母様それは何おつしやる、いかいお世話、六郎様へお禮〳〵」と氣を付くれば、「ほんに〳〵」と手を合せ、伏拜むより外ぞなき。「オ、久々にての對面、うろたゆる程嬉しい筈、阿古耶を渡せば他に用なし」と六郎は、下部を引具し立歸る。「母様悅びは道理ながら、其様に何故うろ〳〵なされます」「うろ〳〵せいでは、兄は腹切りに往つたはやい」「エイそりやまア何所へ、何として」と驚けば、「和女の命助けう方便、景清に成りかはつて、六波羅の松の下、日の中は清水で暮し、入相の鐘と一時に腹切る筈。ヤ斯う言うては居られぬ」と、駈け出しては撞と輾け、嘆きに弱る足弱車、阿古耶悲しさ遣る方なく、「戻ると其儘何故云うて下さんせぬ、女の足でもつい一走、わしが往て暮れぬ内、兄様つれまして立ちかへる」と、はや駈出すおのが名の、阿古耶の松へと急ぎ行く。爰に過ぎつる元暦元年、源平の戰ひ壇浦にて、上總の七兵衛景清に出會ひ、不覺をとりし源氏の侍、箕尾谷の四郎國時、其身の恥辱を顧みて、陣所に歸らず、直に逐電してけるが、景清世に存らへ、都にさまよふと聞きしより、鬱憤を遂げ、弓箭の恥を雪がんと、所在を探す京巡り、今日しも此處を尋ね來り、扇の端に書付けたる、心覺え開き見て、「ムウ岡崎の村はづれ、北を受けたる一軒屋、西に藪垣、入口に井の字の印、あるぞ〳〵」と打首肯き、内の樣子を窺へば、主の老女が年格好、是こそと突と入り、上り口に踞げ、「ヤア老女、阿古耶が母は儕よな、聟の景清、八島の浦にて箕尾谷と軍物語聞き及ばん。我こそ其箕尾谷四郎國時、景清が所在を探す、又鎌倉よりも詮議嚴しく、秩父岩永が承り、阿古耶に所在を責問はる所、白狀せしともせぬとも取々の噂、それはともあれ、儕が知らぬことよも有るまじ、眞直に吐かせ、知らぬなどと僞らば、皺首捻ぢて言はせん」と、威しかゝれば恟として、イヤ知らぬとも存じたとも、兎角の返答呆れ果て、顏を眺むるばかりなり。彼奴知つて啞けるか、荒氣では行くまじと分別し、面色を和らげ、「老女こゝを合點せよ、箕尾谷慘い心持ちたれば、無體に連れ歸り、人質に取り景清が心を澁らせ、聞出す仕樣も有る。又すつぱりと切殺し、景清が外姑の敵と名乘つて出る仕樣もあれど、咎ない人を殺し、卑怯を働く我ならず。手近う言へば

阿古耶殿と縁が切れ、退けば他人の景清、身はくづれうと隠し遂げうと、思ふは五十年先の氣質、當世は川流、さらり〳〵、合點かお袋」と、氣を寛させたらしける。「ムウ、合せ物は離れ物、言はしやれば其處も有る。當代は昔とちがひ、弟子の器量のあるなしも構はず、弓矢打物の大事さへ、金次第で傳授するげな、氣のさばけた世ぢやござらぬか。水心あれば魚心有る、問様に心あれば、教へ様にも心が有りさうな物の様に思はるゝぢやござらぬか」と、詞の謎をとく呑込み、路銀の財布取出す。ぢつと尻目に懸けながら、猶見ぬ顔の空とぼけ、「いやなうお袋、知らぬ所へ初て參り、蹈荒し煙草を荒し、忝い」と一包、膝元にそつと置く。苦もなく取つて指先に捻つて見、「誠に是は茶の金さうな、戴く程の重みでもなし。コレ人の所在を訴人すれば、囑托の大法さへ判金七枚に極まつた世の中、茶の錢ばかり何故極らぬでござるぞいの」「おつと茶の金呑込んだ、判金七枚」と、財布の包取出し、前に竝ぶる折こそあれ、阿古耶十藏に尋ね逢ひ、互の悦びいそ〳〵と、立歸る庵の内、見なれぬ武士に見なれぬ小判、這は如何にと、迂濶に兄弟得這入らず、内の様子を窺ける。箕尾谷悦び、「サア望みのごとく此金を渡す上は、景清が在家を知らせ、我に討たせ、此箕尾谷が願かなへてくれ」「オ、神佛より貴い金を大ぶん取るからは、教へませいでなんとせう、上總の七兵衛景清が所在は爰に在り」と、十藏大音聲に呼はつて駈入り、「ヤア珍らしゝ箕尾谷、見忘れしか、壇の浦にて見參せし景清、汝弓箭の恥を思ひ、付狙ふとは疾く聞いたり。今廻り逢ふは優曇華、鬱憤を晴らせ、相手に成つて得さすべし、サア抜け、勝負」と詰めよつたり。敵に詞をかけられて、箕尾谷なじかは臆すべき、抜放さんとはしつれども、壇の浦の戰は、互の姿甲冑の、昔にかはる形姿、それかあらぬか訝しと、躊躇ふ氣色、十藏焦つて、「ヤレ臆れしか箕尾谷、又臆病が起りしな、性根を付けてくれんず」と、閃りと抜いて打ちかくる。母も阿古耶も心暮れ、わつと叫び泣くばかり。兩方互に祕術をつくし、打つぞと見えし十藏が、刀の金や冴えたりけん、鍔本よりほつきと折れて飛びちつたり。十藏柄をからりと捨て、「景清が運命是までなり、サア首打て」と指しのぶれば、「オオ神妙なり景清」と、振上ぐる刀の下、眼を閉ぢたる頬魂、つくぐと打まもり、「ムウ、主君の仇を報ぜんと、鎌倉殿を狙ふ景清、刀が折れたらば指添も有る、命の懸換も有る様に首さしのべしは、ムウ〳〵、いや〳〵〳〵、箕尾谷が一腰は、正眞の景清が首を打たでは叶はぬ刀、紛者には得汚すまい」と鞘に納め、「儕、景清まう取り置け」と、一分別有る其の有様、一器量有る男子なり。母は手を打ち、「オ、好い分別や眼力や、其男は十藏と云ふ我息子、誠の七兵衛景清が隠れ住む所は、清水の後堂より、本堂へ是斯う廻る左の方」と、折れたる刀押取つて、

ぐつとつッ込み、乳の下かけて引廻す。「悲しや是れは」と驚きさわぎ、「そも何故の御自害」と、兄弟縋り取付けば、こは〳〵如何にと箕尾谷も、呆れ果てたるばかりなり。母は苦しき息ながら、「やれ兄弟よ、其金を路銀にして、景清の所在を尋ねに、母が命の有る内に、ちやつと往け〳〵。ァ、嬉しや、まんまと仕おほせた。斯う云うたら箕尾谷様、嘸やさぞ憎からう、身を切刻み碎かれても、元より知らぬ景清の所在、數へやうと僞しは、兄弟を尋ねにやる路銀に金とらう大騙瞞大盜人、あの婆々め寸斷々々にもと思し召さうが、かはゆうて〳〵何うもならぬ子供の爲聟の爲、騙瞞に成つて死ぬる母が心、子を持つて後思ひやり、其時恨を晴れてたべ。ヤァ兄弟よ、千日千夜云うても名殘は盡きねど皆仇言、かまへて〳〵心を合せ、景清を見立てくれ。是を云うてしまへば、心にかうること浮世にない」と、詞は涼しく、心は弱る息も切れ、此世の別れと消えはつる。阿古耶は更に夢現、辨へ知らず取亂し、わつとばかりに伏沈む。十藏は箕尾谷に、泣面包む櫨紅葉、胸は時雨よ雨や小雨、岩木ならねば箕尾谷も、敵は敵金は金、死なずとも是しきに、了簡も有るべきを、不便の母が最期やと、餘所目遣ひも賴もしき。やゝ有つて十藏金押取り、物をも云はず箕尾谷が前に置く。箕「オ、返辨の心尤なり、此上は遣ると云ふともよも受けまじ」と、立つて死骸の前に置き、「七日々々の弔金、七々四十九兩の香典、死人に手向ける上からは、禮を受けう樣もなし、恩にもきせぬ來世金、受け悅んで成佛あれ。扨某は參り申す」と立出づる。「ヤァ〳〵箕尾谷、母に手向の情はあれども、景清を狙ふ御邊なれば、此十藏何時までも妨げ入れる合點か」「オ、言ふにや及ぶ、老母が愛心に免じ、狙ふまじ討つまじと云ひたけれども、我も根井の太夫と云ふ親有り、我ゆゑ江州へ蟄居の身、景清を討つて會稽の恥を雪がずんば、孝行も武道も立てがたし。汝等兄弟景清に廻り逢はゞ、斯く付狙ふと云ひ聞かせ、必ず用心怠るな」「オ、サ十藏が頰を篤くと見置き、人違へして悔むなよ」「何さ〳〵、千體佛程あるとても、一念の眼力、誠の景清討つて見せうぞ」「見事討つか」「儕見事妨ぐか」と、思はず兩方反打つて詰懸くる。阿古耶立出で、互に宥め宥められ、別れ出づるも止まるも、共に甲斐なきはゝき木の、有りとは見えてなき骸を、古い葛籠に法の道、心は網代の葬輿と、兄が歎けば妹は、まそつと貧しい野送りでも、燈籠なりとも有る物をと、暗む心の燈火を、法の光にかき立てて、泣く〳〵荷ひ諸聲に、爾時無盡意菩薩、卽從座起偏袒右肩、合掌向佛而作是言、世尊觀世音菩薩、大慈大悲を引導に、此世を離れ行く旅と、人を尋ねに行く旅と、道は二筋かはれども、涙はひとつ一筋の、誠の道こそしるべなれ。

第四　道行旅寢の添乳歌

箒木の、有りとは見えて逢はぬとは、代々の眺めの種なれど、我が身一つは無情きと、思ふ心の松の名や、世にも阿古耶が夫思ひ、勤めの中の誠より、まうけし胤の稚櫻、初の子持のかいしよなき、姿を人の譏り種、さがなき口もおのづから、七十五日はや立ちて、今日忌明の壽や、産神詣に假付けて、餘所の人を尋行く、當所も長の旅なれど、つい菅笠に草履がけ、案じるよりもやす〳〵と、思へば輕きさんでうの、橋も後に遠ざかり、京の名殘と見返れば、跡に追付く十藏が、日傘片手にふりつゞみ、まだ玩弄物知らぬ子に、甘やかしかる叔父樣と、互に笑ひあはた山、越えてぞ此處に追分や、大津繪召せと旅人の、心をしばし繋ぐにぞ、さてし惜しまぬ膳所の町、瀬田の長橋かゝる身の、重き思ひを祈れとや、そなたに立てる石山寺、南無觀世音菩薩、大慈大悲の惠にて、刃に沈む母上の、未來の闇も晴れ渡り、眞如の月の彼の岸に、迎はせ賜へと伏しをがむ、袖も露けき春の野に、おのが在所を知れよとて、妻戀ふ聲はけん〳〵ほろゝ、子を思ふ身はねん〳〵ころゝ、泣くなな泣いそ我ふところに、遲々たる春の日影を受けて、育て上げなん姥が餅、草津を早く出離れて、右と左へ二筋の、道は別れし我夫も、近江

とばかりしらま弓、何處をさして行きなんと、案じ迷ふも道理なる。十藏ふつと思ひ付き、まだ幼き嬰兒の、心は正直正路にて、神や佛の惠にも、叶ふ御籤の氣結び、辻占とはんと立寄りて、心に右を尋ぬれば、顏を自然と反向けたる、かぶりたこのよしなしと、又問うて見る左の道、につと笑顏の鏡の山、映る心にまかせんと、行く道もせは初花の、吹雪も深く森山の、梢殘らず色めきて、いとしをらしき里の若嫁、小娘達か、春の物とて流行唄、唐も大和も、鄙も都も濡れの沙汰、サヨエえゝ優し、ちんないろ〳〵、オヽオ粹や〳〵、宿は鏡の、男子和女郎がによす談合、サヨエ市河越て高宮の、町に烏井の二柱、おたがじやくしの森繁み、遙其方と額づきて、夫の命長かれと、守袋をかけまくも、忝しとゆふつげの、烏元の宿櫓橋、渡り〳〵て瞰上ぐれば、雲を縫ひ行く磨針の、峠遙に夕霞、旅の心の急しさ、一人打つたり舞うたりの、かはを過ぎ行く長繩手、たつ辻堂を目當にて、辿り行く身の便なき。住吉の橋の反つたは、大工からかや木からかや、木を削り、鉋かくれば、鉋からかも知らぬえ、知らぬ田舍も住めば又、我身一つの都ぞと、心の急ぎのばし置く、惡七兵衞景淸が、人に不審を打たれじと、普請通ひに身を扮し、在所大工の中間に入り、背高々々と異名を呼ばれ、流れ渡りの手間仕事、今日も朋輩打連れ立ち、普請場をはやさるの刻、暮るゝに遲き春の日の、ぶら〳〵かしこに立歸る。

「ヤアたつた今までくわん〳〵した空で有つたが、エ、聞えた、狐の嫁入のそばえ雨、晴らしていかう」と辻堂に、立ちよる内の高咄し。中に頭と思しきが、張肱かまへ分別顔、「おらが出入の仕事旦那、根井の太夫大彌太様、お名が大彌太といふによつて、滅多やたらの大屋敷、此度の御譜請は、鎌倉の頼朝様がお腰かけうと仰しやる故、物入構はぬ結構ずくめ、正眞の大名普請、皆も隨分精出しやれ。手間賃はまうけ次第、ナウ背高、さうぢやないか」「いかにも此方の言はしやる通りぢや。扨あの根井の太夫殿は、何う見ても阿呆ぢや、それを何故といふに、鎌倉の頼朝様が、お腰かけうとおつしやるなら、つい上り口を一間程普請して濟むこと、それもやかましいに、床机一脚あてがうたら、ゆつくり腰はかけらるゝに、いかに金が澤山なとて、あだづひえな大普請、但し頼朝様のござるといふは、世間への言觸らしで、あの内にござる娘御に、聟殿取つて御祝言、其晴れの普請ぢやないか」と、餘所ながら裏問へば、「ハテ文盲な、お腰かけらるゝと云うて、常體の人間とはちがうて、頭さへ大きい頼朝様、腰の廻りは思ひやらるゝ、でつかちない物で有らう。此様なことで普請がなけりや、こちとが中間も立たぬてや。したがまあ悦びやれ、奈良の大佛は建立成り、是から段々興福寺の元興寺のと、大工の秋が入つて來る、近年にない摑み取、是といふも番匠の始り、太子様のお蔭、此度七堂伽藍修覆に付き、大工中間一統に、手間を御寄進申すが、名々の冥加の爲、一年に六日づつ頭役に廻つてくる、おらが番に當つたら、戻り土産は名物の干蕪買うて來う」と、笑ひも哄つとはれ渡る、雨のあしもと弱々と、旅に阿古耶が兄弟づれ、濡れみ乾きみ菅笠の、辻堂にさしかゝれば、互に見合す顔と顔、景淸ちやくと、「エヘン〳〵、はあ旅のお衆さうなが、雨に逢うてさぞ御難儀、まあ此處で緩りつと、日の暮るゝまで休んでござれ、お連も急かずと〳〵」と、目で知らすれば呑込む十藏、「お詞に甘へて申しかねた事なれども、火打があらばお貸し下されい、一ぷく吸付け申したし」「いや〳〵火打は持ちませぬが、好い事を存じ付いた、幸ひ有合ふ檜の切、錐揉にして進ぜう」と、道具箱あぜかへせば、朋輩共口々に、「いや背高めが煙草の火で、旅の女中こまづける、あの抱いた子が目に見えぬか、歴とした男を鼻の先に置きながら、ふづくりかける大膽、猫の五器へお見廻ひ申す鼠ぢやまで」「それ〳〵、猫で思ひだした、口明いて居る蚶へ、ほでほしを突つこんで、迷惑するを見るやうな、構はずと置いて來い」と、笑うて皆々立かへる。跡は三人詞も口々、「ヤア是は無事で」「健固で」「よう健でゐて下さんした」と、阿古耶は夫に縋り付き、暫し涙にくれけるが、「なう此様に廻り逢ひ、御無事な顔何時か見ようと、只つた今まで案ぜしに、是と云ふも年頃日頃、觀音様を念じた驗、一つはいか

い兄弟の、お世話の甲斐で嬰兒まで生み、親子兄弟一所へ、寄るに付けても母様の」と、詞を殘す曇り聲。景清外は耳にも入らず、「年よられたる母人、同道なきは第一の氣懸り、して〳〵仔細は十藏樣」「さればく、我母女には稀なる最後、いやもう是は順の道、仔細は阿古耶にゆる〳〵と御聞きあれ」と、愁を餘所にくろむれば、景清はハアハッと膝を打つて「エ、殘念、其日陰の身ならずば、都に在る内對面遂げ、聟姑の御盃、せめて戴くものならば、是程には思ふまじ」と、男涙の繰言に、阿古耶も今更十藏も、つきぬ歎を押しかくし、「扨まあ何から申さうやら、難儀の中の悦びと阿古耶が平産、あたり近所の介抱にて、漸とすくだたせ、産神詣でと僞り、京はすいと脫けたれど、貴方の行方近江とばかり、何處をしやうどと思ひしに、不思議にも廻り逢ふ天道の御惠、此上の珍重は、愛らしう生れた此子、手渡し申すが我等が土産、指似を置いてきたはそこもとの細工のわざ、アレ彼の樣ににこ〳〵と、笑ふ程にそだて上げたは伯父が自慢、是ばかりは恩に被てもらはにやならぬ」と、笑うて見すれば、「其元への御禮、景清が口では申さぬ、かくの通り」と頭を下げ、手をつかへ、「扨出かしたは阿古耶が心底、六波羅へ引出され、拷問にあふぞとは、人の噂に聞きつれども、心に悔むばかりにて、憂き目を救ふしがもなく、無念の月日をくらせしが、今日只今廻り逢ふは操の德、あつぱれ貞節過分々々」「なう其お詞たつた一つ聞かうばかりの辛抱、連添ふ女房に過分とは、勿體なや忝なや。此子も心に悦ぶやら、乳味さうに呑んうでゐる、顏見てやつて下さんせ」と、云ふぞ妹背の誠なる。景清重て、「是なう聞かれよ、某が日比の願望、追付け成就の幸ひ有り、此長濱の片邊、根井の太夫大彌太が隱居屋敷へ、源の頼朝上洛の次手に立寄らんとの風說、聞くとひとしく飛立つばかり、何とぞ根井が普請に入込み、事の樣子を伺はんと、思ひ付くより俄大工、すうきを以て此程より、毎日普請に雇はるゝは、身の幸と悦ぶ矢先、力々に廻り逢ふも不思議の吉相、思ひ込んだる念を以て、根井が館の案内覺え、やす〳〵狙ひ頼朝が首取つて、平家に手向けん七兵衞が積り普請、疊みこんだ胸の一圖、氣遣ひ有るな」と語るにぞ、「オ、潔し頼もしゝ、それに付けて十藏が、一つの計略思ひ付きたり。是より某東國へ赴き、頼朝が上洛の道中へ出つくはし、惡七兵衞景清と名乘つて狼藉に及びなば、供先守護の大小名、我討ちとらんは必定、景清は亡びしと、頼朝も心をゆるし、根井が館に入來らん、所を狙ふ誠の景清、本望をとげ給はゞ、繫がる緣の某まで、共に高名の數に入り、武士の大慶是に過ぎじ。阿古耶を御身に渡す上は、兎角の噂隙づひえ、是より直に罷り立つ。妹さらば、景清おさらば」「ア、天晴の心ざし、身を捨てゝの親切、此上は止むるとも、とまらぬ氣質の十藏殿、旅立の

餞せん」と、道具箱の底よりも、隱し置いたる一腰取出し、田舍大工の七兵衛が、嗜道具のだん平物、鎌倉表普請の晴れ、指いてござれ」と差出せば、忝しと押戴き、腰にぼつ込む讓の道具、細工は流々侍の、名を萬天に上普請、勇む心の內普請、追付け手柄を立て揃へ、家わたり粥の豆の數、喰ひ當て嚙み當て高名せんと、心も似れば形も似る、二人が姿緣の蔓、瓜を二つの景淸十藏、立別れてぞ三重行水の、漣波の國とも詠みし近津江、所の名さへ長濱と、御代を祝ひし家造、主の心廣庭に、移し植ゑたる糸櫻、今を盛りとはびこりし、根井の太夫大彌太が、隱居といへど古への、氣質は殘る大名普請、數々多き作事の內、園は主の物數寄とて、物に念者の根井の太夫、妙婢に手傳はせ、手づから結ぶ壁下地、「オヽオヽ是で葭簀、此處へ一本靑々と、此竹節の付けやうが至極々々。こりや出來た面白い」と、機嫌にこ〳〵わらび繩、しやんと結んでふッつり鎌、「既に指をやらうとした」と、差置けば口々に、「遊ばし付けぬ下々の手業、お慰とは云ひながら、お怪我が有つては、お姫樣のおきもじ、もう是でお仕廻ひ遊ばせ」「ムウわいらが事の道理を知らぬによつてさ、此度の普請はな、忝くも鎌倉殿御上洛のお次手、此爺が隱居へお腰かけらるゝ有難さ、壁下地でも自身にするがせめてものもてなし、も些つとぢや手傳へ」と、又吩咐くる主命に、いやとも伊豫簾携へて、辛氣篠竹斑竹、纏ふ葛の永き日も、はや九つか普請場の、拍子木かち〳〵晝休み、槌も手斧もしづまれば、「ムヽウ普請小屋の晝食時分な、晩までもかゝらうと思うた此窓、半日には捗行き捗行き、扨此壁はどの左官めに吩咐けうぞ、數寄屋の上塗晴れの物」、と獨呟く目通りへ、小腰屈めて、「慮外ながら、此壁を塗らんず者、拙者ならで外になし」と、泥鏝ひらめかしすきみ口、壁訴訟とぞ見えにける。有合ふ女中笑止がり、「是々壁塗、殿樣のお側近う、頭巾もとらず憚千萬、下りやり〳〵」「ハヽアさすが女中とて、物の作法知らずぢやな、若衆の紫帽子、嫁御寮の綿帽子、虛無僧の編笠、左官の頭巾は脫ぐが不躾、脫がぬが禮儀でござります」と、云ふに大彌太打頷き、「是はさもあらんこと、して其方は此間に見馴れぬ者ぢやが、今日初ての左官か、得て我が樣なひやうげ者は、口ばつかりで細工はあか下手、園の上塗合點がいかぬ」「是はお情ない御一言、正眞の口も口、手も手と申すは拙者が事、先御細工の下地窓、見た所が地黃丸屋の看板形、水のへりによござりましよ。葭簀の模樣は頽れ格子、此取合には瀟洒と、淺黃か桔梗か丁子茶か、栗梅花色濃鼠」と、言ひならぶれば、「默りをろ、妄しい、普請も未だ滿てぬ內、頽れ格子とは忌々しい、彼奴明日から寄せなと言へ」と、以ての外の不機嫌に、言はれぬ數寄屋の壁塗ろより、晝飯の白壁頽つたが百貫優しと、左官は不首尾に內に入る。大彌

太元より昔人、只管氣にやかゝりけん、「ヤイ女郎めら、此窓打頽つて仕舞へ、早く〳〵」と呵りの聲、奥へ漏れてや娘の白梅、する〳〵と立出で、「何事をお氣に違ひ、父様にお腹立てさせます、是と云ふも、自が、お側に居なんだ第一の誤、様子は知らねどお機嫌直され、おこごの御膳氣をかへて、妾が部屋の庭の躑躅、咲いたもあれば咲かぬのも、有るが一種の御肴、酒事初めてお遊び」と、物和らかに詫ぶるにぞ、子にほださるゝ親心、顔色直して、「オヽそりや氣が替つて宜しからう。惣じて心にかゝることは、祝ひ直しが大事の物。いやそれに就て思ひ出した、數多入り來る大工の中、人に優れて背の高い男め、つく〴〵見るに細工の手捷さ、萬事物馴れた奴と見た、其奴呼べ、此窓の祝儀祝ひ直させ、心よう酒呑まう、其大工呼んで來よ」はつと答へる返事の内、「お召しなさるゝ背高めは私でござります」と、出合頭の拍子よう、鉢巻取つてつくまへば、「あれ見たか白梅、先づ追取つて機轉利き、こりや背高近う寄れ、其方が育ち柄、都の生れと目利したが、此近江へは何故に來た」「是は有難いお尋ね、もと私は飛驒の國の出生、幼少の時分より、五畿内を經廻りて、去年より此お國へ引越して參りしが、此度の御普請は、頼朝様のお成とやら、お出とやら、其御造作に雇はるゝは、大工冥加に叶うた有りがたい事と存じて、微塵のらを仕らず、一服のむ煙草を半服に減じて、一無盡に精出しますれば、其御褒美に作料は、五人前づつ御拜領、頼み上ぐる」と願ひける。「成程々々、其方が言ふ通り、忝くも鎌倉殿、御光臨有べきと仰下さる有難さ、過ぎし比鶴が岡の八幡宮、御造營の御時、忝くも頼朝公、氏神への御馳走とて、御手づから石を運び砂を持ち、だんかづらを築き給ふ、其例しを思つてな、身も手づからの下地窓を、差別も知らぬ左官めが冗口、如何にしても心にかゝる、祝ひ直してくれまいか」「是は〳〵お易い御用、鶴が岡の縁につれて、此窓は瓢の形、萬年の齢にて、内の畳簀は吹寄せ格子、富貴を寄せると云ふ心、お庭の花は糸櫻、結びを長う頭をうなだれ、下々が靡き隨ふ眞盛、お目出たう存じます」と祝儀をのぶれば、「出來た〳〵、こりや嬉しい。ヤレ女子共、此大工勝手へ伴ひ、料理喰はせ酒呑ませい、身も晝寢酒過さう、白梅來よ」と打ちつれて、ほた〳〵悦び奥に入る。「サア御意の出た大事のお客、殿様御機嫌のひづみを直す大工殿、つゞくり普請の名人」と、女中のおどけ賑々しく、臺所へぞ通りける。憂しと見し、昔を今は慕ひ草、世を忍ぶ草しげる身の、憂きが中にも妻や子を、心一つの寶の玉、阿古耶が名のみ甲斐もなく、辛き世帶を鹽鱈と、子持姿に古の、派手をくろめるお力振り、晝間の辨當夫の爲、運ぶ心ぞ誠なる。普請小屋差覗き、「細工場を未だ仕廻はずか」と、奥を見入つて伺ふ中、お臺所の御馳走に、顔の日和も好い機嫌、いそ〳〵と出て來るは、

「コレこちの人ぢやないかいの」「ムヽ、女房共か、坊か、よう來たなァ」と手を取つて、「是は是はきつい熱、丸子でも呑ましたか。此樣な事なら、晝飯持つて來るには及ばぬ、子の育て樣が大よそな、以來をきつと嗜め〳〵」「なうひよんな事言ふお人、どの樣な寶にも換へまいと思うて、育上げる女夫が樂しみ、粗末にするとはなけれども、廣い世界を狹う暮し、大事を抱へた主のお身、大工の家業は是非もなく、朝内を出しましても、如何か斯うかと案じられ、晝の日あしを待ちかねて、辨當急ぐも顏見たさ、サア機嫌好う參つて」と、風呂敷包取り出せば、「いや〳〵今日は晝飯入らぬ、思ひがけもない事が殿樣の御意に入り、お臺所へお召しなされ、結構なお振舞、諸白を引受け〳〵近年の榮耀、こちとが内のたんぽ酒、賣場のちりとは違うた物」と、言ふ顏つれ〴〵打守り、「いとしぼや時世とて、心も詞も品下り、昔には似ても似付かぬ姿容、思ひ出せば味きなや。人々多い其中に、御一門の用ひも强く、酒宴亂舞の座敷にも、肩を竝べ膝を組み、さも羨まれた立身の、ほんに麒麟も老いぬれば、駑馬におとると云ふ譬へ、人に手を下げ機嫌を取り、わづかの酒を尊がり、諸白の賣場のと、昔は夢にも言はぬ詞、覺えさしやつた悲しさ」と、思はず喞つ憂き涙。「ヤイこりや何を馬鹿つくす、人に以前を芳しがらそと、男の外聞つくらひの僭上置いてくれ。假令誰も聞かねばこそ、冗口やめて早う往ね、道でお尻を抓られな」と、おどけに紛らし目遣ひの、往ねよ〳〵に女房は、娘を抱いて立ちかへる。奥より主の聲として、「最前の大工、それに居るか、背高々々」と呼びかけて、庭に出づれば、「ハッ是は殿樣、御用いかど」と畏る。「最前女子共へ吩咐けた、御殿へ見越す庫の窓の目塞ぎ、如何にしても鬱陶しい」「成程其儀は御意の趣、お臺所で承る、申さば僅のはした仕事、明朝でも致しましよ」「いや〳〵年寄は氣が焦つ、今日中に仕舞つてくれい」「其儀なら只今」と、形に似合はぬ尻輕さ、彼處に置きたる道具箱、しやんと擔げて脚代の、十二の梯子大またげ、上る大工はさもなくて、見上ぐる方の危ながり、心ぐれつく丸太の上、板は幾重の架橋を、遙奥へと歩み行く。大彌太ほく〳〵打首肯き、上の小袖脱ぎ捨つれば、下に腹卷軍場の扮裝、袂より呼子の笛取出し、吹き立つれば、合圖に隨ふ日雇大工、上張なぐり立ち出づる、姿は勇々しき武士の、腰に捕縄十手携へ、大彌太が前に居並んだり。續いて内より娘の白梅、捕縄しやんと玉襷、長刀押取りすうわりの、腰も裳裾も引きしめて、心を配る二皮眼、凛々しくも又媚めかし。大彌太勇む顏ばせにて、「オヽ潔し方々、本國信濃のよしみを忘れず、愚老が指圖に姿を扮し、力となつて給はる段、祝著せり」と禮儀を述べ、「扨此間心付け、試し見る彼の大工、最前かれが妻女とて、用有りげに來りし

が、昔を慕ふ詞の端、疑ひもなき惡七兵衛景清と、立聞に知つたる故、書請に事寄せ脚代へ上げ置いたり。年頃日頃親子が賴み、夫の仇聟の意趣、晴さん時節到來せり。不便や聟の箕尾谷が、未だ此世に存らへ居て、斯くと傳へ聞くならば、嘸本意なくも口惜しからめ。とは思へども手に入る敵、やみ〳〵と逃がしなば、月夜に釜のぬかり武士と、世上の譏恥しく、番手はかねて定め置く、はや踏込め」と下知やるにぞ、心は一致の信濃育、木曾の梯それならで、上る梯の子村鳥の、羽音もかくや脚代の、踏所もしどろに寄せかゝる。惡七兵衛景清は、心に豫てまうけの敵、土藏を小楯に突立つて、「ヤア物々しや事をかしや、景清を搦めんとは、大黑柱を蟻の髭」と、嘲笑ふ隙間を見て、「捕つた」とかゝる一番手、はつしと蹴られころ〳〵、勾配するどき瓦屋根、巴に並んで三方より、駈寄ればまつかせと、手斧にちよんと首飛んで、こけらを風の吹きしくごとく、遙かに投げてやり鉋、遁さじ者とひよつと出の、頭はつしとさい槌に、目を白黑と三ツ目錐、此世の息をはなし鑿、手竝に鐵鎚鋸の、目に立つ相手もあらばこそ、一度に哄と群るを、當り任せに引抓み、ばらり〳〵と投げはふるは、大工のわざとて棟上の、餅撒き散らす如くなり。大彌太今はたまりかね、「ヤア娘我に續け、惡七兵衛景清が、鬼神にてもあらばこそ」「オウオ父樣さうでござんす、人と人との勝負づく、命を捨てば易かりなん」と、親子うなづき梯の子に、駈上らんとする所、「しばし〳〵根井殿、お待ちあれ」と聲を懸け、跳り出づるは以前の左官、大彌太焦つて、「ヤア緩怠なる妨げ奴、おのらが出る場所に非ず、退去れやッ」と怒るにぞ、「オ、名乘らねば實に尤、斯く申す某こそ、聟舅の契りをなし置く箕尾谷四郎國時」と、詞も引かぬにはつたと睨め付け、「しらぐしき紛れ者、儕れ誠の箕尾谷ならば、疾くより名乘つて出で、惡七兵衛景清を、搦めんと思ふ氣はなくて、三里下つて箕尾谷とは、ウヽム聞えた〳〵、扨は景清が一族な、我々に心をゆるさせ、此場を遁さん計略、娘構ふな捨置け」と、又駈出すを抱き留め、「御尤の御詞、付け狙ふ景清と名を聞きながら、躊躇ひしは知し召さずや。日本に惡七兵衛二人有り、內一人は似せ者にて、伊庭の十藏と云ふ男子、樣子を語れば事長し、其實否を正さん爲、最前より差控へ、事の樣子を窺ふに、豪氣の働き手竝の程、正眞の惡七兵衛に極まつたり。然る上は箕尾谷が、武運を開くは此處ぞと思ひ、罷出でたる某が、誠の扮裝御覽あれ」と、搔投り捨つるたちつけの、菖蒲革には引換へて、勝負に益有る肌著の小具足、家職にあらぬ小手脚當、兜頭巾を覆ひたる、下は誠の星甲、鍾はきれてと諷はれし、名は源平に隱れなき、箕尾谷とこそ知られけれ。白梅嬉しさ飛立つばかり、「扨はお前が箕尾谷樣、縱へ御身の恥辱は有りとも、連れ添ふ女房に何遠慮、疾くに所在

もお知らせ有り、健で居る氣遣ひすなと、つい一筆の便して、落付かせうと云ふ氣もなく、あんまりな氣強さ、聞えませぬ」とかきくどく。「尤の恨ながら、惡七兵衞景清に、廻り逢はざる其内は、面目もなき箕尾谷と、忍びくらせし甲斐有つて、今日貝今景清に、廻り逢ひしが結ぶの神、運つきて打たるゝとも、未來の契違へじ」と、云ふに悅ぶ父の大彌太、「賴もし〳〵、其詞が取りも直さず婚禮の盃、我手に入つた景清を、御邊に任すが聟引出、舅が寸志受取り給へ」「ハァ忝き御賜、祝ひ納むる緣の綱」と、捕繩手繰り大音上げ、「上總の七兵衞景清は何處に在る、去る元曆の戰ひに、見參したる源氏の武士、箕尾谷四郎國時、汝に廻り逢はん爲、假に扮しの左官が泥鰻先、勇氣の荒塗打ちこぼち、三寸繩に括り上げん、覺悟々々」と呼はつたり。景清こらへず進出で、「珍らしや箕尾谷、昔の弓矢引きかへて、汝も我も職人業、庫の鉢卷引きしめて、首の骨こそ強くとも、此七兵衞が腕先に、受取普請の力業、手並の手間賃覺えあらん。猶も恥辱の上塗せよ」と、互に付け寄る身の構へ、眼を配り氣を配り、踏む脚代の壇の浦、八島の戰今此處に、見るやとばかり挑み合ひ、しばし勝負も付かざりしが、互に引組む脚代の、板踏碎き廣庭へ、どうと落ちたるはづみの拍子、景清上に重なりしを、えいやと返す箕尾谷が、一念力の一筋に、絡むる繩は勇士の意地、時の運命是非ぞなき。誰かは斯くと告けたりけん、妻の阿古耶甲斐々々しく、幼子背にしつかと負ひ、上帶しめて腰刀、息をはかりに駈付けしが、夫の繩目に目もくれて、胸は涙の闇ながら、そも何者の所爲ぞと、邊りを見廻し、「ヤァ此方は箕尾谷殿、京から下り先々へ、付けて廻つて聞えぬ人、又ぬつぺりの口上手に、此方の夫をたばかりしか。サア千も萬も入らぬ、彼の繩解いて主返しや、否か應か返事次第、女子が指いても刀は刀、覺悟の魂違ひはない」と、反を打つてつめかくる。箕尾谷騷がず、「有繋は女血迷うたな、都にて逢ひし時、景清に廻りあはど、必ず本望遂ぐるぞよと、番ひし詞忘れしな。何事も定まる運と思諦め、はや歸れ」「いや〳〵いや〳〵諦めまい、恩も情も義理も法も、夫には換へられぬ」と、すらりと抜いて打ちかくる。どつこい爲せぬと白梅が、中に隔つる長刀の、鏑をけづる女同士。惡七兵衞立上り、戰ふ阿古耶に押隔たり、後手ながら引つすゆれば、「なう情なや景清殿、此の期に及んで妻子の命、構うての仕業か、せめて女の念晴し、針でついた程なりとも、箕尾谷に手を負はせ、死にたいはいの」と齒がみをなし、身を悶えたる叫び泣、さすがの景清もてあつかひ、しばしあぐみて居たりしが、「ヘッエ是非もなや面目なや、某息の通ふ中、詞には出さじと、思ひ極めしことながら、是なる女が方々を、敵よ仇よと付け狙ひ、道に背かん不便さに、仔細を語る聞いてたべ。ナニなう箕尾谷、御邊は弟、こりや我

は兄、一腹一生の兄弟なるは」と、云ふに人々顔見合せ、是はと驚くばかりなり。箕尾谷更に信用せず、「我が父母に離れしは八歳、はや東西も辨へたれば、對面はあらずとも、兄有りと云ふこと噂にも聞くべき筈、いか樣仔細もあらんが、先づ父母の住所、名字系圖は如何に〳〵」「チウ父の名は愛甲の太郎國久とて、源氏武士の浪人、母の氏は平家の侍上總の一統、住所は相州箕尾が谷、其時我は十一歳、御邊は二歳、母の由緣の上總の家より、某を養子にせんと只管の懇望、父國久の仰には、よしみ有る上總の家、筋なき事と云ふにもあらず、養子と成つて平家に仕へよ、去ながら、今より後は親子兄弟音信不通、それを如何にと云ふに、二歳の弟が人となり、父が名字を受けつがば、兄弟源平と引分かり、一戰に及ばん時、平家の方に兄有りと知るならば、恩愛に逼り義理に迷ひ、思はぬ不覺を取りもやせんと、行末思ふ親の慈悲、弟が爲と思ひ、一生不通にしてくれるが、却て親への孝行と、理に當りたる父の詞、我はそれより平家と成り、御身は未だ二歳にて、何辨へもあらぬ上、父母深く隱せしなれば、兄弟有りとも知れぬ筈、我も御身の面體は覺えず、愛甲の家の名字、改めしとは元より知らぬ、箕尾谷四郎を弟と知つたる證據は、こりやゝい女房、我懷の一包、人々に見せてくれよ」と取出させ、壇の浦の戰に、引斷つたる兜の鍜、我高名の印ぞと、取つて歸り能く見れば、「裏書に記せしは弓矢神の御詫宣、八幡座より鍜まで、書下したる父が筆、則ち愛甲の名字の因緣、愛する甲は家の重寶、是を著せし箕尾谷は、我弟にて有りける物を、あゝよしなき手柄達と、悔むにかへらぬ浦波の、泡と消行く平家の果、我一人殘りしは運强き景淸、賴朝を討つべしと、不敵にも思ひ立ち、根氣を碎くに甲斐もなく、無念の月日を暮す中、箕尾谷四郎國時が、我を狙うて尋ぬると、是なる阿古耶が物語、つく〴〵思ひ廻らせば、實の父が形見と云ひ、廣い天地の其中に、たつた獨の弟、憐をかくるは兄の道、所詮賴朝を討つたるとて、昔の平家と取立つる、公達とてもあらばこそ、此上は我身を捨てゝ、弟に高名させ、弓矢の家を起させんと、思ふに幸ひ、緣を引いたる此屋敷、御邊に尋ね逢ふ物か、二つには又運に叶ひ、賴朝に出つくはさば、本望とげんと入込みし、鍜思案の拔目なく、廻り逢うたる我弟、命を惜しまぬ働きを、感ぜし故に景淸が、褒美の繩目に及びしぞや。只今返す其鍜、兜に繼いで家も繼ぎ、手柄は輝く星兜と、武士の名を照してたべ。此上に兄なりとて繩を解かば、直に勘當他人と成り、景淸取逃しては、恥辱に恥辱重るが合點か」と、裏釘かへす詞詰、心にこたへて賴もしき。箕尾谷はつと飛退去り、頭を地に付け涙をながし、「親の御慈悲兄上の御情、何と報ぜん詞もなし。知らぬ上とは云ひながら、勿體なくも組伏せて、昔の武士に歸らんと、笑を含みし淺ましさ。六度

契つて兄と成る、惠も有るに弟は、七度の結び返しもせで、結び絡むる縛繩、天の照覽空恐ろし。よし御勘當あらばあれ、いで縛めを」と立寄れば、振放つて、「愚々、弟と知らず兄と知らず、知らぬ昔は歸らぬ道、互の因果は綯へる、繩目と思へば悔もなし。女房ももう吠えな、豫てかくと語りなば、心落さん不便さに、是までは隱し居たり。鎌倉へ引かれなば、大方永い別れならん。何云ひ殘すこともないが、娘を無事に」とばかりにて、餘所目遣ひに紛らす涙、阿古耶はとかうの返答も、なき沈みたる憂き思ひ、察し遣りて白梅が、「わたしが繩をときますれば、何處へも障りはなし」と、又景清に取付けば、「ヤア小ざかしき弟嫁、此繩解いて侍捨てさせ、誠の左官と成り下らせ、土に夫の顏汚せか。サア一時も早く鎌倉へ、伴へやッ」と立上れば、「情ない兄人、某が身にも成り、思ひやつて」とかきくどく。「ヤア聞分もなき男子」「イヤ御身こそ聞分けなし」と、爭ひ果しも、なげきに沈むは二人の女房、根井太夫横手を打ち、「仁なる哉義なる哉、先刻より感涙に目を泣腫し候ふよ。箕尾谷が心底のせつなさ、推量はしつれども、景清の志、深き辭退は却て不孝、せめての恩を報ぜんは、阿古耶殿を身に引受け、幼き娘を養子とせよ。此大彌太が初の孫、時しも三月十八日、今日の祭の神堅く、人丸娘と名を呼びて、育てる老の樂み」と、歎の中の悅び顏、景清あつと頭を下げ、「賴もしき御詞、望は足りて一門一家、廻り逢ひたる月も日も、其元曆の八島の戰、取りも直さず三月の十八日、信ずる佛の御緣日、臨刑欲壽終、念彼觀音の力を得んこと疑なし。急げや急げ」と先に立ち、勇むは繩付繩取は、心悄れて立ちかぬる。阿古耶は夫に恥ぢらひて、涙呑込むくもり聲、幼き娘を抱き上げ、「是なう今の父樣が、鎌倉へござらしやる、目出たう頓てお歸りと、サ、さう〳〵してたもふ。其次手に元の父樣、顏の見納め見せ納め、永いさらばの、サさうをしや」と、我身の心かこつけの、詞も涙に咽び入り、身を打ちふして歎くにぞ、かゝるあはれにおほ彌太も、涙湛ゆるしば〳〵目、「浮世の中に武士程、義理の悲しき物はなし、云ひたさ泣きたさこらゆる辛さ、なぜに二人は兄弟の、左官や大工に生れなんだ。職人の身ならばなア、斯うしたことは有るまい物」と、有繋は老のくりごとに、白梅阿古耶も顏見合せ、包みかねたる歎の色、わつと涙の糸櫻、庭の立木に紛ふらん。景清わざと怒りをなし、「ヤア未練なり愚なり、源氏育ちの侍は、會者定離をも辨へず、妻子を忘れ親を忘れ、弓矢の義心も知らざるか、恥を恥とも思はずや」と、聲あらゝかに言放せば、大彌太歎き押留め、「實に誤つたりそれよ〳〵、音に聞えし景清を、搦め取つたる箕尾谷が、譽れは朽ちせぬ石疊み、根井の太夫が家名をつげん」と、門出壽く言の葉に、深き涙を忍びの緒、兜も昔に立ちかへる、鋲の星の花の兄、勝つ色見する

御惠みと、勇み立つたる匂ひ鳥、連なる枝に若木の花嫁、老木の松に嬰兒の、可愛盛り見殘して、惜しむや春の星月夜、鎌倉さしてぞ三重急ぎける。

第五

百戰百勝、勇士の名を定がたし、死を易くして名をあらはすといへり。上總の景淸、自ら賴朝の手に渡れば、扇が谷につめ牢をしつらひ、取つて押入れ、警固は在鎌倉の諸大名、一日一夜づつ、番代りに預りて、嚴しく非常を警めらる。根井の太夫希義、當番にて未明に相詰め、見れば門々當所の幕、海扇の紋所、「昨朝より今朝までは、岩永左衞門當番よな、根井の太夫番代りに參つたり」と、言入るれども、役所を渡す體もなく、走つて出づる人、息を切つて戻る人、足を飛ばせ、櫛の齒を引くごとくなれば、何事やらんと根井の太夫、不審ながらも立ちやすらひ、返答おそしと待ちゐたる。しばらく有りて、「御通り有るべし」と案内させ、岩永左衞門悄々と立出で、「ヤァ根井殿、早速の御番代り御大儀千萬、お目にかゝつて詞もない、先以て箕尾谷殿、景淸を生擒り、高名比類なく、貴殿も昔に立ちかへり、御親子並んでの御勤、目出たいと申さうか、御大悅推量致いた。扨其景淸に付いて、ちと御了簡に預らねばならぬ譯有り、

お聞きなされ、牢を脫けついと致した」「とは入口の錠下さずか、但しは水道厠などより脫け出でしか、いづれの道にも不念なり」と、肝つぶせば頭を搔き、「それなれば下々の不念と申す分も有らうが、聞いてたべ、櫟白櫧栂の木の、長さ一丈有る物を、大地へ七尺掘り入れ、上三尺の詰牢、欅で蛛手格子を切り組み、一尺二寸の大釘、うらを返さずひつしと打ち、足を牢より外へ引出し入れ違へ、七十五人して引いたる楠にて上げほだしを打たせ、十挺詰鐵たうたう樞、大盤石を積み重ね、是には根掘の大竹、筒に切つて擔かせ、身動もならぬ、是御覽なされ、此牢を破りました」と、幕引きのくれば立寄り見て、びつくりし、「是程丈夫に拵へたを破る音が、御邊の耳へ入らざるか」「面目もない、側に居て微塵も耳へ入らず、くッつりと寢た間の夢程も存ぜなんだ。只今より明朝までは貴殿の御番、此通り言上なさるれば此岩永、好い仕合で遠嶋は見えて有る。御了簡と申すは餘の儀でない、方々へ追手をかけたれば、召捕つて歸るは早うて五つ、遲うて四つまで、沙汰なしに成され下さるれば、大名一人御取立て、ハテ目に見えぬことに堂塔建立さへなさるゝぢやござらぬか、根井殿、ナ申し」と、甘へかゝれば、「何さ〳〵、箕尾谷といふ臆病者の子を持ち、とばしりのかゝつた此太夫に賴む事は無いはず、ハ、、、」と苦笑ひ。「是は術ない、それを此處で仰られては消えたい〳〵。白梅殿御

婚禮、何やかやのお悦びに免じ、是非お頼み」と手を摺る所へ、荒木源五息を切つて駈け付け、「惡七兵衛景清を、三个村と申す所にて生擒り、只今是へ引いて參る」と訴ふれば、岩永いきいきい出し、「ヤア根井、頼むこと何もない、追付け景清渡し申す」と、手の裏かへす舌も引かぬに、前後を圍み、警固嚴しく連れかへる。根井の太夫きつと見、「ムウ是が逃げた景清か、ハヽヽヽヽ、箕尾谷が生擒つて差上げし景清に、似は似たれどもさうでない。察するに是は彼の伊庭の十藏、景清にして此根井受取ること罷りならず。刻限うつる、此通り言上せん」と立出づる。「ア、親仁樣せはしない、まあ半時待つてたべ、追付け誠のが來ますはいの。やい者共、追々に又往け〳〵」と追つかけさせ、「扨は儕講釋師めか、下河原でも取違へ、一度ならず二度ならぬ妨奴、何として腹癒ん」と、立蹴に撞と蹈倒し、足に任せてさいなむ所へ、誰訴へしか頼朝公、重忠に轡とらせ、蹄を飛ばせかけ付け給へば、岩永大きに敗亡し、頭に天の落ちかゝるかと、土に平伏し恐れ入る。「只今言上仕らんと存ずる所、御駕を苦しめ奉る。夜前景清牢を破り脱け出て候、言語道斷の憎い奴」と、言はせも立てず、馬上ながら御聲高く、「牢に入れたるばかりにて、逃げうせぬ物ならば、警固を付けるに及ぶべきか。長く一人に番させては、怠る油斷も有るべきかと、一日一夜を限つて、かはる〴〵警固せよと云ひ付けしは

何の爲、牢を破つたる景清に科はなし、番を怠り牢を破られ、取逃したる儕こそ憎い奴、諸士の見せしめ、急度刑罰に行へ、重忠」と、御立腹大方ならず見えたる所へ、箕尾谷四郎汗を浸し駈來り、「牢を破り落失せたる景清、是へ參上仕る」と、申す詞の下よりも、妻の阿古耶に手を引かれ、片手は杖をつく〴〵と、見れば兩眼くり出し、東西わからぬ其風情、十藏驚き走り寄り、「御身が事を聞いたる故、何とぞ奪ひ返さんと來る所、景清牢を破り、落失せたりと尋廻る、嬉しや好い所へ出くはせし、かねて命に替らんと、念願はこゝぞと悦び、景清是に在りと名乘りて安々と生擒られしは、其間に落延びさせん爲、是まで來る十藏が、志は無になつたか、直ぐに何處へも落ちてくれぬ、側からも何故氣を付けぬ妹、エヽ十藏が思ふ程にない、曲がない景清」と、地團駄踏んで泣きければ、「なう其氣も付いたれど、儕が知つたことぢやないと叱られて、泣いてばかり」と縋り付き、重て袖を絞りける。重忠御覽じ、「珍らしや景清、牢を破り遁れ出でたる身の、如何なれば立歸り、殊に兩眼を抉つて盲目と成りたるは訝しゝ。頼朝公も聞し召す、心底を明かされよ、承らん」と宣へば、「ア、宣ふは秩父殿候ふな、お尋ねなくとも申上げんと存ずる所存、餘の儀にあらず、斯く御敵と成つて付狙ふ我なれども、兎角命を助け、御味方に召されん爲の御情、申すに及ばず、海はあせて山と成るとも、二君に仕ゆ

る我ならねば、所詮此牢蹈碎き、關破りの科を拵へ、害せられんと心づきしが、思へば其日の警固の侍、牢を破られ取逃がし、我故咎に預らんも罪作りと、一日々々延せしが、昨朝よりは岩永が番に代つて、顔を見るよりあら嬉しや、遺恨有る左衞門、咎に逢ふが殺されうが、往にがけの駄賃とやらん、今宵ぞ牢の破り時と、何の苦もなく脫出でしは、外に科を拵へて、誅せられんとの我念力、もう助けては政道立つまじ、急いで、我を誅せられよ。又兩眼を抉りたること、今鎌倉の繁昌、頼朝の威勢を見るに付け、二たび仇をなすまじと、思ひ捨てゝも凡夫心、見ずば怨みも起るまじと、頼朝を二たび見ぬ分別、未來遙々仇をなすまじ、恨みを殘さぬ心の誓ひ、抉り捨てたる兩眼は、頼朝殿へ景清が、今生未來の寸志ぞや。サア首打つて安堵あれ」と、首さしのぶれば頼朝公、「あつぱれ武士よものゝふよ、平家の恩を忘れぬ如く、又頼朝が恩をも忘れず、月日に象る兩眼を、我故抉つたる健氣や」と、勿體なくも御大將、御落涙ぞ有り難き。左衞門一人むくりを起し、「オ左程厭いた首ならば、左衞門がさらへ落し、牢を破られ取逃した申分にする」と呼はれば、餘りのことに御大將、兎角の御諚もましまさず。阿古耶悚へず、「あの言うた頬はいの、目の見えぬ人の首取つて、言分に成るか、手柄に成るか、阿呆くさい」と恥かゝすれば、「女房だまれ、岩永が手に合ふ者は盲目か躄か、子供ならで外には

なし。尤々、ならばサア首取つて見よ、梟鴟は土を團めて我子とし、海月は鰕を以て眼とすること、楞嚴經に有りと聞く。我其の如く阿古耶を以て眼とせん、後より我を介抱し、刃の向ふ其方へ、引き廻して教へよ」と、杖打ちふつて立上れば、「源五手傳へ、盲目とてぬかるな」と、左右に別れ切りかゝる。根井親子は景清に、緣有る顔を憚つて、餘所には知らぬ氣を揉上げ、心を冷して控ゆれば、十藏は又景清が、詞の意地を立てさせんと、留めず指出ず縛られながら、眼を配り、すはといはゞ飛びかゝらんと、打つ太刀先に氣を付けて、「そりや〳〵右よそれ左よ、拂へ薙れ」と辭を懸け、我手をもつて戰はぬ、心の刃のしのぎを削り、頭に上る息烟は、火花を散すごとくにて、瞬もせぬ程もなく、岩永主從太刀打落され、二人一度にしがみ付き、取つて伏せんと身をもがく。景清ちつともたぢろかず、二人が首筋兩手に摑み、ぐつと締むれば眼を見つめ、弱る所を取つて伏せ、膝にひつ敷き、一息ついだる心の內、嬉しさ譬へん方もなし。其隙に阿古耶立寄つて、十藏が縛切りほどけば、「なう〳〵景清、一人に二人は手柄過ぎる、岩永は我に吳れ」と、取つて引立て、「科は儕が心に問へ」と、首えいやッと捻切れば、景清悅び、「儕も主の供せよ」と、源五が首も一時に、ちよいと引拔き捨てたるは、手習子供の書捨てし、筆の首拔くごとくなり。十藏側への太刀押取つて大音上、「助けんと云

ふ君には君の情有り、打たれんと云ふ景清は、二君に仕へぬ忠義有り。中を取つて此惡七兵衛景清が腹切る上は、情も忠も是までなり」と、太刀を逆手に取直す。重忠御覽じ、「ヤア〳〵十藏、景清が事は此曉、洛陽清水寺の觀世音、君の御枕に立たせ給ひ、命を助け得させよと、御臺所も目のあたり靈夢を蒙り給ふ。それ故是まで御馬を出されたるとはよも知らじ。假にも景清と名乘つて生害せば、大慈の加護に背く理、名代の切腹、尤ながら無益なり」と止め給へば、「然らば御家人岩永を、手にかけ打つたる其誤、伊庭の十藏に立歸つて切腹せん」と、肌押しぬいで身繕ふ。賴朝扇を上げ給ひ、「やをれ十藏、左衞門を打つたる其科を糺明せば、安穩に腹切らすべきか。我此の曉景清を助けよと、觀世音の靈夢を蒙る、さればこそ左衞門が、盲目の景清に刃向ひしを制せんとは思ひしが、大慈大悲の擁護ある景清、やはか過は有るまじと思ふにたがはず、却て主從手にかゝりしは、景清十藏が殺すにはあらず、二人に千手の手を貸して、惡人を殺させ給ふ、是こそ還著於本人、經文あらたに誤なき、大悲の誓ひと覺えたり。然るを汝切腹せば、菩薩の勸善懲惡の、心にたがふ大惡逆、恐るべし〳〵。今より我に奉公し、譽れを末世に殘すべし。又景清は扶持すべき平家もなく、賴朝が祿も受けまじければ、飢に疲れん不便なり。兩眼は暗くとも、心ざしは日に向ふ、日向勾當の官を蒙り、剛染の平家を琵琶に語つて、片時も昔を忘るべからず。萬事は根井親子の者、宜しく計らひ得さすべし。箇樣に上下和すること、念彼觀音の御力、我が大慶是に過ぎず、いざ歸らん」と立ち給へば、夫婦兄弟箕尾谷父子、首を天地に平伏し〳〵、詞はなくて有難涙、伏拜み〳〵、君を傳き立歸る。佛道武道の助けとして、治まり靡く源氏の政道、萬々歲の末かけて、盡きせずつきぬ八千代の松、變らぬ色は吳竹の、節を重ねて葉も繁る、五穀成就民安全、治る國こそ三重目出たけれ。

壇浦兜軍記 終

加賀見山舊錦繪

頃は延文夏の空、鎌倉の官領足利持氏卿、六浦金澤山々の、獣狩あるべしとて、今日思し立つ朝霞、召しも定めぬ玉鉾の、草踏分ける武者草鞋、出立は君臣別ちなく、皆一樣に怪しの姿、並行く跡に勢子の者、あらゆる獣荷ひ連れ、豫て構への御休所、暫しと腰を掛けらるゝ。和田左衛門謹しんで頭を下げ、「今日の狩倉は近頃に覺えぬ獲物、君にも嘸御滿悅」と、申上ぐれば持氏卿、愈御機嫌麗しく、いざ折よしと紙崎主膳、御小筒盃を、取敢へず捧ぐれば、和田左衛門倶々に、打混じたる主從が、賤しき業を興とする、貴人ぞいづれ貴人なる。遙向ふの山合より、勢子に追はれし小鹿一匹、狩出さるれば持氏卿、「ソレ討留めよ」の御諚の下、紙崎はつと立上り、「アレ討留めよ源藏」と、あせれどハット平伏し、猶豫なす内一散に、子鹿は遁れ走り行く。持氏卿御機嫌損じ、「イヤコリヤ〳〵主膳、彼奴如何なる所存あつて我詞を用ひず、子鹿を遁せし其仔細、具に尋問ふべし」と、御氣色惡しくのたまへば、紙崎も不審をなし、

「末々の御奉公とは云ひながら、君恩に二つはなし。ヤア〳〵下郎め、御意を背き子鹿を射ざりし申譯仕れ」と、席を打つて尋ぬれば、ハットばかりに恐れ入つて居たりしが、稍あつて顔を上げ、「私事元は獵人、鐵炮達者とお聞きに達し、御足輕組へ召抱へられ、則ち今日も勢子の其中へお雇に選ばれ、只今子鹿見遁せし御咎、恐れながら一通り申上げん。私儀幼少より殺生を好み候へども、親たる者申置きしは、畜類ながらも生ある物、親を討たば子を助け、子を討たば親を助く、親子共討つ時は、根を斷つて葉を枯す不仁の至と、亡き親めが常々戒め、只今まで助け來りし所、今日只今恐れ多き君命とは申せども、止む事を得ず御諚を背きし身の罪科、遁るゝに所なし。御咎は覺悟の上、イザ御政法御行ひ下さるべし」と惡びれず、恐れ入つて申すにぞ、持氏卿感心ましく〳〵、「下郎には似合はぬ心底、奥床し賴もしゝ。鳥類畜類も恩愛の至極の心は同じ、父が詞の節を守つて命を背き、身の咎を顧みざる仁義の一言、感ずるに猶餘りあり。イヤ何紙崎、歸館なさば源藏に、早く褒美得させよ紙崎」と、仰にハット主膳がお請、面目餘る源藏が、悅びいはん方もなし。折もこそあれ遠見の侍、御前に頭を下げ、「京都將軍家の御執事細川殿、伊豆箱根二所權現へ御代參の歸りがけ、君の御遊を聞し召され、此狩場へ御入あつて、御内談の趣ある由、早速に御注進」と、言上申し立歸る。和田の左衞門取敢へず、「細

川殿には御一門同然なれど、御遊の裝束禮服に改め、御對面あるべし」と、申し上ぐれば持氏卿、實尤と諸士引連れ、「イヤナニ源藏には休息」と、仰も重く幔幕を、絞らせてこそ入り給ふ。程もあらせず此方より、行列美々しく出來るは、京都の執事細川賴之、御入なりと道芝に、各〳〵足を止むれば、幔幕の内より持氏卿を初とし、續いて出づる和田左衞門紙崎主膳、威儀を正して出迎へは、悠々として細川賴之、狩屋の床の設けの座、互の禮儀ことをはり、「此度義詮公御代參として、伊豆箱根に幣を納め、其道々噂を聞くに、先達て亡びたる赤松滿祐が殘黨、邊鄙の在鄕に隱れ住み、豫て事を計らふ由、下々の沙汰大方ならず。正しく君は義詮公の御連枝、鎌倉の柱石たれば、此事申上げん爲、道を過つて此狩場へ、態〳〵參上致せし」と、申上ぐれば持氏卿「先達て貴所の御息女操姫を、我弟縫之介に娶せよと、則ち養子と定められ、疾くより我方へ引取りしが、内緣ある此持氏、外ならず思召し、御内意の親切忝なし」と述べ給へば、此方も夫と打寛ぎ、「我娘操ごと、貴君へ差上げし事なれば、御心任せたるべけれど、誠意の上は遠からぬ中、婚姻の儀式御調へ給はるべし」と、親子の道の慈しみ、いづれ劣りはなかりけり。「オ、御尤なる御仰、近々に日柄を選み、弟が婚姻調へ申さん、御安心下されよ」と、事を分けたる御詞、賴之も笑を開き、「此上は赤松が殘黨の、其逆徒を治め給ふが

肝要たり」「ア、イヤ、其儀は豫て持氏思慮を運らし置きし所、斯く申す和田左衞門紙崎主膳控へあれば、日を待たず切鎭めん、御心安かれ」と、申上ぐれば頼之卿、「オ、各の忠勤も悉く言上申すべし。イザヤ歸館」と立ち給ふ、薫も深き武門の袖、花を比ぶる禮儀の形、大將はじめ並居る諸士、見送る行列小松原、緣榮ゆる君が代の、御遊の御狩勇しく、八十氏川の末廣き、譽ぞ高き　三重　久方の。

第二

五月半の花菖蒲、爰も名に負ふ東路や、梅澤村に足休め、茶店女房の器量よし、よしや葦簀の茶の花香、色を含みし優姿、折柄來る足輕の、源藏と見るよりも、「オ、こちの人、何としてござんした」「ホ、女房共、日和がよさに店出したな。若殿のナ、ソレ御内用、今日一日お隙を貰ひ、内へ往て見れば、店出してゐると聞いた故、直に爰へ出掛けて來た」と、聞くにお來は會釋して、此間は鹿狩で御用も繁く、休まんす隙もあるまい、今日ゆるりと休まんせ。コレ出花一つ」と汲んで出す、夫婦が中の濃茶なり。世を拗ねて、浮きつ沈みつ飄簞の、流れ渡りの畑介が、ぶら〳〵爰へ來かゝりて、互に夫と顔見合せ、「ホオウ畑介樣、此間はお物遠、ア何時がいつまで詰らぬ御身分、天竺浪人の其姿、些とお嗜みなされい」と、恥ぢしめられて、「サレバ其事、私も切身に鹽が染み、思ひ當つた今日此頃、志を改め、兄貴の勘當を赦して貰ふ一つの功を立てたいと思ひ、色々と工夫すれど、是を斯うとの分別も立たぬ、いかう凝つてめいつて來た、コリヤ内儀と二人差向ひ、しつぽりとエ、うまいな〳〵。ア、おらは樂しむ相手はなし、白犬なと抱いて寢て、こたつの代りにするがせいさい。今日はおれも腐れ拔きに、此梅澤に此頃仕出しの麥飯と出掛ける趣向、幸ひな所で逢うた。サア貴樣も一所におぢや往かう」「イヤ私は叶はぬ用事がござりますれば、お跡から參りましよ」と、いへば畑介早合點、「ア、コレ〳〵〳〵、皆までいうな込んだ〳〵、わりやら彼の白米を喰ふぢやな、爰は我等も大通を見知らし、先へ往てやらうが、仕出の所はアレアノ向ふの松、我等が色は眞黑な、麥飯嚊を賞翫」と、ちやり散らかして出でて行く。後にお來は吹出し、「ホ、、、、、モいつでも〳〵じやら〳〵いふお方であるはいナア」と、いふを打消し聲を潛め、「オ、其方は何も知らぬからぢや、今でこそ天竺浪人、實の所はサ誰あらう、御家老職紙崎殿の弟御、若氣の至り身持放埒、カノ堅藏の主膳殿の勘氣受けて流浪の身の上、御歷々ぢや程に、さう思うて此上とも。心を付けて物いや」と、聞いてお來が、「テモ扨も、水の流と人の行方、モウ能ういうた物でござん

す。ヤアほんに久振ぢや、氣晴しに酒なと買うて來うかいなァ」「ヤソレハ御馳走、ナコレ、とてもの事にソれ諸白を」「アイ、そんなら買うて來やんせう、德利は借りて戻らう」と、夫に一つもろはくの、酒屋をさして急ぎ行く。源藏は後打ながめ、「酒買うて來る其内に、久し振ぢや、産神へ參つて來う」と獨言、隣村へと出でて行く。世を憂しと、浮世の中を並々の、身には思ひの花姿、娘と見えて十八九、形も所體もしほたれし、生地の儘なる美しさ。「コレ申し父樣、今日初立の願解き、モウ此樣な嬉しい事はないはいな」と、親を思ひの優娘、心も對の容貌、聞く親の身は猶更に、「オウ嬉しい道理々々、常から其方の孝行、私が又今度の大病、生藥師の玄伯殿も、匕を投げた其所を、我身の精力、神佛の力ばかりで療治仕果せ、今日初立の神參りも、皆其方の介抱の蔭、其惠冥利とやらでも、何卒我出世の行末、祈るより外望とてはない。親の慾目と我ながら思へど、器量押立どこへ出しても屹とした御奉公人、見る影もない其形させ、ヘエ、口惜しい、無念なはいやい。貧の病は藥もなく、助けてくれる佛神の、力にも及ばぬか」と、喰を洩るゝ涙聲、聞くに娘も悲しさを、見せじと作る空笑顏、「アノ父樣の譯もない、愚痴らしい事いはしやんす。世の中の浮き沈み、昨日に代る今日の出世は、世にたんとある事なりや、氣をめいらした物でもない」と、親の心を慰むる、心遣の眼に涙、「さうぢやく、能ういうてくれたなァ。サアわさくと氣を活かして、明神樣へお禮申し、我が身が出世奉公口も、懇にお願ひ申す。サアくおぢやや」と親子共、いそくとして行く後へ、「オヽイオヽイ十内殿、浪人殿」と、うなり呼はるどす聲に、ハット思へどそ知らぬ體、行過ぎる間にすたくと、息を切つて、「コレ十内、イヤ爰なずるや先生、其耳をかつ浚へて、今いふ事能う臍の下へ聞いておくれ、先づ斯うぢやは。お身樣が長々の御浪人できつちくく、其中へ貴樣の大病、お娘一人が立つたり居たり、餘り見る目が氣の毒故に、此鷲の善六、世間が並の分相を減らして、五兩一分に二割の禮金、無利息のやうな安い金、人參代の五兩の金、元利積つて金十兩、おがら達の貴樣の内へ用立つた此善六、宛のない金は借さねば、コレ此お初を我等が目當、コレ十内殿、今日初立の其祝儀に、聟定の祝ひ事、サア一つ打ちませう、打つて下され親仁殿」と、髭撫上げてへし付ける。傍にはハット悲しさの、何と詞もなき入る娘。十内は膝すり寄せ、「イヤナニ善六、借りた金は借りた金、娘は娘格別の事、人參代の五兩の金で、娘の初を買切りにするのか。出世抱へた大事の娘、ならぬ事置いてくれ」と、老のいらくらずつかりと、いうては見れど命金、借りたは定のおろく涙。ソリヤ喧嘩よと人立の、見る目もさすが娘氣の、泣くより外の事ぞなき。善六は大息つき、「テモ扨も見掛

に似合はぬ肝太な親仁めぢやわいやい。死ぬる所を助けてやつて、まだ其上に恥面かゝされ、モウ夫で云分あるまい。是からは此方も意地づく、小判十兩ぽいとはさせぬ、お代官へ訴へて、お定りの手錠掛けさせ、夫で濟まにや願うて水牢、待つてをれ」と啖出す。「ナウ悲しや」と娘のお初、取付き縋り泣沈み、「お前樣の仰しやる事、無理とはさらゝ存じませぬ、父樣の大病で、今日か明日と思うた時は、假令此の身を賣つてなりとも、取留めたいと思うた所、お貨しなされた五兩の金、千萬兩の金よりも嬉しかつた其御恩、まだ其上に不束な、私の面倒見やうとある、お志の厚いお前、父樣は昔形氣、當人の私が合點すりや、どうなりとなるわいな」と、含む涙の流し目は、泣くよりもなほ哀れなり。善六は身中もぐにやゝ、臍の緒切つて初物の、色身臺白に指打ちくはへ、「アノ肝心のそもじが夫なりや、親父殿はわしが親、假へ此身は天秤棒で打叩きに逢ふとても、何の其厭はうぞい、善は急げぢや」と、引立てる腕もぎ放し、胸ぐら取つて「ヤイ善六、年端もゆかぬ子心にも、此親へ孝行と思やこそ、そもやそも我がやうな山猿と、夫婦となろといふわいやい。高が五兩で繫いだ命、俺も武士ぢや、今戻す金の代りに命をやれば、帳面はさらりと消ゆる」と、云ひも敢へず刀を腹、「ナウ悲しや」と娘のお初、縋り付いて止むるにぞ、「放せ」「放さじ」せり合ふ後、人立つ中を押分けて、商人風のじんとう親仁、十内が手をきつと押留め、「私や往來の者でござんすが、見まする所御浪人の、いかう御難儀な節と見えます。殊に又御病後とやら、お互に年寄は、只さへ家が古なつてゐりや、藥力も廻り兼ねる、其命を僅な金で死なうとは、ソリヤ御麁相、お近付ではなけれども、娘御のアノ孝行、貞節な今の樣子、御笑止に存じます。持合せた金子十兩、コレお貸し申す、御出世の上御返しなされ」と、詞と共に懷中より、取出したる小判十兩、「サア御返金なされよ」と、突付けられて親子は只、夢見し心地嬉しさの、何にたとへん樣はなし。十内は地にひれ伏し、「剛染好みもなきお方、御恩の金も此場の難儀、御辭退なしに拜借」と、ずつと立つて、「コレ善六、借用の金十兩、返濟すれば言分有るまい。借用證文イザ返せ」と、投付けられて善六が、工面の違ふ膨れ面、不承々々に懷より、一通を取出し、「ソレ借證文返してやります。ハテ扨物には變のある物、見ず知らずの通り違ひに、金十兩貸してやるとは、世には又樣々な醉狂者もあるもの」と、金請取つて懷手、のつかゝと出でて行く。跡に親子は詞さへ、涙に噎び手を支へ、「只今も申せし通り、見ず知らずの我々親子、大難を救ひ給はりし、御恩は何と報ずべき。ヤイお初よ、俱々にお禮申せ」と親も子も、骨に徹えし悅び涙、只伏拜むばかりなり。「アヽ、コレ、其樣に何のマア、お禮に及ばぬ事、先何か差置いて

是を御縁、お近付になりませう。我等事は船ケ谷の米問屋、坂間傳兵衛と云ひます者、親の代から仕合よく、今鎌倉の分限帳にも、乗つてある我等が身代、自慢ではござらぬが、十兩や二十兩お取替へ申したとて、さして困る身分でもなし。私が娘も三年以前、お出入屋敷足利様の奥御殿へ、御奉公に出ましたが、お氣に入つて今お中老に出世しました。子を持つた身は相互に、娘御の孝行なに、私は泣いてゐましたわいの。不躾なことながら、此體でござつては、奉公口の出世も出來まい、慮外ながら一二年、私が娘にお預けなされ、勤方見習うたなら、私が世話して屹とした、御奉公人に仕立てて見せませう。入らぬ世話と思はしやろが、アノ娘御の孝行な心に、縁でがないとしうなつて、胸一杯をいうて見ます」と、奥底もなき眞實は、涙に夫と見えにけり。十内は只伏拜み、嬉し涙の隙よりも、威儀改めて兩手を支へ、「重々厚き御恩の程、娘が身の上まで、殘る方なき御恵み、此方より願うてなりとも、御恩報じの御奉公、望むところの幸ひなれば」「ム、スリヤ得心でござりますか、マア早速の得心で、私もいかう嬉しうござる。日柄選んで些とも早う」と、さくい詞に娘のお初、「旦那様のお情、死んでも忘れ置きませぬ」と、いふも恩義の初一念、さらばとばかりそこ〳〵に、東西へこそ別れ行く。端手な取形抱へ帶、ぬめり姿も白絖の、古今帽子もしをらしく、遣それ者の道芝は、手越の宿の太夫職、禿ども引連れて、茶店の元に歩み來る。立歸る源藏夫と見て、「是は〳〵道芝様、思ひも寄らぬコリヤ何處へ」と、尋ねられて飛立つ思ひ、源藏が胸ぐら掟と取り、「オ、好い所で逢ひました、エ、お前は聞えぬお人、縫之介様も此頃は、曲輪へお越しない故に、お前頼んだ日文の返事、なぜ取つては下さんせぬ。逢ひたい見たい願參り、日頃念ずる長谷寺の、觀音様へと志し、頼みに思うたお前まで、聞えぬ仕方胴慾」と、恨み詞に、「サ、、、、尤ぢや尤ぢや、是には段々咄しのある事、コリヤ繁野、其人達を連立ちて、そこら一遍歩いて來い」「アイアイそんなら太夫様、向ふの堤で遊んできやんしよ。サア〳〵ごんせ」と打連れて、足早にこそ急ぎゆく。道芝は心急き、「咄したい其譯を、早う聞かして下さんせ」と、せり立てられて、「サ、、咄さねばならぬ譯といふは、此度京都義詮公の上意として、細川家の姫君と御祝言なさるゝ筈」と、聞くより吃驚り、「エ、、そんなら御姫様と御祝言なさるゝかえ、アノ祝言を。エエ腹の立つ〳〵〳〵、コリヤ何せうぞいな〳〵。アヽコレ〳〵何せうぞい〳〵〳〵」「サ、、サマア氣を緊めて聞いたがよいわいの。併し若殿様はお前に義理を立て御承引なき故に、兄君持氏卿の御立腹、やつさもつさの其最中、此譯の納るまでは、曲輪通ひの御遠慮」と、聞くに猶更戀の意地、「エ、縫様も張の弱い、そこをぐつと押したがよいわいな。殿様と私が中は、お

前も知つてござんす通り、突出しの初より、互に變るな變らじと、云交したる二人が中、祝言さすこと私やいや〳〵、縫様のお傍に居たい、連れて往て下さんせ」と、粋な育ちも色の道、愚痴の涙ぞ誠なり。「オ、腹の立つは道理ぢやく、さりながら、お前を館へ連立つては、夫こそは亂騒ぎ、コレ今暫し辛抱なされ」「イエ〳〵斯ういう内も氣遣な、早う行きたい、サア〳〵連れて往て下さんせ、是非に〳〵」と氣を苛ち、里氣の儘の疳癪は、留めかねたる折からに、お來はとつかは戻りがけ、見るより吃驚、德利はつたり取落し、二人を押分け源藏を引立て、「コリヤ我をれ、俺を酒屋へ出し抜いて、アノ女とこつてりちん〳〵、エ、マ憎體らしい男面」と、叩いつ喚く間違悋氣、源藏をかしく、「エ、何吐かす、コリヤやい、アノ女中は」と、いふを打消し、「イヤ〳〵〳〵古手な云譯此方や聞かぬ、マ厚皮な女面、どんなお顏ぢや見てやらう」と、背けし顏を差覗き、「どうやらこな様は見たやうな」「私もお前は見たやうな」と、いふにお來は心付き、「もし稚名はお宮とは云はぬかえ」「アイ宮と申しましたが、稚名を知つてござんすお前は」「オ、コレ姉のお來ぢやはいの」「エ、姉様か」「妹か、ヤレ懷しや〳〵」と、取付き縋り姉妹は、嬉し涙にくれ居たる。源藏は不審晴れず、「コリヤ女房、太夫様を妹といふ子細は何ぢやぞい」「サウ様子知らしやんせねば合點が行くまい、此お宮が九つの年、私が大病の物入、父様が此子をば、手越の宿へ賣らしやんして、今の名は道芝と、其名をば聞いたれども、逢ふ事ならぬ曲輪の掟、懷しう思うてゐたが、久しう見ぬ間に、オ、好い太夫様になりやつたなう」と、いふもおろ〳〵涙聲、さすが親身の挨拶に、道芝も打萎れ、「思ひがけなき御目もじ、父様にも御息災なと、餘所ながら聞きました。お前も御無事で嬉しうござんす。源藏様を私が妹聟とは、知らぬ事とて澤山さうに、堪忍して下さんせ」「アイヤ〳〵互に知らねば其筈其筈、道理で面ざしが似たと思うた。若殿と云交したお傾城が、賤しい女房の妹といふ事が、お耳へ入つては爲にならぬ、必ず此事沙汰は無用」「アイ夫は互に隱して濟ますが、濟まぬは祝言、縫之介様が眞實お姫様を嫌はしやんすが定ならば、私を館へ連れて往て、お傍に置いて下さんせ。さうない内は何程でも、疑ひは晴れませぬ。姉様倶々宜いやうに、賴みまする」と涙含む、眞實見えて道理なり。「ウ、其方の身の出世ぢや物、何の如才があろぞいの。コレ源藏殿、何卒思案はないかいな」と、いふに暫く差俯き、「ハテ其様に疑はしくば、お館へ入れる工夫、萬事は私が胸にある。若殿と牒し合せ、明日に迎ひに行く程に、さう思うて待つたがよい」と、聞いて心もいそ〳〵と、「アイ〳〵〳〵、そんなら曲輪へ戻つて待つてゐるぞえ。繁野々々」と呼ぶ聲に、アイと返事も長啜、男も倶に立戻れば、「イヤ女房共、畑介様が嘸ぞ待つてござら

う、俺やちよつと往て來ようかい。ヤ道芝、是でお別れ申しまする」「そんなら必ず姉様、ではない女中様、モウお暇申しまする」「そんならモウお歸りか、隨分健で煩はぬ様にお勤」おさらばさらばと盡きせぬ名殘、互に見返り見送りて、手越の里へ返りけり。かゝる折から持氏卿、忍びの御遊を輕々と、御乘物に召し給ひ、道を拂うて出で來る。お來はうつとり近習の侍、「ヤア女下れ〳〵」「はい〳〵私は此茶店の者、殿樣の御通りも存じませず、不調法の段は眞平御赦されて下さりませ」「イヤサお通りのお目障り、片寄れ退れ」と引立つる。「ヤア〳〵者共暫く待て、其女に用事あり」と、仰にハッと近習の武士、威儀を正して控へゐる。持氏殿は徐々と、床几を假の御設け、悠々と御腰掛り、お來が容儀に愛でさせ給ひ、「コリヤ〳〵女、其方や此茶店の者よな、かゝるいぶせき所に似合はぬ、ハテ艶かなる縹致、某も不思議の緣、其方が手づから茶を持てやい」「ソレ〳〵銀のお茶碗」「コリヤ〳〵其茶碗では氣が替らぬ、やはり茶店の其茶碗、早う〳〵」とありければ、「夫早く持て〳〵」ハッと恐れて立上り、氣もわく〳〵と涌く茶釜、嗜茶碗淸水燒、茶臺に乘せて恐々と、面映げにぞ差出す。茶碗取上げ持氏殿、御機嫌よく打笑み給ひ、「ホ、天晴なる茶の香氣、ハテ偖遠目に見るよりも、猶美しき此花香、ヤソレ乘物の歌書持て」畏つて近習の武士、取出し差上ぐれば、挾みし枝折を取らせ給ひ、「古へ西行法師が芳野にて、花の名所を求めんと、幾重の山に分入りしに、道を尋ぬる人もなく、案じ煩ふ道芝の、木草に付けし白紙を慕ひ、花の名所を得たりし時、芳野山、去年の折枝の道かへて、まだ見ぬ方の花を尋ねん、夫より是を折枝と號く。今某が名も同じ、此花の姿に迷ふ道しるべの此枝折、ナコリヤ、サ合點が行たか」と古事を、花に擬へし御戯れ、差出し給へば、お來は夫と推量し、ハット驚き恐れ入り、「ハア、勿體ない恐れ多い、賤しい私がお茶の給仕、御褒美のお詞、又賤しい此花お手折りなされんとの御意、冥加ないと申しませうか、有難うは存じますれど、此花も主ある梢、折取ることは憚りながら、お赦されて下さりませ」と、恐れ入つたる詞の端、「ム、扨は其花には主あるとな。たとへ花守あるにもせよ、某が心の儘、根引にし館へ移し、詠めるは易けれども、木折にせんは無下なるべし。サとくと思案し返歌せよ」と、仰せに何とゆふひ影、やゝ時移る其所へ、紙崎主膳しづ〳〵と、家來引具し謹しんで、「今日京都入り上意の趣出來、御迎ひの爲參上仕る」「ホオ、紙崎大儀々々。ヤナニ女、必ず返歌を待つ」と、御乘物に召し給へば、近習若黨備へを立て、徐々と歩む後備へ、紙崎は訝しく、女に屹度目を付けて、心の要緊めて行く、扇が谷のお館へ、御供申し急ぎゆく。お來は跡を詠めやり、思はずほつと溜息つき、「テモ扨も悲哀な事、そして辛氣な物を貰うた」と、屈托

半へ夫の源藏、戻りかゝつて一思案。「オ、好い所へ戻らんした、コレマア聞いて下さんせ」「オ、樣子は皆知つてゐる。ヤ女房共、其方に談合する事がある、聞いてくれるか」「エ、改つた事云はしやんす、マア何でござんすえ」「イヤ少し思ふ子細あれば、暫の中親里へ往んでたも」「エ、夫やマア如何して、其譯は」「サ、、樣子云はねば驚きは尤、知りやる通り足輕位の切米では、いつかな出世の時は得ぬ。心當は、都へ立越え、奉公に有付けば、其時こそ立身出世、聞分けて給も女房」と、思ひ込んだる夫の顏、譯を知らねば氣にかゝり、「ム、コリヤ如何でも深い心入れ、コレ女房の私に何に遠慮、なぜ言うては下さんせぬ」「ハテ其譯は後で知れる、得心して早う去ね」「イヤ〳〵譯を聞かねば何程でも、去ぬる事は私やいや〳〵、樣子を聞かして下さんせ」と、縋り歎けば、「エ、聞分けのない、夫が出世の妨せば、夫婦の緣を切らうか」「サ、夫は」「得心したら早う去ね」ハア、はつとばかりに胸迫り、暫し涙にくれけるが、良あつて心付き、オ、夫よ、思ひ廻せば廻す程、私は爰にゐられぬ品、知つて夫がそれぞとも、云はれぬ譯ゆゑ親里へ、身を隱せとの事なるかと、いはず語らず心で納め、「成程是から直に親里へ往にまする、あり付き次第、無事の便りを聞かして下さんせ」「オ、能う合點した、委細は早速知らせの狀」「必ず待つて居ますぞえ」「隨分健めで」「お達者で」と、互に包む胸と胸、明けていはれぬ暇乞、涙にくれの鐘の聲、空に知られぬ五月雨や、泣別れてぞくする。

第三

爰に鎌倉の守護職、管領足利持氏卿、三老と倶に、民の裁斷聞こし召されん其爲に、問注所に御入りあれば、相詰める人々には、老臣仁木將監、和田の左衞門紙崎主膳、其外昵近御傍衆、威儀嚴重に見えにけり。將監人々に打向ひ、「先達て京都よりの嚴命下り、細川家の御息女操姫樣を、我君の御舍弟縫之介樣に云號け、則ち御養子分になされ、疾くより館へ入らせ給ひ、かやう祝言甚だ延引。よく〳〵聞けば縫之介樣、當所手越の傾城にうツ惚れ、姻禮御承引なしと一家中の取沙汰、何にもせよ、取急ぎ御祝言調はずば、上意を背くの恐れあるべし」と、苦り切つて申すにぞ、紙崎は差寄つて、「何れにも評議の上、先は御前を伺はん」と、皆打連れて奥の間へ、徐々立つて入りにけり。廣間もひつそり夕日影、奥より忙しき袴の音、大將の御舍弟縫之介、何かは知らず小姓が胸先、引立てて突飛し、「今日目見えした小姓の噂、よく〳〵見れば其方、コリヤヤイ道芝、形を窶して入込んだは、此館に云交した男があるに極つた。サ

ア其名を言へ〳〵。此縫之介より外、枕は交す者はないと、能う儁をいうたな。放埒者徒者、人外め、手打にする覺悟せい」と、腹立聲に道芝は、恨めしげに顔振上げ、「エ、殿様胴慾な、過ぎし頃より御館に、免れがたき事ありと、只た一度の文使ひ、夫から頓と使なく、逢はぬ日數も七夜さ十夜さ、待明かしても晝さへ暗き胸の中、逢はれぬ事に定まらば、いつそ死にたいお手打に、遇ふがせめての思ひ出」と、身を摺寄せて恨言、眞實見えていぢらしき。「スリヤ俺に逢ふばかりで、小姓姿に扮したか」「アイ、何時も御供の源藏殿に打明けて頼んだら、此様に男に仕立て、目見えとやら嘘いうて、私や爰へ來たわいな。お前に逢ひたいばつかりで、女のあられぬ此姿、思ひやつて下さんせ」と、抱付いたる涙には、いかな大名高家でも、ほろりとさせる睦じさ、哀は後に知られけり。最前より物陰に、將監が窺ふとは、夢にも現縫之介、「まうよい〳〵、夫で疑が頓と晴れた。是から居間へ連れて往て、此間から懈怠した、用かたんと支へてある」と、手を引連れて立上る。奥の方より操姫、立出で給へば二人は恟り、俄に行儀押繕ひ、「ホオ、是は〳〵操姫殿、何用あつて爰へ御出」「ハイ、いや申し殿様、あれに居るは見付けぬ小姓、御召使でござりますか」「オ、夫々、アレハ今日目見した新參者ぢや。コリヤそこに居る新參の小姓よ、ナ、こりや小姓よ」「小姓ぢやわいの」「ム、貴君のお傍使ひなら、

何の遠慮に及ばぬこと。イヤ縫之介様、今更申すに及ばねど、義詮様の仰には、お前と私は云號、疾うから此館へ來て、朝夕お傍に暮せども、遂に優しいお詞は、露ほど受けぬ情なさ。愚痴な愚鈍な身を悔み、よるべ初瀬の神祈り、肝腎儀式の新枕、いつ祝言がある事やら、月日を指にをり〳〵は、泣いて暮してをりまする」と、恨涙に暮れ給ふ。「そんならあなたが云號のお姫様、疾うから來てござるかえ、そんな事であらうと思うた、エ、餘りぢや〳〵、能う私に隱さんした、エ、腹の立つ〳〵」「コリヤ〳〵新參の小姓ぢやない、お前と深ういひかはした、道芝といふ傾城ぢや、此方やだんない〳〵。サアサア曲輪へござんせ」と、縫之介の手を取れば、「イヤ〳〵そんな慮外はさせまい」と、姫も取付く諸葛、彼方此方に引き纏ふ、後に立聽く仁木將監、「操姫様御待ちあれ」と、聲に恟り三人は、手持無沙汰に見えにけり。「コレハ〳〵縫之介様、此將監には何事もお隱しなさるに及びませぬ、此お小姓は私預り、品宜しく計らひます。お姫様と諸共に、奥の御殿にお出でなされ」「アイヤ斯うなつてはモウ隱さぬ、此姫を嫌ひはせねど」「サア〳〵合點してをります」「夫でも祝言はならぬ〳〵」「是は扨何とお聞きなさるよぞ、おいやならいやに致しますてや」「そんなら道芝は其方にきつと預けたぞ」「御安堵なされ先々奥へ、早う〳〵」と進められ、心は先

へ道芝が、後にといふを目で知らせ、是非なく奥へ縫之介、姫諸共に入り給ふ。廊下の方より足音して、持氏卿御出ざふと呼はれば、小姓を側に將監は、禮儀正しく控ゆれば、立出で給ふ持氏卿、寛仁柔和の御骨柄、續いて出づる和田紙崎、御側小姓が御酒盃、中央の間に座し給へば、仁木將監取敢へず、「先刻仰付けられし新參の此小姓、とくと窺ひ候處、姿を扮せし女にて候」と、申上ぐれば一座の恂り、和田左衞門つッと寄り、「女を男の姿に扮し、御館へ入るゝこと怪しみの第一、屹と吟味遂ぐべき事」「アイヤ〳〵、將監そこらは脱りませぬ。今朝入込みし此小姓、合點行かじと思ふより、態と奥へ通せしが、御舍弟縫之介様を戀慕ふ此女、さるに依て云號を嫌ひなさるゝ、若殿の其病の根は此小姓」「イヤ將監殿お待ちなされ、姫をお嫌ひなさるゝ事聞きも及ばぬ」「アイヤ麁相は申さぬ、元來物を諂ひ飾るは、此將監嫌ひ物、ありの儘に申すが實儀、扨々お笑止千萬」と、芥掻出す舌先に、根ざしありとぞ見えにけり。持氏卿氣色を正し、「弟縫之介事は追つて沙汰に及ぶべし。最前遠目に見たる小姓、ソレ目通りへ」と仰の中、アイとおめたる氣色なく、御前へ居直れば、「コリヤ女面を上げよ」と、ためつすがめつ持氏卿、「其方は梅澤の茶屋で逢うたる女ではないか、ハテ麗しい。まだ見ぬ花を尋ねんと、古歌を書いたる文の枝折覺えつらん」「オヽ殿様の何を云はしやんすやら、

そんな覺はないわいな」「ムヽ、小姓に成つて入込みしは、其方が物好か」「テモいろ〳〵な事問ふお方ぢや、縫様に逢ひたさに、足輕の源藏殿と連立つて來たわいな」「何足輕の源藏が連來りし女とや、將監に吟味させん、其源藏を呼出せ、早く〳〵」とのたまへば、ハッと近習は立上り、間毎に傳ふる聲々に、まだ目にも見ぬ奥御殿、初めて上る縁側傳ひ、恐れ入つて平伏す。將監聲かけ、「ヤァ〳〵源藏、今呼出したは別儀でない、是に居る小姓、見覺えて居ようがな。イヤサ女を小姓の姿に窶し、お館へ入れたるは、其方が所爲であらうがな」「ハァヽ、成程、今朝あの女中が途中で私を呼びかけ、此お館の殿様に逢ひに行くのぢや、連れて往てくれいとある。此御殿の殿様とあれば御前様、何憚る事はなけれど、端手な傾城の姿で、御殿へ通つたと噂があつては、何やら惡さうな事ぢやと存じ、お小姓の姿に扮し、御目見えにして這入らせました。下郎の私、味行つたと存じましたが、不調法になりましたら、憚ながら幾重にも、御免を願ひ奉る」と、恐入つてぞ見えにけり。持氏卿打笑み給ひ、「傾城が戀慕ふを、此持氏と心得、世上の聞えを思ふは神妙、見所のある下郎、小姓ども源藏に酒をくれよ、それ〳〵」とのたまへば、銚子盃三寶を縁側に差置いて、「有難き御意の盃頂戴致せ」「ハハァヽ、イヤモ有難いと申さうか、冥加に餘る御意の程、給べまするは猶慮外」と、三寶の御

盃、押戴きく〳〵懷へ納むれば、持氏御機嫌麗はしく、「ヤァ〳〵將監、先刻申付けたる事、いよいよ評議糺すべし。又源藏には用事あれば、暫く夫に控ゆべし」と、御諚の下に次の間より、遠侍罷り出で、「北の方より御使として、局役岩藤中老尾上、お次まで參上、通し申し候はんや」と、伺へば持氏卿、「ホ、オ兩人共是へ通せ、イザ疾く〳〵」と仰に連れ、軈てかくとぞ云ひつぐる。花の香の、隙洩る風に送られて、徐々出づる長廊下、遙下りて手を支へ、「北の方樣の御口上、今日は問注所へ御入り遊ばし、御政道の御評議是ある由、嘸かしお氣詰、右御伺ひとして局岩藤中老尾上參上」と披露につれ、持氏卿も御悅喜まし〳〵、「オ、兩人共大儀、二人の使者の饗に、此傾城は奥へ連れゆき、花月の間で一獻酌まう」「アイ縫樣のござる所へ、連れて往て下さんせ」と、憚る色も中々に、小姓姿をほら〳〵と、我君に引添へば、諸士は頭を下げ簾や、帳臺深く入り給ふ。後は窃と物音も、何かは思案の三つ鐵輪、緣側には源藏か、退屈顏にきよろ〳〵と、欠伸を隱す折柄に、奥より使のお側小姓、恭く白臺に、三つ盃を取載せて、評定の間へ差出し、「我君只今酒宴の中、各へ仰出さるゝは、武門の大將、常に忘れず樂しむべき物は何なるぞ。銘々此盃に書留めて奉れ」と、謎をかけたる御上意に、皆皆ハッと領承し、盃手ん手に硯箱、筆とり上ぐるもまんがちに、初筆は將監慾深く、金銀の

文字書付ける。紙崎主膳が賢人と、書いた心は賢きを、登げて用ふる君子の道、次には和田が國の字を、書きしも常に大將の、下を憐む仁者の道、各臺に直しける。源藏は伸上り、「申し申しどなた樣も憚りながら、私も些とばかり思はくがござりますが、幸ひ最前お上から下された此盃に、書いて上げたう存じます」と、ほつかりいへば仁木が引上げ、「ホ、コリヤ出來した、御機嫌に入つた其方、却つて興を催す事、存じ寄りの文字を書き早く上げい、赦す赦す」「ハ、有難し」と源藏は、飛立つ氣色懷の、矢立取出し疾く〳〵と、書認めて盃を、評定の間へ差出せば、左衞門は手に取り上げ、「ム、是は酒といふ文字、武門の大將常に樂しむべき物に、酒といふ字は甚だ不遠慮、御憤りの恐あれば、差控へよ」と止むれば、「ア、イヤ申し申し、憚ながら私が心は左樣ではござりませぬ。關八州の公事裁判、御一人の御思慮より、御政道を行ひ給へば、お氣の結ほれは知れた事、御鬱散遊ばすこと、お藥の廻りより、直に驗のある御酒の德、世の譬にも酒の事を、愁を拂ふ玉箒とやら、兎角に御身健に、御養生は酒の一德、御無病なを肝心と、酒の文字を差上げます」と、當座の頓智に小姓達、源藏が書いたるも、君の興に差上ぐれば、四つの盃とりぐに、御殿をさして入りにける。後は三人聲潛め、御舍弟のお身の上、納りいかにと評定の、表の方より溜りの侍、罷り出で兩手を支き、「仁

木様へ申上げます、相摸八郡の郡代共、御願ひの筋あつて、直に御對面申したき由、大勢伺候仕る、如何はからひ申さんや」「ナニ此將監に直談せんとや、暫く次に控へさせよ」ハッと答へて取次が、表へ急げば御殿より、御側衆立出でて、「只今のお盃、上覽に入れし所、酒の文字を書いたるは、御身の養生、源藏が發明以ての外御意に入り、向後侍に御取立、緣側の間を勤むべしと、上下大小を下さるゝ」と、臺の物差置けば、三老共に物をも云はず、源藏は惚り顏、「下郎の私勿體ない、御赦されて下さりませ」「イヤ辭するに及ばぬ御上意ぢや、御意ぢや〳〵」と小姓達、手々に著せる上下も、どてらの上へしやつきりぐわつたり、恐々紐の緊括り、差しこなしたる業物の、しやんと居直る袴振り、「此通りを言上」と、使は奥へ急ぎ行く。紙崎は目も掛けず、「只今申せ　御舍弟縫殿、御身持放は、傾城が根ざしなれば、此根ざしを打切つて仕舞ふより外はない」「オヽ此左衞門も其通り、仁木殿如何致さう」「サレバ〳〵、傾城をさつぱりと、打斬つて仕舞ふも近道、此儀は御兩所いか様とも、勝手次第」と意地ある詞、源藏はつッと寄り、「お見出しに預つた私、甲に著て申すではござりませぬが、傾城をお斬りなさるは、大根を切るより易けれど、最前から見受けまするに、あの道芝は持氏卿の御機嫌にも入つてあり、第一は傾城がお手討になるやいな、世上へぱつと沙汰廣がり、縫之介様の御放埒が、我君の不德と成つて京都へ聞えし時、取返しは成りますまい。此道芝が納め方、私にお任せ」と、いふに將監横手を打ち、驚き入つたる源藏の計らひ、尤至極致した」と、此評定も源藏が、主君へ盡す忠義なり。重ねて奥より御傍衆、「將監様へ御上意あり、只今源藏が評議上聞に達せし所、忠節の趣なれば、我君甚だ御感あつて、只今より苗字を赦し、大杉源藏と名乘り、評定の間を勤め、知行座席も各〻同格、則ち衣服長袴、下し置かるゝ者なり」と、高らかに相述ぶれば、和田紙崎は口を閉ぢ、取持顏の將監も、呆れ入つたる氣色なり。大杉はつと白臺を、押戴けば小姓達、「イザ召されよ」と立ちかゝり、又著せかへる褒れの公服。同じく奥よりお側の使、「左衞門殿御上意あり、紙崎主膳こと、先達て光明寺の普請、只華美を表にして、役目の實儀を失ふ越度、續いて今日傾城を刑罰して、我に恥辱を與へんとしたる短慮の至り、只今より評定の間を下り、緣側を勤めよとの仰なり」と、聞いて惚り紙崎主膳、差俯むいて詞なし。やゝありて面を上げ、「委細畏り奉る、又改めて拙者が願、御取次頼み入る。大杉殿は才智を以て高祿を給はれど、氏系圖正しからず、仁木和田、此の主膳が家柄は、三老の格式にて、奥御殿を相勤める。大杉殿には此評定の間を限り、奥御殿の出仕を御無用になし下されと、我君への御願」と、詞を殘し徐々と、緣側の間へ引退り、どつかと坐せば件の使、言上せんと立つて行く。黑付惡

き左衛門も、無念隱して將監と、倶に大杉同座の禮儀、評定の間へ控ゆれば、此方も詞改まり、水際立ちし受答へ、取りぐ〳〵挨拶ある所へ、當番の侍罷出で、「先刻申し達したる、相摸一國の郡代、將監樣へ直談の御願、今朝より相待ちをります」「ホ、郡代が願ひ裁判をして取らせん、只今是へ通すべし」と、將監が計らひに、相摸の郡代打連立ち、庇の間に畏り、郡代頭罷出で、「此度光明寺普請成就に付き、我々が領分は仁木殿の御支配故、大磐若經料として、高割の金子出すべき旨、先達て仰付けらるゝ所、領内へ屹度申付けしが、先年建長寺造營の節、經料出金致したれば、此度は御赦免と、領分の百姓ども我々が屋敷へ詰めかけ、歎きの願ひ一統す。權を以て押す時は忽ち事亂れ、いかゞ計らひ申さんや。仁木公の御意次第、我我も覺悟あり」と、思ひ込んだる願の筋、將監苛つて居丈高、「ヤア慮氣たる郡代共、百姓に欺されて、臆病風の腰拔武士、此將監が一旦申出せし事、違變あらば其方共、一々に首を刎ね、梟木に暴さん」と、睨み廻して罵れば、郡代共詞なく、事しらけてぞ見えにけり。大杉は立上り、郡代に打向ひ、「仁木殿の詞も立ち、其方達が百姓を憐む心も立つやうに、此大杉が差圖致さう」「ハ、有難き仕合、雙方治る御仕法は」「ハテ何の別の仔細はない、先づ百姓へ經料の金子、赦し遣したがよからう」「ハテ百姓へ赦し遣し、仁木公への申譯は」「ハテそこに又手段がある、八郡の郡代知行、當年分一つに束ね、我君へ差上げられい」「何、銘々が當年の知行をな」「イヤサ驚くは未熟の至り、百姓を憐む所存ならば、身を捨てゝ武士道の、器量を出すは爰の事、何と得心が參つたか。將監殿の仰も破らず、百姓の心も養ひ、雙方治る武士の器量、天晴々々。身不肖ながら、此の大杉が申し受ける知行を以て、八郡の郡代へ褒美として分ち與へん、安堵召され」と押付けて、人の器量に仕立て上げ、事を治むる大杉が、器量の程ぞ類なし。郡代共平伏し、「ハ、有難き大杉樣、御褒美どころではござりませぬ、武士の誠を道引きなされ、八郡の鑑と致さん。ヤ仁木將監樣、當年分の郡代知行、經料に差上げます」「ホホ夫では此二木も大慶」「ハ、私共が譽れを取る、師匠は卽ち大杉樣、暇申して百姓共に悅ばさん」と郡代は、勇み立つてぞ歸りける。又も奥よりお傍の使、評定の間に立出でて、只今の決斷上聞に達し、大杉殿に御上意あり、我祿を捨てゝ國を治むる大慮の程、感ずるに餘りあり。今日より老分の役目として、中央の間へ出勤すべし、則ち烏帽子大紋を、此印に下さるゝ」と、臺の物差出し、「又主膳殿に御上意、其身の不才を顧みず、源藏を奥御殿へ入れまじとの願の條、不屈至極の次第なれば、「大小を取上げ、門前より追拂へとの仰なり」と、聞いて遁の紙崎も、驚く顏色大杉には、又著せかへる勳の、幅も大紋立烏帽子、中央の間へのッしのし、峯に

朝日の登るが如く、主膳は濡縁側の、麓に曇る村雨と、ふりゆく身こそ是非もなき。大杉は大紋の、袖かき合せ聲涼しく、「ヤア〳〵紙崎主膳殿、我匹夫よりかゝる立身、貴殿には君の御勘氣受け、目前天地と別れども、榮え衰ふは世上の常、數ならねども此大杉、御前惡しくは計らふまじ、暫しの艱苦凌れよ」と、いへど主膳は答なく、表の方へと立上る。將監は罵聲、「ヤア〳〵原田軍平早く參れ、ソレ紙崎主膳を追拂へ。イザ大杉殿、改めて我君へ御目見」と、左衞門諸共打連れて、前代未聞の出世の袂、飜してぞ入りにける。始終の樣子最前より、尾上は一間立出でて、あたり見廻し紙崎が、傍へ立寄り聲を潛め、「樣子は殘らず承りました、忠臣無二の貴方樣、御勘氣の此上は、心元なき御家の有樣、行末とても覺束なく、案じ彌增す世の中や」と、末賴みある詞の端、「オ、優しくも申されたり、元町人の其元なれども、今中老とお取立て、其忠臣の魂見込み、賴み置きたき一大事、伯父大膳を初め、方人の仁木將監、花の方御親子を追ひ失はん謀、何卒貴所の忠臣にて、二方の御身の上、偏に賴み存ずる」と、忠義に凝つたる武士の、低頭平身なしにける。折から出づる奥使、尾上が前に手を支へ、「只今御出でなされませとの、仰せられでござります」「オ、岩藤樣よりの使とな。イヤ申し主膳樣、最前奥にてお局の懷中より落ちし密書、拾ひ置きしも詮議の手がかり」「成程々々、心善

からぬ大膳岩藤、あの兩人が立振舞、某に成替り、隨分心付けられよ」と、云はぬ色なる武士の、別れてこそは立つて行く。奥の方より大杉源藏、道芝を小手縛り、抱への帶を猿轡、引立て出づる足音に、縫之介も走出で、「ヤア新參の大杉源藏、其傾城を何とする」「イヤお騷ぎなさるな、道芝に繩を掛けたは、私ならぬ君の仰せ、細川家のお姫樣と御婚禮なさるゝならば、此傾城は拙者が計らひ、市中に隱し置き、誰れ憚らぬお妾樣、サア御得心か。御承知なくば道芝は、今此座にてたつた一討」「ア、コレ〳〵滅相な、夫斬つて堪るものか」「スリヤ御祝言遊ばすか」「サア夫は」「御承知なければ暇乞、サア〳〵〳〵」に口籠り、應とも否とも云はれぬ手詰、道芝は恨めしげに、見上げる目には腹立涙、只伏沈むばかりなり。大杉刀抜き放し、今が最期と振上げる、刀の下に縫之介、「ヤア〳〵待つて〳〵」「待てならば速かに、お受の返答承らん。如何に〳〵」と手詰の折柄、當番の侍あわたゞしく、「今日晝の見廻りに、何者とも相知れず、寶藏を切破り、繼目の御綸旨失せ候、早速注進仕る」と、息を切つて言上す。ハツと驚く縫之介、「我が預りの御綸旨は、何者が奪取りしぞ。時も時折も折、かゝる惡事も重るものか、こは何とせん口惜しや」と、無念の涙はら〳〵と、きこつを絞るばかりなり。大杉は聲高く、「ヤア犬淵早參れ、其方は御舍弟を御供申し、君の御前へ來るべし」と、云付け

やれば犬淵は、縫之介を伴うて、奥の間へこそ入りにけり。何思ひけん源藏、道芝が繩解きほどき、縁より下へ突落し、「心あつて赦し遣す、ソレ勝手次第に屋敷を立退け、早疾く〳〵」と詞の下、嬉しさ恐さ一散に、表を指して走り行く。一間を出づる仁木將監、大杉が傍へ寄り、「初より一物ある、御邊と睨んだ眼に違はず、本心聞いて滿足致した。然らば事を急になすべし、其手段とて外にもなし、濃茶を君に獻ずる時、毒藥を入れ人知れず、討取らん我が計略、悦ばれよ大杉」と、速り切つたる詞を打消し、「サレバ其毒藥、麁略の儀は有るまじけれど、互の大望分目の大事、仕損じては事の破れ」と、念を押されて「ナニサ〳〵、家に傳へし祕法の毒藥、其疑は無用々々。萬事はナ、斯う〳〵」と耳に口、牒し合せてゐる所へ、早御歸館と呼はる聲、何心なく持氏卿、立出で給へば仁木將監、胸に湛へし悪事の鴆毒、さも忝しく濃茶の手前、謹しんで奉れば、持氏御手に觸れ給ひ、「オ、しをらしや汝が手前」と、既に呑まんとし給ふ折しも、次の間より聲高く、「ヤア〳〵我君、其お茶暫く御控へあれ」と、呼はる聲に仁木は惚り、「コレサ〳〵大杉、何故お茶をお留めめさるゝ」「サレバサ、あのお茶は毒でござる」「エ、コレ大杉、ソリヤ何を云ひめす、たつた今此將監が、ナ、コレサ差上げた茶、毒があつて堪るものか」「テモ毒に極つてある、但し又毒でなくば、先づ其元毒味なされ」「イヤ其儀は」「ホ、ウ呑まれ

まい〳〵、毒の印いで見せん」と、茶碗追取り庭前の、松の繁みに打ちかくれば、數多の小鳥一時に、落ちて果敢なくなりにけり。「御覽なされしか持氏卿、此毒藥は南蠻より傳はる祕法、豫て認め置きたる仁木將監、君を弑する謀叛の次第、眞直に白狀」と、きめ付けられて將監が、算用ぐわらりと、「イヤコレ大杉、毒の事は貴殿にも」「オ、一味と見せたは詮議の種の、ふかふかと大事を明す大癡漢、主君の御罰應へたか」と、きめ付けられて將監は、まう是までと打つてかゝる。得たりと源藏突立てば、ソレ遁すなと將監が、下知に群る雜人ばら、右往左往に雁立つれば、立つ足もなくむら〳〵と、遁げるをやらじと追つて行く、透を窺ひ曲者が、縫之介と姫君を小脇に掻込み、駈行かんとする後より、慕ひ來りし道芝が、「コレ縫樣」と駈寄るを、踏倒し一散に、表をさして駈けて行く。群る中を切拔けて、駈來る奴の雪平、跡に續いて藤内が、大勢引具し追取卷き、「ヤア主なしの紙崎が、一合半の浪人奴、腕を廻せ」と犇めいたり。「オ、好い所へ犬淵藤内。叱人なしの氣儘の仕事、イザ來いやッ」と仁王立、「ヤア緩怠なる毛奴め、物な言はせそ打取れ」と、藤内が下知に連れ、打つてかゝる雜兵共。「シヤ小癪な」と拔き翳し、多勢を屈せぬ手練の働き、目覺ましかりける次第なり、一間の内より持氏卿、和田の左衛門御供にて、立出で給ふ折からに、取つて返す大杉源藏、御前に向ひ手を支へ、「本海道は

將監が伏勢あるべし、相摸川より近道を、上屋敷へ御歸館あれ、跡は某計らはん。左衛門殿御供」と、呼はる聲と諸共に、燈し立てたる數の松明、手綱搔繰り召しの駒、和田の左衛門が引添うて、相摸川へと急ぎ行く。折もこそあれ一散に、駈來る畑介が、夫と見るより拔く刀、切込む切先しつかと留め、「ヤア心得ぬ此の振舞、樣子語れ」と氣を苛てば、「ヤア成上りの鮟鱇侍、うぬが舌より兄主膳、家は沒收君には勘當、汝が首を手土産に、兄への功の時到來、觀念せよ」と又切り込む、飛退つて、「早まるな、麁忽すな。汝が兄主膳殿を追失ひ、まだ其上に持氏公を、毒害なさんとせしは仁木將監なるぞ。謀計顯れ只た今、相摸川へ落行きしぞ、早く追掛け打取つて、兄への功を立てられよ」と、聞くより畑介立上り、「スリヤ兄を失ひ、其上に家國を押領せんと工みしは仁木將監とや。合點ぢや、まつかせ」と畑介は、川原をさして急ぎ行く。降り頻る、夜半の嵐に水音も、物凄まじき相摸川、ハイ〳〵〳〵と先を拂はせ、燈し連れたる松明に、前後を守護し押來るは、足利持氏卿、川端近く著き給へば、跡に引添ふ和田左衛門、御馬前に謹しんで、「水は高く見え候、上の一瀨は水勢薄く、此瀨より御渡し」と、申上ぐれば持氏卿、川原をさして打ち給へば、俄にけし留む駒の足、鐙一當あてさせ給へど、跡へ〳〵とたじ〳〵、御落馬危く見えければ、左衛門は駈寄つて、四方をきつと、「アラ不思議や、水火

の中も事ともせざりし御召の名馬、恐るゝ物目にかゝらず、何を指してけし飛ぶやらん。夫馬は乘る人の變を知らす其の妙獸、察する所此邊に、君に敵たふ其の伏勢、隱れあるに極つたり。立別れて叢を詮議せよ」と下知する折から、百騎ばかりの隱し勢、鬨をどつとぞ上げにけり。スハ一大事と左衛門が、眞先に進み出で、「何者なれば路次の狼藉、名乘れ〳〵」と聲掛くれば、一騎の内に其の有樣、大將分と見えたる一人、眞先に大音揚げ、「お大名のお通りと存じたる此我々、命惜しくば大將の、首を渡せ」と詈つたり。左衛門は嘲笑ひ、イデ物見せんと太刀拔き翳し、「爰は我等に御任せ、我君には此川を打越し給へ。御跡を取切つて、敵の大勢一人も此川は越させじ」と、群る中へ駈入つて、上段下段虛々實々、入り亂れてぞ戰ひける。君も御馬を早め給へば、お供の同勢えい〳〵聲、半渡ると見えけるが、樣子見濟し以前の曲者、水底を潛り行き、持氏卿の御馬の足、ずばと切たる覺のわざ物、「アレ助け參らせ」と、焦るばかりに眞の闇、そこしら浪と流れゆく、手ん手に松明照し合ひ、川下より御死骸をかき抱き、見奉ればコハいかに、御首は討たれたり。ハッと驚く其所へ、息を切つて駈け來る左衛門、呆れ果てたるばかりなり。思案を極め聲を潛め、「御首討つて立退きしは、一揆の業に相違はなけれど、横死とあればお家の滅亡、只何事も隱密々々。御病氣なりと世に披露し、家中の内より外樣へは、

此大變を深く隱し、御跡目相續まで、事穩便に計るべし。ソレ御乘物イザ早う」と、指圖に泣く泣く御死骸、皆々寄つてかき乘すれば、左衞門も跡に立ち、行列とてもそこ〳〵に、思ひも辿る玉鉾の、館をさして急ぎゆく。此方の岸へ曲者が、ぬつと出でたる其有樣、血刀ひつ提げ切首を、川へ打込みうそ〳〵と、邊見廻し〳〵て、徐々として落ち行く樣、不敵なりけり、三重。

第四

花の名所は、エヽソレ都に芳野、エズトセノセイ、井出の山吹、エヽソレ杜鵑に花萩よ、エズトセノセイ。「何と德兵衞、花崎の花問屋迄は餘程遠い、休んで一服呑まうかい」「オヽいかにも、そんなら休も」と荷を卸し、堤に腰掛け摺火打、「ナンと眼兵衞殿、今日の花はよかろがや」「オヽサ好い代物ぢや。アヽ、したが日和が堅いので、花畑の水の世話、年が寄つてはしんどい〳〵」「サア何處も夫で迷惑な」と、煙管を銜へて商話。斯る所へ仁木が家來犬淵藤内、手の者引連れ出で來り、「ヤイ〳〵兩人、足利殿の御舍弟縫之介殿、細川家の御息女操姫、又傾城道芝、若し此道へ來なんだか」と、聞くより眼兵衞耳聳て、「イエ〳〵そんなお方は見えませぬが、其道芝と仰しやりますは、手越の里の傾城でござりますか」「オヽサいかにも〳〵」「ハテナア。して又其三人は何でお尋ねなされます」「アヽ、仔細有つて密に尋ぬる、身は仁木將監が家來、犬淵藤内といふ者、大杉源藏が家來原田軍平といふ奴、此奴も俱々尋ぬる由、先を取られては身が一分が立たぬ。見付け次第早速に注進せば、褒美は望に任せん、必ずぬかるな。家來參れ」と目を配り、別れてこそは立歸る。跡に眼兵衞濟まぬ顏、「ムヽ、そんなら手越へやつた道芝は、欠落をしをつたか」と、いふを德兵衞が聞咎め、「コレ貴樣は其の傾城と近付か」と、問はれてはつと、「イヤ〳〵近付でも何でもなけれども、今甚う流行る太夫と聞いた故、名は疾うから知つてゐる。ヤ何の役にも立たぬ話して、隙入つては互の損。サアおぢや〳〵」と話をば、花で散らして花崎の、問屋をさして急ぎ行く。世渡りも、己が心の儘ならぬ、面も異名も一對の、上見ぬ鷲の善六が、何か工面の巧み面、肩で風切る向ふより、歩み來る原田軍平、邊見廻し、「コリヤ〳〵善六、約束の時刻を違へて、よう待たせたな」と、いへば善六、「オヽ軍平樣、其お叱りは我等が覺悟、俄事が出來ました故に思はぬ隙入り。扨お賴みの一通り、仰聞けられ下されませ」「オヽ其丈夫を見込みし上は、話して聞かさん、大膳公よりお賴みの筋といふは、今御病氣と扱露してある大殿の持氏殿は、疾うにごねて仕舞つたわやい」「エヽ」「病氣分にして置かねば、家督願ひの妨。時に二人の息子達の中、惣領の花若殿は、花の方に出來た子で、正銘正眞の殿のお子ぢ

や。月若殿は雪の方の腹に出生、是が伯父御大膳樣と、雪の方と密通なされて、設けられし御子故、惣領子を追退けて、月若殿に此家を遣りたいといふが伯父御の願ひ。實家老の和田左衛門、新參の大杉源藏、此二人がむつかしさに、色々工夫なさるれど、花若殿は御實母の、花の方の御殿にござれば、仕樣しがくの手段にあぐみ、所を我等枕を割り、案じ出した其趣向は、花の方の上屋敷へ、往來しやる其折柄、溢れ者をかたらうて、無二無三に切散らし、花若の母御を仕舞へば、跡は直に搔廻される。供廻りも女ばかり、ひよろ〳〵侍五人か十人、お身の手には行きそなもの。斯く大事を語つて聞かす上は、是非仕果せてくれねばならぬ、ナンと智慧ではあるまいか」と、取締なくばつとした、謀とは見えにけり。善六は跡先も、慾の一字にふわと乘り、「お氣遣なされますな、子分子方を此指で、數へて見れば三四十人、命知らずの下駄組あれば、きつと勤めてお目に掛けう」と、承けた此方も滅法彌八、安受合の慾の熊鷹、胸を据ゑて云放せば、「オ、心地よいお身の一言、夫聞いて安堵致いた。委細は追て沙汰に及ばん、夫まではナニ善六」「軍平樣、互に祕すべし〳〵」と、邊見廻し善六は、別れてこそは急ぎ行く。後見送つて原田軍平、「ヤア〳〵者共、道芝が行衛尋ね搜さん、イザ來いやツ」と云捨て、駈行かんとする所へ、思ひがけなき雪平は、走りかゝつて軍平が、首筋摑んで二三間、投付けられて砂まぶれ、「ヤアうぬは奴の雪平め、又しやくり出て邪魔ひろぐか、ソレ遁すな」と主從が、切つてかゝるを事ともせず、薙立て〳〵切り立つる、鋭き切先狼狽眼、「コリヤ叶はぬ」と軍平始め、ばら〳〵〳〵と遁行くを、「ヤア卑怯者遁さじ」と、追駈けゆく後より、「雪平待て」といふ聲に、はつと恟り振廻り、「ヤアお旦那、紙崎主膳樣」「オ、最前より木影にて、樣子は殘らず見屆けた。ホ、でかした〳〵〳〵」「ハ樣子御存じの上なれば、早お暇」と又駈け出す。「コリヤ待て雪平、そちや駈出して何處へゆく」「道芝を追手の奴原、切散らさん其爲に」「ホ、尤ながら先控へよ。大杉が手を假つても尋ね出し、持氏卿へ道芝を差上げずば御立腹、兎角妨げになるは傾城道芝、不便ながらも手に掛けずばなるまい、ハテどうがな」と主從は、思案取り〴〵なる所へ、「イヤ其お役目は私に、仰付けられ下さりませ」と、木蔭を出づる眼兵衛親父、樣子ありげに見えにけり。「ヤア終に見なれぬ其方、何を知つて小癪千萬」「ア、イヤ、其樣にお叱りなされまするな、私は其傾城道芝が親でござります。道芝事は幼い時、奉公に遣しましたが、今では全盛の大夫になりをつて、勿體ない、若殿が可愛がつて下さりますとの噂、よう聞いてをります。今お咄しを聞けば、若殿と娘と緣が深い故、姫君樣と御祝言もなされず、又御大將へ差上げいでは、やつぱり縫之介樣の御身の難儀。ハテ娘さへ得心して、持氏樣

へ參りますれば、何所も彼所もよいぢやござりませぬか。ぢやに依て娘に得心させます程に、此役目を私に、云付けさしやつて下さりませ」と、理非を分けたるさつぱり親仁、思案も深き眼兵衛なり。紙崎主膳打頷き、「スリャ其方は道芝が親ぢやな、ホオ、神妙なる一言、併し女の一途の了簡、いか樣に申しても聞入れなき其時は」「ハテそりやモウ是非がござりませぬ、何で助からぬ彼奴が命、人手に掛きよより、私が手に掛けて殺しまする」「ム、緊と其詞に相違はないな」「ハテ親が子を殺しまするに、誰が何と申しませう」「ホ、ウ出來した〳〵、ソレ此の一腰は當座の褒美」「エ、此一腰を」「サ百姓の魂を、武士の性根に入れかへて、緊りとナ、得心さすが國の爲、又娘が爲、合點が往たか」「ハァいかにも、成る成らざるは刀の鯉口、切るか切らぬは生死の境、合點でござります」「其方が宅は」「雪の下」「名は」「眼兵衛と申します」「緊と詞を番うたぞ」と、心殘して紙崎は、雪平引連れ立歸る。後打眺め眼兵衛は、暫し思案に暮れけるが、「ァ、儘ならぬ浮世の中、切ないは身の難儀、人手に掛けさすまい爲に、俺が殺すと一寸遁れ、併し駈落したといへば、何所をしやうど、餘人の目にかゝらぬ中に、ァ、早う逢ひたい」と、案じる親の心が通じ、血筋の縁か道筋を、尋ねくるわの道芝は、殿に放れてうろ〳〵と、走り躓き小石道、ばつたり當るも縁の綱、「オ、是は〳〵、餘り道を急ぎまして思はぬ麁相、お赦しなされて下さりませ」「エ、滅相な人ではあるわいの。思案して居るどうぶくら、何やら好ささうな思案も、恟で引込んだ、麁相なわろでは有るわいの。ヤ、娘ぢやないか」「さういはしやんすは、オ、父樣か」「娘か」はつと刀を後へ廻し、互に驚くばかりなり。「オ、娘、其方に逢ひたうて逢ひたうてならなんだに、よい所へよう來てくれたなァ」「サァ私もお前に逢ひたうて、アイヤ、此中不思議に姉さんにも逢ひました。母樣もお健なさうな、マアお前も御無事で嬉しうござんす。久し振で逢ひましたれど、きつう氣の急く事がある、緩りとお目に掛りませう」と、行くを引留め、「コリャ〳〵〳〵、マ、、待ちや〳〵、其方にはとつくりと、話さねばならぬ大事の〳〵用がある」「サァ私もたんと話したい事があれど、何も叶はぬ大事の用、其内緩りと聞きませう」と、行かんとするを又引留め、「サ、、、マ、、待ちやというたらマア待ちやいの。コレ、其方が大事の用といふは、若殿を尋ねるのか」「エ、」「ヤコレ隱しやんな、知つてゐるく。まだ其上に、わりやあの廓を駈落したであらうがな」「ム、合點の行かぬ、成程私は駈落しましたが、樣子を知つての其譯を、サ話して聞かして下さんせ」と、いふ顏眺め涙ぐみ、「何でいはねばならぬ事、がマァ是は斯うして置いて、其方には此親が、改めて無心がある、聞いてたもるか」「ム、久し振で逢うた父樣、無心とは何でござんすえ」「オ、外の事でもない、其無心といふ

は、縫之介様の事を思ひ切つて、持氏様の御殿へ、お伽に上つて貰ひたい」「エ、變つた事をいはしやんす、何でも是には」「オ、様子がある〳〵、イヤモウ様子が無うてなろかいやい。コレ若殿縫之介様は、そちと深う云交してござる故、姫君と御祝言なく、夫故細川家へ申譯立たず。二つには持氏様、お心を懸けなされたとある、差上げねば是も亦、縫之介様の御身の難儀、其方が心を取直し、若殿様を思ひ切つて、持氏様のお心に隨へば、われが身の爲、おれも出世、殿様も又御祝言なさるれば、お家も治まる何所もよい。サ爰の道理を聞分けて、得心してくれコリヤ娘、モこんな無理な事を頼む親、さぞ酷い親と思はうが、何ぞ譯がなうては頼まぬ。第一はわれが身の爲、何卒聞入れて下され」と、頼む涙聞く涙、俱に涙の淵ならん。「思ひ掛ないお頼、定めて是には様子がござんせうが、父様、是ばかりは堪忍して下さんせ。殿様の事思ひ切り、姫君との御祝言を、どうマア夫が見てゐられう。外の事なら何でも聞かう、此事ばかりは赦して」と、口説き歎けば、「エ、聞譯のない、わりや親への孝行忘れたな、行かねば其方が爲にもならぬ。コリヤ泣かずとも得心してくれ、コリヤ泣くな〳〵。サ、〻娘、賢い者ぢや、サ聞分けてくれ。コリヤ、手を合して親が拜む、コリヤ拜む〳〵」「エ、是いな、勿體ない〳〵、段々の入譯を、聞入れぬ憎い奴と思うてぢや有らうけれども、外の男を持つ事の、ならぬとい

ふ其譯は、何を隱さう殿様の、お種を宿してをりまする」と、聞いて恟り、「ヤア、そんならわりや懐胎してゐるか」「アイ、しかも左孕」「アノ男の子か、ハア」はつとばかりにどうと伏し、暫し詞もなかりける。道芝は面映く、勤に誠はない物と、いへども深い互の縁、若殿様に思はれて、幾夜さ交す睦言の、其きぬ〴〵も重りて、可愛さ積るお情の、やゝを設けた二人が仲、父様申し、ヘエ、餘まりつれない胴慾な、私が心も思ひやり、堪へて下んせ父様」と、いふも涙の淵瀬川、戀の簗堰留めて、卿ち歎くぞ道理なる。親は胸までせぐり來る、涙呑込み呑みこんで、「コリヤ娘、オ、夫なら我がのが道理ぢや〳〵〳〵尤ぢや。ハテモウ其身に成つたら何とせう、様子を聞けば聞く程不便、是非がないと諦めて、可愛けれども切らねば」「エエ」「ア、いや、サイノ、緣を切らねばふらぬ所ぢやけれども、モウ切らぬがよからうといふことぢや」「ム、そんならアノ聞屆けて下さんしたか、エ、忝なうござんす」と、知らず悅ぶ子の心、親は不便と血の涙、「左右いふ中モウ日暮、今夜はこつちに泊つて、久し振ぢや、婆や姉に逢つたがよい」「アイ〳〵、そりや猶嬉しうござんする、そんならさうして下さんせ」と、いそいそ悅ぶ道芝が、先へ進むは無常の風、早誘ひ來る暮六ッの、「ハアモウ鐘が鳴る、幸ひ人の通りもない、向ふの土橋で一思ひ」「エ、父様、何いはしやんすぞいナア」「アイヤ、あの向ふの

土橋はの、人の渡る度毎、危いといふこと」「エ何の危いことがあろ、私が先へ渡るわいな」「ヤ何ぢや、先へ渡る、オ、さうぢや〳〵、どうで渡らにやならぬ其身、とつくりと覺悟して、お念佛申して渡つたがよい」「オ、仰山な、橋一つ渡る事を、何の苦にする事があろ、サアござんせ」と先に立ち、知らぬが佛眼兵衛が、心は鬼の目に涙、堤傳ひの野邊送り、消ゆる間近き道芝が、憂身の果こそ三重。

第五

秋の山、紅葉の床に男鹿の寢たるしをらしや、經緯に露霜おりし、錦は山の紅葉ばの、渡らば錦なか絶えん、憂き世渡りの數々に、憂きを積りし雪の下、藁屋の軒の侘住居、娘お來が賃仕事、ぶんぶ綿繰くる〳〵と、絲より細き痩世帶、拵に暇なかりけり。折から鄰の女房が、佐兵衛を連れて内に入り、「オ、コリヤお來樣、いかう精を出さんすの」「オ、お市樣ようお出、何程あたふた精出しても、高が細い此仕業、モ埒の明く物ぢやござんせん」「オ、そりや道理、シタガそんな細い仕事せうよりも、此中お前の言はんした、其相談が調うて、今其お人を連立つて、來は來たがお來樣、内方の首尾合は」「アイ、好いとも〳〵、何から何までお市樣の、モいかいお世話でござんした」と、愛想笑顔に見とるゝ佐兵衛、「イヤコレ隣のおかみ樣、お前の言はんした代物は彼子かえ」「アイ彼子でござんす」「シタリ見事、そして金の望はえ」「夫はお前の目一杯に」「ム、、イヤモ百兩が物はきつと有るて、百兩で手を打とかい」「アイ、そんならさうして進ぜて下さんせ。成程々々、此方にも氣に入つた代物、今半金渡しましよ、跡金の五拾兩は、親父の戻られ次第、證文に印形さしやれば其時に渡します。おれが行て來る所が有れば、支度して待つていやんせ、つい戻ります」と詞數、言はぬは粹の商賣がら、好い代物と心には、獨笑して出でて行く。「お來樣、マア〳〵相談が濟んで目出度ございます。樣子うす〳〵聞いた所が、お前も今は新孀にならんしたさうなが、不躾ながら、今分のお前の身で、大まいの金の入用とは」「アイ、成程ソリヤ合點行かんすまい、其譯と言ふは外でもない、母樣のぶらぶら病、物喰はんすと間もなう吐す、腸とやらほん胃とやら、むつかしい病ぢやげな。百日の内に直らねば、死なしやんす病ぢやと、聞く悲しさは身も世もあられず、方々の醫者衆に見て貰ふ度毎に、療治とてもないではないが、迚も貧しい身の上では、所詮養生も屆くまい。此病には人參を、飽く程入れて呑ませねば、内が衰へて有るによつて療治が屆かぬ。時節ぢやと諦めよと、聞いて悔しい今の貧苦、大まいの金才覺する、當も手當もないしようの詰り、

二人の親達には祕し隱しに、此頃中お前を賴み、此身を賣つて其金で、母樣の人參代、思ふ程療治して、夫で行かねば念も殘らぬ。金の入る樣子、必ず沙汰して下さんすな」と、親を思ひの孝行に、お市も聞いて貰泣、「孝行なお前の眞實、惠みがなうて何とせう。お來樣、後に後に」と門の口、泣く目を拂うて出でて行く。お來は跡に獨言、「ア世の中は樣々ぢやな、夫源藏殿は出世の望で家出さしやんしたが、何所に如何して居さんすやら、よもや出世をさしやんしたら、厭別といふではなし、便のない事も有るまい。わしや置去りにあうても、更々恨みる心はない。神佛へ向うても、母樣の御病氣、二つには源藏殿の出世をば、祈らぬ神も佛もない。若し世に出でなば元の夫婦と、書殘さんしたを樂しみに、月日を數へ待つわいな。ア惡い事が重なれば、又此樣に重るものか、人の身の上と水の流程定まらぬ物はない。アゝ思ひ廻せば廻す程、兄弟ながら憂身の上、妹は手越の里に勤の身、此姉も同じ川竹、前生よりの約束と、思へば因果な身の上」と、又も涙にくれゐたる。斯る折柄表の方、大小立派の侍一人、内の樣子を窺ひ〳〵、小陰にこそは忍びゐる。漸〳〵顏を上げ、「ア、愚癡な事思ひ出してつい泣いた、我身の事に身を賣る者さへ有るに、況して親の爲ぢやもの、泣くまい〳〵。浮き沈みは七度と、いふを此身の樂み」と、心も髮も取上ぐる、勝手へ萎れ入る跡へ、忍ぶ破垣紙崎主膳、續いて奥へ忍び足、ひそ〳〵として隱れ入る。斯くとはしらがの母親は、一間を出でて、「コレハ〳〵、お來も仕事は仕舞さうな、わしも今日は又鹽梅がいかう惡い。ア、此親父殿は何してぞ、いつよりも遲い戻り、道で持病が發りはせぬか、ア、氣遣な」と老の身の、案じに胸も休まらず。そよと吹く風いとゞ猶、身にしみ渡る妄執の、非業の刃に道芝が、消えし魂魄我ながら、形を假りのしよんぼりと、「母樣はそこにかへ」と、言ふに恟り、「ヤア其方は娘、思ひがけない何時の間におぢやつた」と、言ふも不思議の立姿、「母樣御久しうござんす、樣子有つてせつない苦しい憂きめに逢うて、心がかりな事有る故、裏からそつと只一人、父樣はお留主かへ」「オオ親仁殿は今朝商物持つて往て、未だ戻らしやれぬ故案じて居る」「ムゝ、夫は幸、お前に密に咄したい事が有る、奥へ來て下さんせ」「ムゝ、久しう逢はぬ此母に、咄したい事が有る、そして夜中に只一人、竊に咄したいと有るは氣にかゝる、マア奥へ」「アイ、マアお前から行かしやんせ」「そんなら娘、サアおぢや」と、何のけんによもなんど口、打連れてこそ入りにけり。色香漏れくる破障子、移す鏡の柳腰、見かはすばかり髮形、木綿似合はぬ女房盛り、「ハア短夜のモウ初夜前、今宵四つが内の名殘、終に仕なれぬ曲輪の勤、八文字とやら如何するぞ。エゝこんな事なら妹に、習うて置いたらよかつたに、アゝどうやう小褄をかう取つて、エゝ口惜し

い」とはら〳〵涙、雨夜の月と疑がはる。折から表に犬淵藤内、うろ〳〵眼に戸口を覗き、「家來共アレ見たか、アノ女めは慥に尋ぬる傾城め、さうぢや〳〵」と込入る主從、母はかけ出で立塞がり、「ア、コレ、聊爾せまい、こりや何事」「イヤとぼけまい、手越の里の傾城道芝、足利の館へ男に化けて入込みし科、首討てとの御諚意」「エ、イ、アイヤ〳〵そんな傾城が此方へ來た覺えはない」「ヤア狸婆め、隱しても隱されぬ道芝が親里、此内へ戻つてゐる事、見屆けて此詮議」と、聞くより母ははつとばかり、塞がる胸に思案を極め、「ハテ此上は是非に及ばぬ、迚も遁れぬ娘道芝、如何にも御渡し申さうが、暇乞する間」「ヤアなまぬるい、叶はぬ願、猶豫せば儕共繩打たうか、何と〳〵」とひしめく所へ、「申上げます、只今僕の雪平め、向ふの辻で見付けし故、引ッつかまへうと存じたれど、旦那を差置き慮外と存じ、御注進申上げます」と、聞いて恟り、「ナニ雪平めがそこらにをるか、エ、邪魔なやつ。引縛るは易けれども、今出合うては勝手が惡い。コリヤ婆、首は後程受取りにくる。家來共、道をかへてかうゝ參れ」と、ひるまぬ顏は長田の裏道、家來もしどろに立歸る。母は吐息をつゝくりと、お來は何氣も、「ナウ母樣、そんなら妹は戻つてゐるかえ、何所に居やるえ。そしてマア、ひよんな事受け合うて、此納りはどう付く事、私や氣遣な〳〵」と、案じも眞身の姉妹思ひ、思ひ續けて母親は、詞なく〳〵顏を上げ、「其方にはまだ逢はさぬが、最前道芝が戻つて身の上咄し、戀故に科人に成つた譯、いふに違はず追手の侍、手詰に成つた詮の詰りは、お來、其方に母が賴みが有る、親子の中でも是ばかりは、餘り〳〵云ひかねた。逆樣な事なれど、妹道芝が身代に立つて死んでたも」「エ、イ」「オヽ惱りは尤ぢや〳〵、世の世界に、是ほど無體な無心はなけれど、胤腹一つの姉妹、可愛さに何のかはりが有ろぞいの。分けて妹が殺されぬ譯は、足利殿の弟御、縫之介樣に思はれ、我々ふぜい、娘が身は輕けれど、重いお胤をやどしてゐる、其子が大切さ、今の追人が見違へた程、似たが因果の此身代、若殿の代に立つと思うて、母に命をたもやいの」と、思ひがけない賴みには、思案とかうも涙ぐむ、難儀は二つ身は一つ、心一つに分けかねて、「成程尤な樣子聞いた上、さら〳〵未練ぢやないけれども、氣の毒な事は、私もこちらに樣子が有つて、少し命が入りまする。知つての通り義理ある夫、別れた時から身に持つた、胤は私も同じ事、尤お歷々と浪人と、位は違つて有るけれど、夫に預かつた大切さに違ひはない。命一つは惜しまねど、貧しい夫を持つた故、お中の子まで是程に、位が違ふかと思へば、口惜しうござんす。とはいへ妹の命も大事、何卒仕樣はない事か」と、身賣の譯も今更に、言はぬがましの投島田、身を投伏して泣居しが、「ア、さうぢや、幼いから

病者な私、妹のお宮が傾城になりやつたも、其扱ひに入つた金、私が夫は浪人の不自由さ、何かに付けてお前方に、御苦勞かけるも皆私故、恩の有る妹の代りに成る事ぢやもの、成程潔う死にませう。道芝は何所にぞ、逢うて一言いひたい事が」「オ、そんなら死んでたもるか」「アイ」「エ、忝い出かしやつた、ようこそ得心してたもつたなう」と、死ぬる我子に手を合せ、「悅ぶ親は我ながら、さぞ氣遣とも人目には、かゝる例は何の罪、何の因果」と隱泣き、姉も後へ殘る目に、涙包んで奥へゆく。同じ迷ひの親心、眼兵衛はとぼ〳〵と、花の盛を切捨つる、子は三界の首枷と、肩に思ひの枯柴を、荷うて歸る門の口、「可愛や婆が朝夕に、影膳するぞ待つ娘、靈供とかはる世の有樣、思へば我家も這入りかね、佇む中にも女房が泣聲、「浮世の義理とは云ひながら、思へば酷い親の身で、現在我子を殺すか」と、くどくを門に聞き恟り、もしも樣子を聞いたかと、危みながら上り口、「コレ婆、今云やつたは何の事ぢや、誰が事ぢや」と尋ねられ、ハッとしながら當座の間に合ひ、「イヤナウ、此方の戻りの遲さに、思はずとろ〳〵轉寢に、我子を殺した夢を見て、ひよつとアレが本の事なら、悲しからうと思うて涙が」「何ぢや夢に見た、ホイ親子の血筋夢に知らせが有るも道理」「コレ親仁殿、夢に知らせとは何知らせ」「イヤ夫は、アノ妹道芝、廓へ往つてから便もせず、生きたとも死んだとも、夢になりとも知らせさうな物ぢやといふ事」「オ、本に親仁殿、最前から妹が來て、イヤモウ氣遣さしやんすな、夫は〳〵達者で、今奥で姉と咄してゐるわいな」ヤアと恟り、「ドレ〳〵何所に」と、覗けば姉と差向ひ、「ソレ好い女房に成つたで有らうがの」「ホンニさうぢや、やつぱりさうぢや、ア、南無阿彌陀〳〵」「エ、忌ま〳〵しい、達者で戻つたに念佛は何ぞいの」「サイノ、めんようなく年寄といふ者は、念佛が口癖に成つて、嬉しい事にもつい南無阿彌陀、餘り妹が大きう成つたで、嬉し過ぎて涙がこぼれる」「オ、ソリヤ道理いの、嬉しい事さへ夫ぢやもの、嘸ぞ此方の事を聞かしやんしたら、ホ、、、オ、私としたこと事が、ひもじからうに焚付けて、茶漬進じよ」と勝手口、泣きに立つこそ哀なる。「イヤひもじい所か、おりや胸が一杯に成つて有るわいの」と、いふ間なく〳〵女房が、附木燈して佛壇に、上ぐる御明いはねども、心合ひたる女夫中、花は手生と眼兵衛が、立つる具足の鶴龜も、短い壽命と觀念し、妻が撞木を取上ぐれば、「エ、是婆、今夜は佛の日でもなし、其方が看經する事は無い、念佛はおれが申すわいの」「イヤ此方の看經はいつでも成る、今夜は私がお念佛の入る事が有るわいの」「イヤサ、おれも念佛申さにやならぬ事が有る」「オ、そんなら共に」と同音に、鉦打鳴し南無阿彌陀、〳〵〳〵、唱ふる念佛は變らねど、言はず語らず二親の、涙く

ろめん方もなき。一間の内も姉妹が、明けぬ心の闇深く、「ナウ妹、久しぶりで顔を見て、嬉しいも暫しの中、いふに云はれぬ譯有つて、此來は今宵から、遠い所へ行かねばならぬ。何時又逢ふやら逢はれまいやら、お年寄の二親に、たつた一人の妹、隨分達者で居てたもや。夫に付けても賴みたいは、親の爲に大磯へ身を賣りたれど、夫も行かれぬ譯に成り、行かねば母様の用にも立たず、言かねた無心なれど、私が代に大磯へ、ちとの間往て下さると、其金で母様の、アノ病が直りさへすりや、私や死んでも心は殘らぬ。只さへ其方は私故に、一度ならず二度の勤、賴むも此方に何やかや、樣子は跡で知れる事、一生の無心を又賴みます妹」と、今はなき身の道芝とも、知らぬ心根猶悲しく、「姉樣の爲なれば、火に入り水にも入るけれど、肝心の此體が、今日有つて、明日は果敢ない世のならひ、其上にお前まで、そんな便ない事いはしやんす。今から父樣や母樣は、誰を便りに、さぞ歎の上のお歎と、一倍弱らしやんせうと夫が悲しい。お前ばかりは何方へも行かずと、何卒二親の御介抱申してたべ。何いふ事も此世では、皆徒事と成り果てる、跡の悔みの悲しさ」と、親子一世の隔の障子、別れを急ぐ四つの鐘、南無三寶時移ると、母は一腰さし心得、「サア今切るぞ」と覺悟のお來、「ナウ姉樣殺させぬ」と、覆ひに成れば亡き人とも、知らぬ母親、「コレ〳〵大事の妹、怪我しやんな」と振上ぐる、

「ヤレ待て女房」と眼兵衛が、姉が手を取り引退くる。「イヤ〳〵切らねばならぬ譯」「切らしはせじ」と姉思ふ、冥途の魂魄眼兵衛が、「今は是まで南無阿彌陀」と、女房が刀引つたくり、すつぱと切つたる刃の下、形は消えて佛壇の、前に殘るは首ばかり。「ヤア〳〵〳〵親仁殿、何で妹を切つたのぢや」「父樣是は」と泣くお來、呆れ涙の折柄に、肝煎が高呼り、「サア〳〵姉樣、跡金持つて迎ひに來た。泣いて居てはいつまでも果てぬ、是から勤の大事の骸、サア〳〵爰から直に乘つてござれ」と、泣入るお來が手を取つて、無理に連出し手を叩けば、聲諸共におろせ駕、門口に舁据ゑれば、「コレ〳〵娘を何方へ連れて行く、樣子を聞かう」と取付く眼兵衛、お來は涙の聲を上げ、「コレ〳〵父樣、久しう母樣の御病氣、其上ふがひない夫を持つた故、お年寄られて色々の御艱難、此身を賣つてせめてもの御恩報じ、此事を夫へも、くれ〴〵傳へて下さんせ」と、いふ聲共に伏沈み、泣くを泣かせず、「イヤサ樣子は跡の事、先づ娘子の身の代」と、投出したる五拾兩、「サア乘らんせ」と無理遣りに、駕におし入押込んで、道を早めて急ぎ行く。眼兵衛は金取上げ、「コレ〳〵婆、おりや一つも合點が行かぬ、主有る姉が勤奉公、定めて是には樣子が有ろ。サ、、、きり〳〵譯を聞かしてくれ」と、せきにせき立つ此方もうろ〳〵、「サ、、私も姉が勤奉公に行く事は夢にも知りませぬ」「何ぢや知らぬ」「オイ

ノ、此方の留守に足利家の追手が來て、妹を渡せとのつ引ならぬ手詰の難儀、一寸遁れに受合ひしが、縫之介殿の種をやどせし其樣子、私とても其昔は、足利家の恩有る者、似たを幸ひ、アノ姉を身代に賴みしに、何で又此方は妹を切つたのぢや。活かして戻しや、活して返しや」と、あやもなみだに伏沈む。眼兵衞も咽び入り、「尤ぢや〳〵、が妹を切つたは樣子有つての事、主有る姉に身を賣らせて、聟へ何と云譯せうぞ。身の代の此金戻し、姉のお來を取返す」と、駈出すを、「ヤア〳〵眼兵衞、申聞かす子細有り、暫く待て」と一間より、立出づる紙崎主膳、是はとばかり眼兵衞夫婦、更に不審は晴れやらず。紙崎は二人に向ひ、「ナニ眼兵衞、姉のお來が身を賣りしは、大磯ではないわいやい」「ムウ、シテ又姉が身を賣りし、其先は何處何方」「オ、妹道芝を其方に討たせたは殿の爲、我家來を由輪の者に仕立て身の代を與へ、買取りし姉のお來は、此主膳が詮議有つて、我方へ召捕りしは子細有り。姉が夫の名苗字を聞くに、我推量少しも違はず、詮議の種の姉が身の上、樣子は追つて申し聞かさん。先づ何を差置きて不思議なるは此刀、眼兵衞、コリヤ以前より其方の所持なるか」「ハイ、其昔手一合取りました故、今に放さぬ鰹掻き」「イヤ〳〵尋常ならぬ名作の證據、此刀を振上ぐれば、最前死靈が消えしは、正しく武將の家の重寶午王丸の名劍、先年赤松滿祐此の太刀を奪ひ取り、謀反成らずして亡び失せ、其後行方知れざる名劍、是を所持する其方は、滿祐が餘類と見た目は違はじ。名劍只今手に入ると云ひ、謀反人赤松滿祐が忰、赤松三郎といふ者、大將軍に仇をはさむよし、何國に在るとも行方知れず、此行衞を知つたる者は、其方ならで外になし。サア眞直に白狀せよ、陳ぜざるに於ては、骨をひしいで白狀さす、サア〳〵何と」と詰寄せられて眼兵衞が、刀引拔き我腹にぐつと突立つる。コレハと取付く女房を取つて突退け、「女房泣くな、其方や何にも樣子は知るまい。反謀人赤松滿祐の足輕、嘉嶋權平といふ者、物數ならぬ者なれども、魂は誰に負くべきや。足利家に仇せんと、心を盡す此年月、我娘道芝が懷胎なせしは足利の種、一刀に差殺し、主人へ立つる寸志の忠義、今主膳殿に見顯はされしは運の盡、さりながら侍の數に入り、切腹するは我が本望、モウ何にも物申さぬ」と、きり〳〵と引廻す。「ヤレ待て嘉嶋、小身には似合はずハレうい者、娘道芝を殺したも、うはべは縫之介殿へ忠義と見せて、下心は足利家の胤を懷胎したる故、水子も敵の片割と、娘と共に指殺す、夫程の根强い性根、如何程に拷問するとも三郎が行衞は言ふまじ。最早尋ねぬ、安堵して勝手に死ね。コリヤ其方に遣した其刀は、我親紙崎兵庫、赤松滿祐を討取りし時、無念こつて刀に喰付きたる、赤松が最期の齒形、其刀で切腹すれば、主從一所に討死も同然ぞ」と、聞くに彌增す殘念さ、「主

人の最後の此刀で、娘を殺し我も死す、因果の業は今果す、婆去つた、縁切つたれば赤の他人、如何に忠義なればとて、我子を殺し、また顔も見ぬ初孫を刺殺す、婆勘忍して〳〵。科人のおれが爲に、必ず菩提やなど弔やんな、娘が爲に尼に成りと、心任せ」と一言は、今はの情も情ない、娘は殺し夫に別れ、死際になり退去りとは、何面目もないじやくり、心を察して紙崎主膳、「假にも殿の誓くも、御寵愛有りし道芝が、母には詮議のお構ひなし。姉が身の代百兩の、かねては妹が追善供養、跡弔ふが肝要なり、イザ歸らん」とゆふ闇に、出づるを遣らじと、犬淵藤内、心得主膳が小柄の手裏劍、丁ど來かゝる雪平が、一人も殘らず鑒し、切つて捨てたる老の髪、未來を契る友白髪、先立つ無情の鐘の聲、風にちり〴〵散る花の、盛は雪と消え果てゝ、月の出汐に立出づる、忍び編笠夜半ながら、不覺の歎戀ゆゑの、その亂れ髪佛に、涙の露を賤が家に、置き別れてぞ三重出でて行く。

第六

かけまくも、太敷き立てし宮柱、和光の塵も影淸き、ときはかきはの神樂唄、千代を壽く鶴が岡、弓矢取る身の守とて、群集は押しも分けられず、一際目立つ鋲乘物、足利家の奥女中、花の方の御代參、咲揃うたる花盡し、外珍しき女郎花、さはらば落ちん玉あられ、ふるや鈴の音大麻の、引く手に神も靡くらん。當社の一禰宜榊兵部、夫と見るより出迎へば、乘物明けて局岩藤、跡に續いて中老尾上、行儀も遒しとやかに、會釋こぼして立出づれば、神主兵部も共に式臺、「先以て今日の御代參、御苦勞至極」と挨拶の、詞に付いて局岩藤、「ォ、其後はお久しや、兵部殿、相替らず今日の代參、足利家の武運長久、御祈念賴入りまする。其次手には此局が、諸願滿足を精出して、御祈りなされ下されよ」と、苦み走りし空笑顔、仕濟し顔に相述ぶれば、尾上は夫とさし心得、一封の願書取出し、花の方取分心を籠めし此願書、御奉納下されよ」と、差出せば取納め、「イザ御神拜遊ばせ」と、詞の内に局岩藤、「イヤナウ尾上殿、ちと私用ながら、待合す人が有る程に、先へ往て下され」「左樣ならばお跡から。兵部殿御案内賴みます」「然らばお出」と榊兵部、先に立つて鳥居前、宮居をさして引連れ行く。折もこそ有れ向ふより、身中が欲の摑面、鷲と名うての善六が、きよろ〳〵眼うそ〳〵、見ゆる此方に岩藤が、「ヤレ待兼ねました、委細は昨日の文の通り、日外も大膳殿よりの密書を、問注所で取落し、樣々と探して見たれど、かいくれに見えなんだが、十が十尾上めが拾ひをつたには違ない。スリヤどうも其分に置かれぬ尾上め、夫故に今日の趣向、まだ其外に何や彼や、咄す

事がたんと有る、委細の譯は神主の所で」「呑込みましたサアお出」と、人喰馬にも合口と、打連れてこそ行く跡へ、桃井求馬時房が、何の願の神詣、鳥居間近く歩み來る。引返して善六が、邊きよろ〳〵ねめ廻し、求馬が傍へ立寄つて、「イヤ申しお侍樣、終にお目にはかかりませぬが、此鷲の善六といふ男が願ひ、初對面の天窓から、氣に入らうが入るまいが、是でも非でもお侍樣、聞いてもらはにや男が立たぬ」と、何か根ざしの云廻し、求馬もむつと若氣のはやり氣、思ひ直して和らを入れ、「成程今御自分の申さるゝ通り、終に見もせぬ某へ、是非にと有る其賴み、一通り承らん」と詞の下、懷より文取出し、笑顔もち〳〵、「申し、今の樣に云うた時は、小むづかしき事云ひかけて、喧嘩でもしかける樣に、お腹も立たうし、御合點も參りますまいが、高が斯ういふ筋でございます。エ、アノお前に、モウ〳〵〳〵死ぬる程惚れてゐる、其女中が命にかけて私への賴み、私も又あた臭い事いうた事はない故、持前の喧嘩仕立て、お前を口說く文使の私、一ッ屋敷の傍輩同志で色事は法度ぢやげなが、命づくの戀の取持、お前ぢやとてまんざらに、餘り腹も立ちそもない事、其文納めて下さんせ」と、かさ押しにやる文使、荒木を切つて取持口、求馬は何の心もなく、文取上げて見るより惚り、投返さんとしたりしが、役柄と云ひ日頃の氣質、後日の當りも如何ぞと、一寸遁れと、「コレハ善六殿、存じ寄らざるお取持、何が差置き、我等とても岩木にあらねば、お志何程か祝著、此文忝う受納めます。返り事は此方よりと、よしなに返事賴み入る」と、懷へ入るゝを見て、俄に作るあいそぶり、「扨も〳〵お前樣は、數ならぬ此私が一言を、お立てなされて下されます只今の御返事、有難い〳〵。主も嘸此返事待ちに待つてでございませう。ヤ何お侍樣、必ず御返事待ちます」と、儕一人がでかし顔、肩怒らして懷手、宮居をさして入りにけり。跡に求馬は只一人、文の返事を兎や角と、思案に小首傾けて、暫し小陰に佇めり。斯くとはいざやしらにぎて、緣の絲いふ結合す、人目をそつと妬早枝、としやおそしと走寄り、物をもいはず求馬が顏、うらめしさうに打眺め、「エ、聞えませぬ求馬樣、アノ意地わるの岩藤が、目顏を忍び轉寢の、其睦言の度々に、其方を退けてそもやそも、外に枕はかはさぬと、云はしやんした其時の、其一言を樂しみに、思うてゐるに胴慾な、つれないわいな」とばかりにて、かこつも戀のならひかや。求馬はほうど持てあまし、「コレハ〳〵又其方もマア嗜みやいなう」「イエイエ〳〵、よもやとは思へども、油斷のならぬは男心、私や夜の目も合はぬわいな」「ハテ疑ひ深い」と手を取れば、「ア、嬉しや」と寄りそうて、わりなき仲ぞ睦じき。「不義者見付けた動くな」と、聞くより二人ははつとばかり、「オ、お局樣何の間に」「イヤ今日は私も御

代參に來ました、ヤコレ味やらしやるなう。大切な御使に、道草の癡話遊びか、オ、好い行儀ぢやの、イヤ結構な御身持ぢやわいの。不義はお家の堅い御法度、ふたり共に覺悟しや」と、俄に詞あら〳〵しく、穗に顯れしは戀の意地、柊に咲く花ならで、二人は雪と消えたき思ひ、「イヤ申しお局樣、必麁相おつしやりますな。私が身に取りまして、更々不義の覺えはござりませぬぞ」「イヤおしやんすな〳〵、たつた今求馬殿と、吸付いたり引付いたり、抱付いたり取付いたり、イヤモしたゝるい事の有る條を、コレ此黑い目で見て置いた。何と夫でもあらがふか」と、齒に衣きせず云ひまくれば、求馬こらへず、「これ岩藤樣、人の不義を改める此方こそ不義の詮議」「ヤア何ぢや、此岩藤を不義者とは、コノぬつぺりとした顏わいの」「イヤコレ岩藤樣、其いやらしい目付で付けつ廻しつ、今も今とてコレ此文」と、出して見すればはつとばかり、赤面すれば早枝引取り、「こりや潔白なお局樣ぢやわいな。不義はお家のきつい御法度、サア此方より申し上げうかえ」「サア夫は」「但し拙者が言上致さうか」「サア夫は」「サア」「サア」「そんなら、モようござるわいなう、不義の詮議は互に是限、イヤ何求馬殿」「お局樣、スリヤ申し分はござりませぬか」と、早枝と目と目見合せて、別れてこそは立歸る。折柄告ぐる供廻り、「イザ御立」とゆふばえの、中老尾上先に立ち、多くの女中取圍み、對の帽子も一

樣に、群居る鷺の如くにて、賽しの鳥居の前、「イザお局樣、御一所に」と、云ふに岩藤不承不承、立上らんとする所へ、來かゝる鷲の善六が、兩手を土に、「イヤお局樣、最前申上げんと存じましたれど、かの事に取りまぎれまして、ナ申し、ばつたりと失念を仕りましてござります。外の儀でもござりませぬが、此間仰付けられました金子の儀、ヘ、、御受取り下さりませ」と、半分云はせず「コレ善六、何時もながら心遣は過分々々。しかし流石は町人の其方、奥向の事知らぬ筈は尤、コレ此岩藤は局役ぢやぞえ、むさくろしい物を取扱ふ役ぢやない。其金は針妙の澤に渡しや、宜きに」とばかり詞數、云はぬ色なる山吹の、包取出し善六が、「ア、町人と申す者は、賤しい者でござります。神佛より尊く思ふ此金を、むさくろしい物などと、お手に觸れぬといふは、ア、又格別なお歷々樣。うなる程金持つても、町人といふものは、アア賤しい物でござります」と、云ひつゝ金を懷へ、お屋敷さして急ぎ行く。跡打見やり局岩藤、「アノ善六とした事が、私がいふ事氣にもさへず、正直な生れ付、何と思はしやる尾上殿、町人には珍らしい氣恥しいアノ善六、町人は賤しい物と、感心した今の樣子、ヤ、こりや本に、ちつと此方には差合で有つた物。ホ、、、、オ、私とした事が、づか〳〵と氣の毒な、イヤ本に尾上殿、アノこな樣の宿といふは、金持なれど町人、假親しての御奉公、スリヤ今私が言うた事、氣に

障やしませぬか」と、味な所からしかける喧嘩、扨はいつぞや問注所にて、密書を拾置し事、氣どつて今日の此時宜と、思へば猶もそらさぬ顔、「コレハ又岩藤様の痛入ります御挨拶、何のまあ私が氣にさへまするの何の彼のと、申す様な事がござりませうぞ。おつしやる通り町人の娘、親共がお出入の御縁を持ちまして、御奉公に上りまし、だん〳〵とお取立、かやうな重い御奉公も、有難い此身の仕合せ、根が町人の私が事、嘸や不束な事ばかりでござりましよ。此上とても岩藤様、憚りながらよい様に、足はぬ事を御遠慮なうお呵りなされて、お指圖頼み上げまする」と、柳流しのしなやかに、云廻したる利發さよ。「オ、何ぢや、町人の娘故、足らぬ勝ちな勤方を、私に指圖してくれろ。ホ、、、オ、つべこべと薄い脣ぢやの。此方の若い其舌先で、こね返さるゝ私でもござらぬ。何のそもじの御發明で、私が指圖を受けさうな事かいの。コレ次手ぢやによつて云ひますが、此方の親元は、町人ながらも金持で、御屋敷の御金御用を勤めやるといふ、其用達顔の高慢が、鼻の先へぶら付いて、コレ此顔に見えるわいの。コレ〳〵、上の事いふではないが、金の威光はきつい物ぢや、アノ其角とやらいふ誹諧師の發句に、コレ聞かしやれや、口切や汝をよぶは金の事、コレ、金持頼は此上とても止めにして下され尾上殿、御役向はお中老、此岩藤は局役、お表ならば御用人格ぢやぞや。女子一通りの事は勿論、萬一狼藉者が奥向へ切入るか、又盗賊などが忍び入る其時には、役柄ぢや、女子ながらも御前の固、討留める器量がなければ勤まらぬ奉公ぢやが、此方も武家方の御奉公さしやるからは、長刀の一手も心得てござらうの。ソリヤアノ、誰に稽古さつしやつたぞ、ソシテアノ其お師匠様は何と云ひますヤ。コレ〳〵〳〵尾上殿、ア、爰な人わいの、人にばかり口たゝかせ、此方は耳でも潰れたか」と、嚙み付けられて尾上は只、赤らむ顔を押隱し、「お恥かしい事ながら、其心がけは」「無いといふのか。ヤレおとましや氣の毒や、重い役を勤めながら、役向の勤方を知らぬといふは、ソリヤアノ何ぢやぞや、オ、夫よ、本の是が祿盗人といふ者ぢやぞや、イヤコレ知行盗人といふ者ぢや。盗人ぢや、〳〵〳〵、何とさうでは有るまいか」と、捲しかけた る雜言に、無念の涙たもちかね、齒を喰ひしばりこらへるる。「オ、何ぢや、泣かしやるか、オオちつとこたへう、悔しかろ。町人の娘ぢやとて、今では武家の御奉公人、本にさうぢやわいの。最前もいはしやるには、心付かぬ事有らば、御指南頼むといはしやつたの、ウ、ドレ教へてやろ」と立上り、持つたる扇振上ぐれば、身をかはして打落す。手向ひなさば一打と、懐刀抜き放せば、是はと驚く女中達、尾上も今はたまりかね、共に拔かんと立寄りしが、思ひ廻せば廻す程、大恩受けし御主人の、御先途も見屆けず、我身に過有るならば、跡に殘りし親

達の、御歎は如何ばかりと、こたへるつらさ苦しさは、胸も張りさく血の涙、身もうくばかり歎きしは、傍で見る目も哀なり。「相手にならぬは此岩藤が恐しいか、但しは又おくれたのか。遣は町人の娘なれば、刃物三昧は恐しい筈、怖い筈、オヽ道理ぢや、〳〵〳〵、そんならコリヤ納めましよ〳〵。ドレ〳〵〳〵〳〵、歸りましよ〳〵。ホンニ〳〵〳〵、此方にかゝつて、コレ〳〵〳〵、これ見さつしやれ、足袋も草履も砂まぶれぢやわいの。イヤコレ尾上殿、ヤ何と此草履のよごれたのを、拭いて下されぬか」「アノ私に」「オイノ」「エヽ」「いやか」「ぢやというて夫がまあ」「ホヽヽヽ、臆病者の腰拔に、刃物汚ししようより、幸な此草履」と、足にかけたる土草履、尾上が頭を丁々〳〵、是はとばかり奥女中、氣の毒餘り立騷ぐを、尾上は聲かけ、「コレ〳〵〳〵、騷ぐまい女中達、岩藤樣が此尾上を、御異見の爲に御打擲、コレわしや有難うて〳〵、母樣の御折檻と思うて、此身のふしぶ〳〵まで、有難うて忝い。イヤ申し岩藤樣、產みの親も及ばぬ御異見、エヽ有難う存じまする。此上は隨分と武藝をも心がけて、御奉公を致しましよ。又此お草履は、私がためには御教訓の此一品、申し受けまして私が守」と、懷中したる大丈夫、類希なる忠孝に、遣の岩藤呆れ果て、口をつぐんで居たりしが、「ヤア何ぢや、其草履を私に貰うて守に掛ける、アノ守にヤ、テモ恐しい辛抱な人、異見した甲斐が有る、以後をきつとお嗜み、サア〳〵〳〵行きましよ」と替草履、歩行路ひろふも氣晴しと、歸る岩藤殘れる尾上、髮も亂れて我ながら、口惜しいやら無念なやら、顏は茜とせきのぼし、こらへ〳〵しため涙、一度にどつと伏轉び、身も浮くばかり歎きしが、數多の女中立寄つて、「コレ〳〵尾上樣、アノ憎體なお局の、氣質は常から能く御存じ、お腹立はお道理なれど、いつもの事ぢやと思し召し、必お氣にさへられずと、先々屋敷へ御歸り」と、諫立つれば泣く〳〵も、かゝへ引きしめ立上り、女心の一筋に、又思ひ出す口惜涙、早寺々に暮の鐘、明日は我身も消えて行く、夕告鳥の泣く〳〵も、打連れ館へ三重急ぎ行く。

第七

星月夜、鎌倉山に風誘ふ、扇ヶ谷に棟高き、前の管領足利家の思ひ人、花の方の御館、咲續きたる花の御所、盛十寸見の奥御殿、色香爭ふ長局、武家とはいへどなまめかし。世の憂きを、空吹く風の有頂天、屈托なしの婢共、一つ所に寄集り、「オ、おなか女郎お冬女郎、軒から軒の隣部屋も事多い時は遠々しい、今更云ふに及ばねども、人目には樂に見え、奉公向のせつろしさ、人の樂しむ正月遊びも、御儀式事にかゝつてゐて、寶引一度引く事ならず。在所に居れば